

財団法人 八尾市文化財調査研究会報告92

- I 郡川遺跡 (第3次調査)
- II 水越遺跡 (第5次調査)

2006年

財団法人 八尾市文化財調査研究会



財団法人八尾市文化財調査研究会報告92

I 郡川遺跡（第3次調査）

II 水越遺跡（第5次調査）

2006年

財団法人 八尾市文化財調査研究会

は し が き

八尾市は大阪府の東部に位置し、旧大和川が形成した河内平野の中心部にあたります。古くから人々の生活の場として栄えていた地域であり、現在でもそれらの先人が残した貴重な文化遺産が数多く遺存しております。

近年、都市開発が進み各種土木工事等が増加するなか、これらの文化財を破壊から守ること、また記録保存し後世に伝承することが我々の責務であると認識する次第であります。

この度、平成6・7年度に実施いたしました郡川遺跡（第3次調査）・水越遺跡（第5次調査）の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。両遺跡は生駒山西麓に位置する縄文時代からの遺跡です。両調査では弥生時代後期末～古墳時代前期の居住域・墓域が検出され、当時の集落における土地利用の変遷を知る上で重要な成果が得られました。本書が学術研究の資料として、また文化財保護への啓発に広く活用されることを願うものであります。

最後になりましたが、この発掘調査が、関係諸機関及び地元の皆様の多大なる御理解と御協力によって進めることができましたことに深く感謝の意を表します。今後とも文化財保護に一層の御理解・御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成18年10月

財団法人 八尾市文化財調査研究会

理事長 岩崎 健二

序

1. 本書は財団法人八尾市文化財調査研究会が実施した発掘調査成果の報告書を収録したものである。
1. 本書に収録した報告は、下記の通りである。
 1. 内業整理は各現地調査終了後に着手し、平成18年7月をもって終了した。
 1. 本書の執筆・編集は当調査研究会 坪田真一が行った。
 1. 本書掲載の地図は、大阪府八尾市発行の2,500分の1地形図(平成8年7月発行)・八尾市教育委員会発行の「八尾市埋蔵文化財分布図」(平成13年度版)を使用した。
 1. 本書で用いた標高の基準はT.P.(東京湾標準潮位)である。
 1. 本書で用いた方位は、Iでは現地実測図と2,500分の1地形図から起こした座標北、IIでは座標北(日本測地系)を示している。
 1. 遺構の一部については下記の略号で示した。
竪穴住居-SI 掘立柱建物-SB 土坑-SK 溝-SD ビット-SP 河川-NR
 1. 遺物実測図の断面は須恵器を黒、石器・木器を斜線とし、他は白とした。
 1. 調査に際しては、写真・実測図等の記録とともに、カラースライドを作成している。広く活用されることを希望する。

目 次

はしがき

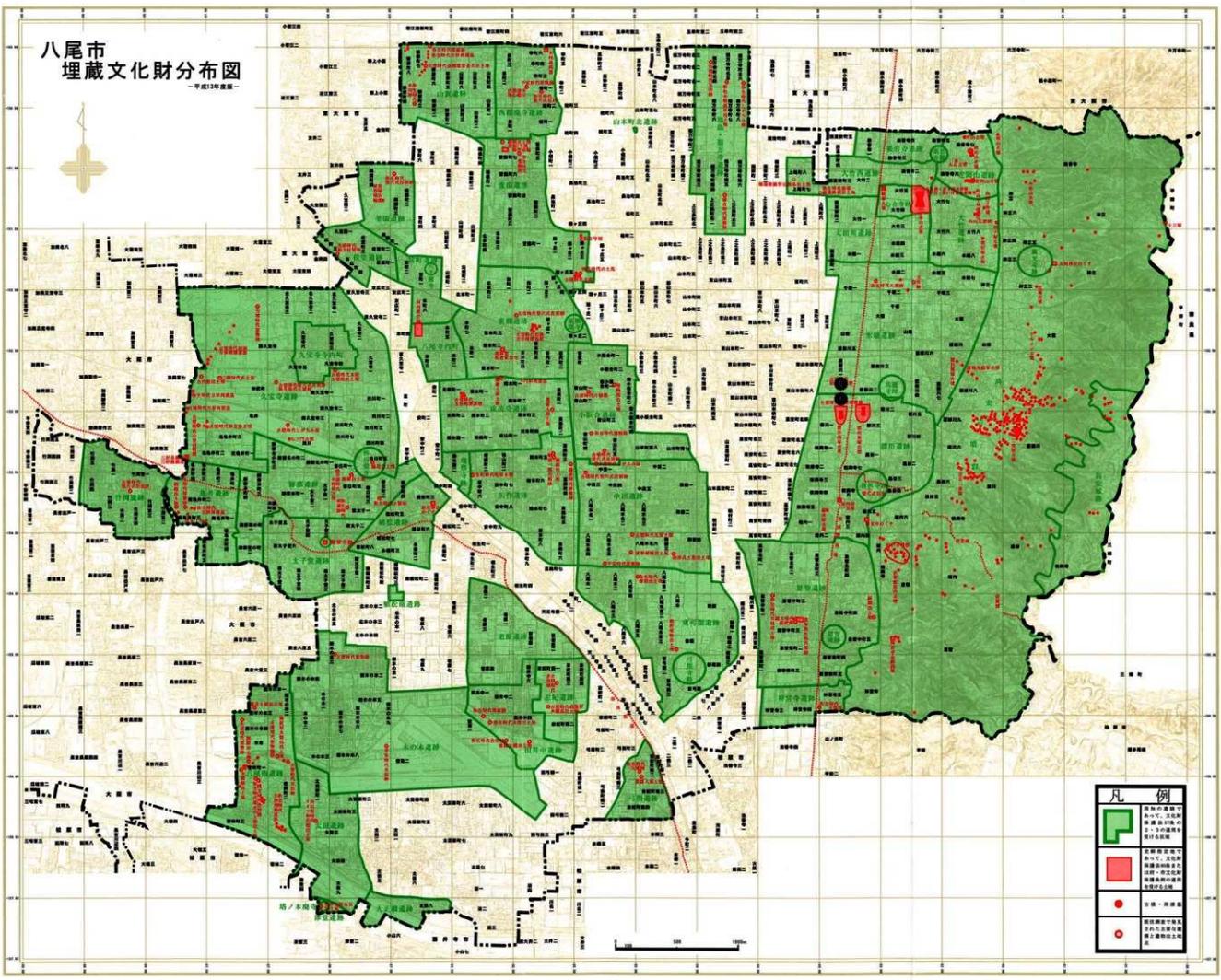
序

八尾市埋蔵文化財分布図

I 郡川遺跡第3次調査(KR94-3).....	1
II 水越遺跡第5次調査(MK95-5).....	37
報告書抄録.....	75

八尾市 埋藏文化財分布圖

—平成13年度版—



凡 例	
	埋藏文化財の埋蔵地として指定された区域
	埋藏文化財の埋蔵地として指定されていない区域
	埋藏文化財の埋蔵地として指定されていない区域
	埋藏文化財の埋蔵地として指定されていない区域

I 郡川遺跡第3次調査 (KR94-3)

例 言

1. 本書は、大阪府八尾市郡川1丁目19・10番地で実施した受水池築造工事に伴う郡川遺跡第3次調査(K R94-3)の発掘調査報告書である。
1. 本調査は、八尾市教育委員会の指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 調査は当調査研究会 坪田真一が担当した。
1. 現地調査は、平成6年5月24日～8月3日に実施した。調査面積は約1,188㎡である。
1. 現地調査には浜田千年・山内千恵子・川崎晃男・中井章匡が参加した。
1. 内業整理には上記の他、伊藤静江・岩沢玲子・岩本順子・垣内洋平・加藤邦枝・川村一吉・北原清子・竹田貴子・田島和恵・田島宣子・都築聡子・中村百合・永井律子・村井俊子・村田知子・吉川一栄・若林久美子が参加し、現地調査終了後に着手して平成18年7月をもって終了した。

本文目次

第1章 はじめに.....	1
第2章 調査概要.....	4
第1節 調査方法.....	4
第2節 基本層序.....	4
第3節 検出遺構と出土遺物の概要.....	5
第3章 まとめ.....	34

挿 図 目 次

第1図	調査地位置図	2
第2図	地区割図	4
第3図	北壁模式図	5
第4図	第1面平面図	6
第5図	第1面溝出土遺物	7
第6図	第2面平面図	10
第7図	S I 201断面図	11
第8図	S I 201出土遺物	11
第9図	1号墓断面図	13
第10図	2号墓断面図	14
第11図	3号墓断面図	15
第12図	4号墓断面図	16
第13図	墳墓出土遺物	17
第14図	土器棺墓201断面図	18
第15図	土器棺墓201出土遺物	19
第16図	S K 205断面図	20
第17図	S D 205・206出土遺物	21
第18図	S D 206断面図	22
第19図	N R 201・202断面図	23
第20図	N R 201・202出土遺物	23
第21図	第3面平面図	25
第22図	第3面遺構出土遺物	26
第23図	第3面土坑断面図	27
第24図	S W 301出土遺物	29
第25図	第4・5面平面図	30
第26図	包含層出土遺物①	32
第27図	包含層出土遺物②	33

表 目 次

表1	周辺の調査地一覧表	3
表2	第1面溝一覧表	7~9
表3	第1面溝出土遺物一覧表	9
表4	第3面ピット一覧表	28

写真目次

写真1	寺池1号墳竪穴式石室（東から）	1
写真2	教興寺軒九瓦（飛鳥時代）	3

図版目次

図版1	第1面	全景（西から） 全景（東から）
図版2	第1面	西部（北から） 東部（北から） SD103（北から）
図版3	第2面	全景（東から）
図版4	第2面	東部検出状況（東から） 全景（西から）
図版5	第2面	SI201（北から） 1号墓（北から）
図版6	第2面	2号墓（北から） 3号墓（北から）
図版7	第2面	4号墓（東から） 2号墓西周溝遺物出土状況（西から） 4号墓西周溝遺物出土状況（北から） 土器棺墓201（西から） 土器棺墓201（南から）
図版8	第2面	SK205（北から） SD206南壁 NR201土器（44）出土状況（南から） SD206（東から） NR201・202（西から）
図版9	第3～5面	第3面（西から） SW301 第4・5面（東から）
図版10	出土遺物	SD128 SD135 SI201 2号墓
図版11	出土遺物	3号墓 SD206 土器棺墓201 NR201 SK307 第1～3面
図版12	出土遺物	第2・3面 第8・10層
図版13	川土遺物	SW301
図版14	出土遺物	第1～3面

第1章 はじめに

郡川遺跡は大阪府八尾市の東部に位置し、現在の行政区画の郡川1～5丁目・教興寺1～7丁目・黒谷1～5丁目・垣内1～5丁目にあたる東西約1.1km・南北約1.2kmの範囲が遺跡範囲とされている。生駒山西麓から西に広がる河内平野に続く扇状地上に立地しており、地形的には西半部がT.P.+11～30mを測る緩斜面、東半部が30～70mを測る急斜面となっている。西側には旧大和川の主流であった玉申川・恩智川の氾濫原が広がっている。当遺跡は北側で水越遺跡、南側で恩智遺跡と接しており、東側の生駒山地西麓地域一帯には、古墳時代後期の群集墳を中心とする高安古墳群が広がっている。

当地周辺では以前から、縄文時代後期とされる磨製石斧や、弥生・古墳時代の土器が採集されており、北の水越遺跡、南の恩智遺跡と同様の遺跡の存在が想定されていた。学術的な発掘調査の歴史は比較的浅く、最初の発掘調査は、昭和63年に実施された八尾市教育委員会による遺構確認調査①であり、古墳時代中期～後期の集落が確認された。その後、八尾市教育委員会・当調査研究会により数次にわたる発掘調査が行われている。最も時代の遡る遺構としては、当調査地南約600mの⑦で弥生時代前期、南東約550mの⑩で弥生時代中期の遺構が検出されている他、南約800mの教興寺跡⑭では縄文時代後期～晩期の土器がまとめて出土しており、当該期の遺構の存在が想定できる。弥生時代後期では南約900mの⑫で土器埋納土坑、東約700mの⑪で土坑、南約300mの⑬で溝、約600mの⑨で遺物包含層が検出されている。⑬では古墳時代前期の遺物包含層が確認され、また⑦では古墳時代前期～中期の水田が検出され生産域となっていることが判明した。南東約700mの①や⑤では古墳時代中期～後期の集落が確認され、靫羽口や鉄滓、韓式系土器の出土から、この一帯については渡来系氏族が関連する製鉄集落としての性格が指摘されており、東約700mの⑬でも靫羽口等の出土から7世紀代の鍛冶関連集落の存在が考えられている。一方、高安古墳群の一面としての性格からみると、南約100mには高安古墳群の盟主墳といえる古墳時代中期末～後期初頭の前方後円墳である郡川西塚古墳・郡川東塚古墳が東西に並んで立地している。郡川東塚古墳の調査⑬⑭では、横穴式石室の基礎石が検出され石室の位置が確認された他、良好に遺存する円筒埴輪列や葺石が検出されている。南約950mの③には同時期頃の塚本塚古墳が立地し、またその北の⑫でも後期古墳の周溝である可能性がある埴輪出土遺構が検出されている。さらに①では須恵器や鉄釘の出土、⑬では凝灰岩片や鉄釘片の出土から、それぞれ古墳の存在が想定されている。教興寺跡⑭で検出された寺池1号墳は、高安古墳群内で唯一確認された竪穴式石室を有する古墳として注目される。次に歴史時代をみると、古代よりの主要街道である東高野街道が遺跡範囲内を南北に通っており、この街道沿いには東約400mに高麗寺推定地、南約800mに教興寺跡と古代寺院が立地している。教興寺は東高野街道と東西に通る信貴越道との交差点に位置し、同様に高麗寺

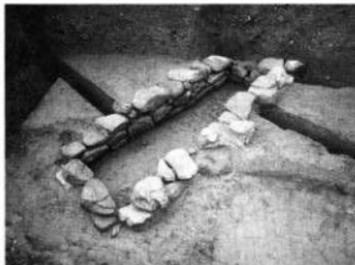


写真1 寺池1号墳竪穴式石室(東から)



第1図 調査地位置図

は立石嶺道との交差点にあたり、いずれの寺院も交通の要所に位置していることがわかる。教興寺跡²³では寺院に関連する建物等の検出はなかったが、飛鳥時代の軒丸瓦の出土により創建時期が明らかになった。なお当遺跡は河内国高安郡衙の候補地とされている。鎌倉時代では^⑨で遺構が確認され、東約500mの^⑭では大規模な地業が行われているようである。室町時代では^⑦での石組井戸が特筆される。

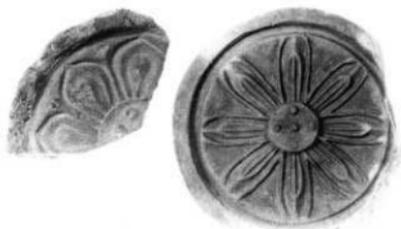


写真2 教興寺軒丸瓦(飛鳥時代)

以上のように郡川遺跡は、南方の生駒山地西麓に位置する恩智遺跡と同様、縄文時代には扇状地末端部に集落が形成され、以降連続と続く集落遺跡であり、また高安古墳群の一画としても重要な位置を占めている。

このような情勢下の平成5年、八尾市水道局から、八尾市郡川1丁目19・10における受水池築造の届出書が、八尾市教育委員会文化財室(現、生涯学習部文化財課)に提出された。これを受けた同文化財室では、当該地が郡川遺跡範囲内にあたることから、平成5年10月4・5日に、建築予定地内に4か所のトレンチ(第1～4区)を設定して遺構確認調査(93-336)を実施した。その結果、弥生時代後期の遺構面が検出され、同文化財室では発掘調査が必要であると判断し、事業者にその旨を通知した。そして発掘調査を実施することが両者で合意され、調査にあたっては八尾市・文化財室・当調査研究会の三者協定により、当調査研究会が主体となって平成6年5月24日から発掘調査を実施することとなった。

表1 周辺の調査地一覧表

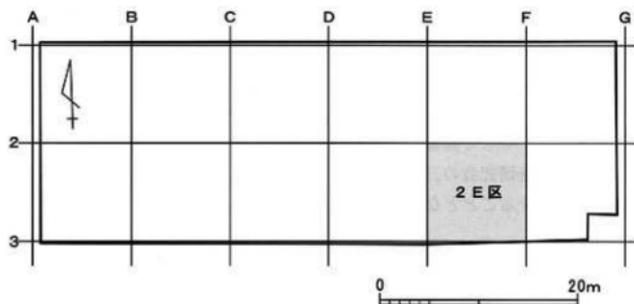
番号	遺跡名	調査主体(略号)	調査年月	文献	
①	郡川	市教委(63-193)	昭和63年9月	八尾市文化財調査報告19	1989
②	郡川	市教委(半銅池)	平成元年11月	八尾市文化財調査報告21	1990
③	郡川	市教委(89-224)	平成元年7月	八尾市文化財調査報告20	1990
④	郡川	市教委(89-399)	平成2年1月	八尾市文化財調査報告21	1990
⑤	郡川	研究会(KR89-1)	平成2年2月	財団法人八尾市文化財調査研究会報告57	1997
⑥	郡川	市教委(89-032)	平成元年8月	八尾市文化財調査報告21	1990
⑦	郡川	研究会(KR90-2)	平成2年5月～8月	財団法人八尾市文化財調査研究会報告64	1999
⑧	郡川	市教委(90-105)	平成2年5月	八尾市文化財調査報告23	1991
⑨	郡川	市教委(93-075)	平成5年7月～8月	八尾市文化財調査報告29	1994
⑩	郡川	市教委(96-275)	平成8年9月	八尾市文化財調査報告36	1997
⑪	郡川	市教委(96-691)	平成9年2月・8月	八尾市文化財調査報告38	1998
⑫	郡川	市教委(97-696)	平成10年3月	八尾市文化財調査報告40	1999
⑬	郡川	市教委(97-706)	平成10年4月	八尾市文化財調査報告40	1999
⑭	郡川	市教委(98-400)	平成10年12月	八尾市文化財調査報告40	1999
⑮	郡川	研究会(2002-65)	平成14年11月	八尾市文化財調査報告48	2003
⑯	郡川	研究会(2002-304)	平成15年9月	八尾市文化財調査報告49	2004
⑰	郡川	研究会(2003-219)	平成15年10月	八尾市文化財調査報告49	2004
⑱	郡川東塚古墳	市教委(2000-306)	平成13年2月～12月	八尾市文化財調査報告46	2002
⑲	郡川東塚古墳	研究会(T2001KOH)	平成13年10月～12月	八尾市立埋蔵文化財調査センター報告7	2005
⑳	郡川東塚古墳	市教委(2002-153)	平成14年8月	八尾市文化財調査報告48	2003
㉑	教興寺跡	市教委	昭和58年2月	八尾市文化財調査報告9	1983
㉒	教興寺跡	市教委(91-326)	平成3年10月	八尾市文化財調査報告26	1992
㉓	教興寺跡	研究会(KO91-1)	平成3年12月～4年1月	財団法人八尾市文化財調査研究会報告72	2002
㉔	教興寺跡	研究会(KO92-2)	平成3年11月～12月	財団法人八尾市文化財調査研究会報告72	2002

第2章 調査概要

第1節 調査方法

今回の調査は高安受水場の受水池築造工事に伴う調査で、当調査研究会が郡川遺跡内で行った第3次調査である。調査区は東西約60m、南北約20mのほぼ長方形を呈しており、面積は約1188㎡を測る。調査は前述の遺構確認調査の成果をもとに、現地地下約0.5～1.1mまでを機械掘削し、以下は人力掘削により実施した。なお第4面以下についてはトレンチを設定して部分調査とした。また3か所で実施した下層確認調査においては機械を使用した。

地区割については、調査区平面形に合わせて10m方眼を任意に設定した。そして南北ラインにアルファベット(西からA～G)、東西ラインに数字(1～3)を冠し、10m四方の地区名は北西交点のポイント(1A～3F)に代表させた。なおこの南北ラインは座標北から東に約2.0度振っている。

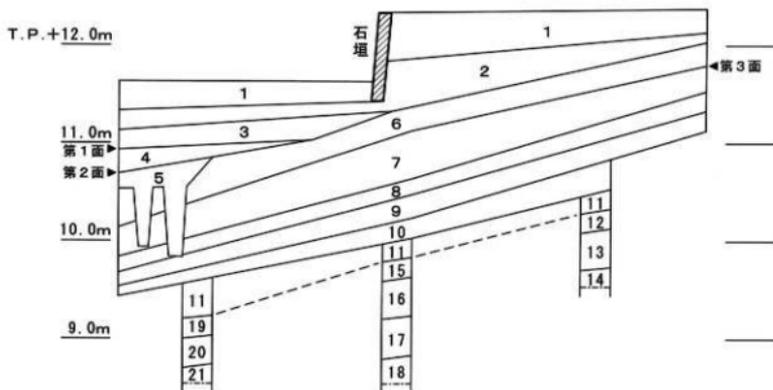


第2図 地区割図

第2節 基本層序

当調査地の調査前の状況は段々畑であったため、現地表面の標高は調査地中央のやや西で0.6～0.7mの段差があり、東部が高くなっていた。

第1層は調査直前までの耕土・床土、また段々畑造成に伴う盛土であり、ほぼ機械掘削部分である。これより下の層位は、当地の現地形のとおり東から西に下がる傾斜堆積がみられた。また若干南から北にも下がっている。第2・3層は近世頃までの土器を少量含んでいる。第4層は調査区西部に堆積しており、古墳時代前期(布留式期)までの土器を含んでいる。第6層以下は調査区のはほぼ全域に堆積している。第6・7層は水成層で、第6層が土壌化部分と捉えられる。東部がシルト、西部では砂礫層優勢となっている。弥生時代前期の土器を主として、縄文時代晩期から弥生時代にわたる土器を含んでいる。第8～11層は比較的安定した環境が窺えるシルト～粘土の層相である。第12層以下は粘土～粗粒砂の互層状の堆積である。第8層以下の遺物の量は希薄で、第8層からは縄文時代晩期～弥生時代前期、第9～11層からは縄文時代晩期の土器が極少量出土している。第12層以下からは遺物は出土していない。第4・6層の上面が第1面で、標高は



- | | |
|----------------------|-------------------------|
| 1. 旧耕土・床土・盛土 | 12. 灰色極細粒砂～シルト |
| 2. 黄灰褐色系細粒砂混シルト | 13. 暗灰褐色粗粒砂混粘土質シルト |
| 3. 黄灰褐色系粘土質シルト | 14. 淡灰褐色礫混細粒砂 |
| 4. 黄灰色系シルト質粘土～粘土質シルト | 15. 黒褐色細粒砂混粘土 |
| 5. N R201 | 16. 灰褐色細粒砂混粘土質シルト |
| 6. 褐灰色系細粒砂混シルト | 17. 淡灰褐色極細粒砂～粗粒砂 |
| 7. 黄褐色系シルト～砂礫 | 18. 褐灰色粘土質シルト |
| 8. 暗灰黒色粗粒砂混粘土質シルト | 19. 暗灰褐色粗粒砂混細粒砂 |
| 9. 暗灰黒色細粒砂混シルト | 20. 暗灰青色極細粒砂混シルト～粘土質シルト |
| 10. 暗灰黒色極細粒砂混粘土 | 21. 暗灰色細粒砂混粘土 |
| 11. 暗灰色砂礫混粘土質シルト～粘土 | |

第3図 北壁模式図

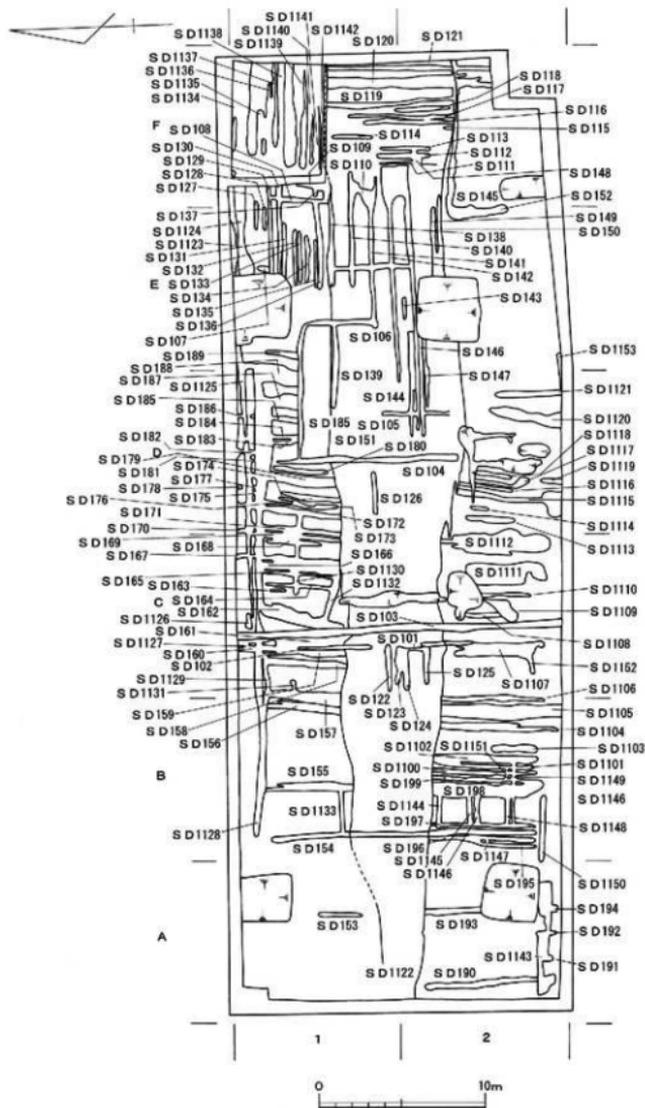
T.P.+12.05～10.95mを測る。第6層上面が第2面で、標高はT.P.+12.05～10.65mを測る。第7層上面が第3面で、標高はT.P.+11.85～10.25mを測る。

第3節 検出遺構と出土遺物の概要

(第1面)

第4・6層の上面で溝152条(SD101～1152)を検出した。このうちSD101～152は、SD1122埋没後に掘削されていることが確認できる溝である。SD101～121、SD153～1121は南北方向、SD122～150、SD1122～1152は東西方向の溝である。またSD151・152はL字型に屈曲する溝である。断面形状は逆台形・枕形、深さは10cm程度のものが多くを占める。埋土は前者が旧耕土と類似する黄灰色系の細粒砂混シルト、後者がおおむね灰黄色系～灰褐色系の細粒砂～粗粒砂混粘土質シルトである。なおSD103は竹筒暗渠で、内部に連結させた竹(長さ11～14m)を包蔵していた。この暗渠は南端で西に屈曲するようで、調査区南壁内にも東西方向に設置された同様の竹が遺存していた。SD101～152が近世～近代、他が中世～近世頃の農耕に関連する溝群であろう。各溝の法量等は表2にまとめた。

なお調査段階では認識が無かったが、調査区中央を東西方向に直線的に伸びる幅広の溝SD1122が水田部分、この北側・南側が高畑であると考えている。すなわち当地は条里地割に沿った



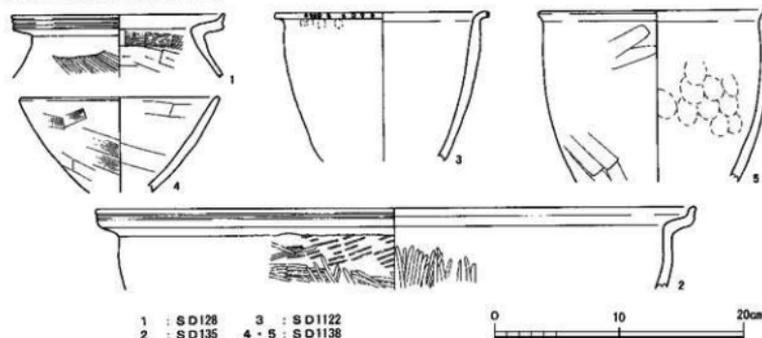
第4图 第1面平面图

東西方向に長い短冊型の烏畑・水田で構成された耕作地であったと捉えられる。烏畑は幅7m以上・長さ58m以上を測る大規模なものとなる。北部の池島・福万寺遺跡では16世紀代にこのような発達した烏畑が認められる。

SD1122

調査区の中央を東西方向に直線的に伸びる溝である。幅は最大約8.0mを測り、調査区中央から西に行くほど幅を減じているが、これは肩部の削平によるものと捉えられる。中央での深さは約0.3mを測る。断面はほぼ皿状を呈するが、西半部では肩の方向に平行する幅1～2mを測る浅い落ち込みが底部に認められた。この落ち込みも耕作に伴うものと考えられることから、SD1122が水田であった可能性が高い。埋土、すなわち作土は暗灰黄色系の細粒砂～粗粒砂混粘土質シルトを基調とする。

各溝からの出土物については表3にまとめた他、弥生土器(1:SD128、2:SD135、3:SD1122、4・5:SD1138)を図化した。これらの土器はいずれも下層から巻き上げられたもの、あるいは土地の改変により混入したものである。甕(1)は口縁端部を狭み上げ、外端面に3条の沈線を巡らせる。調整は外面平行タタキ後ハケ、内面上位ハケ、下位ヘラケズリである。鉢(2)は復元口径48.2cmを測る大形で、受口状口縁の外面に2条の沈線を巡らせる。内外面にヘラミガキを施すので、体部外面には平行タタキが残る。甕(3・5)は口縁部が短く外反するもので、3は口縁端面にヘラによる刻み目を施す。体部調整は両方共にナデである。鉢(4)は内外面板ナデを施す。これらの土器はいずれも生駒西麓産の胎土で、1・2・4は河内第V様式前半、3・5は第I様式に比定される。



第5図 第1面溝出土遺物

表2 第1面溝一覧表

遺構名	地区	長さ(m)	幅(cm)	深さ(cm)	遺構名	地区	長さ(m)	幅(cm)	深さ(cm)
SD101	2C			4	SD108	1F	3.5	30	8
SD102	〃			4	SD109	〃	1.7	-	6
SD103	1・2C			20	SD110	〃	1.4	50	10
SD104	1・2D		35	7	SD111	1・2F	1.9	10	16
SD105	〃	4.0	18	6	SD112	〃	3.2	32	16
SD106	〃	4.5	32	6	SD113	〃	3.0	18	12
SD107	1E	0.8	32	6	SD114	1F	2.5	20	4

遺構名	地区	長さ(m)	幅(cm)	深さ(cm)	遺構名	地区	長さ(m)	幅(cm)	深さ(cm)
SD115	2F	0.5	22	2	SD172	1D	6.3	48	9
SD116	1・2F	5.4	28	5	SD173	*	4.5	32	8
SD117	*	6.3	20	5	SD174	*	0.8	14	7
SD118	*	3.3	28	6	SD175	*	0.1	22	11
SD119	*	7.5	31	5	SD176	*	3.7	40	9
SD120	*	9.8	65	5	SD177	*	0.1	15	8
SD121	*	9.8	30	10	SD178	*	0.3	28	5
SD122	1C	2.9	25	5	SD179	*	5.0	69	11
SD123	1・2C	2.3	25	12	SD180	*	3.2	28	12
SD124	2C	2.5	31	7	SD181	*	0.2	10	2
SD125	*	2.2	32	7	SD182	*	1.0	35	5
SD126	1D	2.6	20	7	SD183	*	1.5	30	16
SD127	1E・F	1.7	22	5	SD184	*	1.5	25	14
SD128	*	1.5	21	7	SD185	*	2.8	38	10
SD129	*	4.9	22	4	SD186	*	0.3	20	8
SD130	*	5.4	26	7	SD187	*	2.1	98	15
SD131	1E	3.3	26	6	SD188	1D・E	3.2	115	10
SD132	*	3.5	20	5	SD189	1E	2.0	40	4
SD133	*	3.2	24	4	SD190	2A	6.7	40	7
SD134	*	3.0	24	6	SD191	*	0.6	25	5
SD135	*	2.9	18	4	SD192	*	1.3	24	7
SD136	1E・F	5.3	31	8	SD193	*	3.3	45	10
SD137	1F	0.5	20	2	SD194	*	0.4	35	12
SD138	1E・F	5.2	48	5	SD195	2B	3.3	28	5
SD139	1D・E	5.1	38	8	SD196	*	6.4	32	6
SD140	1E・F	7.0	31	9	SD197	*	6.2	28	5
SD141	*	8.2	30	8	SD198	*	6.6	95	12
SD142	1D~F,2D・E	13.2	30	11	SD199	*	6.6	32	7
SD143	2E	1.4	20	6	SD1100	*	6.3	30	5
SD144	2D・E	6.5	35	6	SD1101	*	6.0	30	5
SD145	2D~F	16.3	38	8	SD1102	*	6.3	55	6
SD146	2D・E	6.3	25	10	SD1103	*	2.8	40	8
SD147	*	4.3	30	7	SD1104	*	7.0	58	11
SD148	2F	1.0	58	10	SD1105	*	7.2	98	12
SD149	2E・F	4.2	28	9	SD1106	2B・C	6.1	38	7
SD150	*	3.5	24	8	SD1107	2C	5.5	78	9
SD151	1D・E	11.9	30	9	SD1108	*	2.4	30	8
SD152	2E・F	12.3	70	13	SD1109	*	2.1	95	14
SD153	1A	2.6	28	8	SD1110	*	3.1	25	8
SD154	1・2B	15.8	33	10	SD1111	*	4.9	138	12
SD155	1B	5.2	50	11	SD1112	2C・D	6.6	125	10
SD156	*	4.4	50	7	SD1113	2D	3.0	38	10
SD157	1C	4.2	62	18	SD1114	*	1.1	22	7
SD158	*	4.8	40	8	SD1115	*	6.3	20	13
SD159	*	5.1	42	7	SD1116	*	3.2	20	8
SD160	*	2.2	35	18	SD1117	*	3.3	22	10
SD161	*	6.8	58	6	SD1118	*	2.2	25	10
SD162	*	5.2	85	15	SD1119	*	1.3	30	8
SD163	*	0.9	17	7	SD1120	*	4.4	70	8
SD164	*	3.9	22	8	SD1121	*	3.9	36	8
SD165	*	4.2	20	9	SD1122	1・2A~F	57.5	220~800	10~35
SD166	*	4.1	42	14	SD1123	1E	3.5	-	7
SD167	*	6.2	30	8	SD1124	1E・F	13.4	92	9
SD168	*	3.3	32	9	SD1125	1C~E	16.8	46	7
SD169	1C・D	5.3	32	9	SD1126	1C	1.0	38	6
SD170	1D	0.5	20	9	SD1127	*	2.0	35	19
SD171	1C・D	5.4	28	8	SD1128	1B~E	2.9	110	10

遺構名	地区	長さ(m)	幅(cm)	深さ(cm)	遺構名	地区	長さ(m)	幅(cm)	深さ(cm)
SD1129	1B・C	3.0	29	10	SD1142	*	6.5	30	6
SD1130	1C・D	4.8	32	8	SD1143	2A	6.9	72	9
SD1131	1C	0.6	28	9	SD1144	2B	2.0	28	5
SD1132	*	3.2	50	15	SD1145	*	1.6	33	9
SD1133	1B	2.4	28	11	SD1146	*	1.6	35	8
SD1134	1F	5.6	15	8	SD1147	*	2.0	28	7
SD1135	*	2.8	40	8	SD1148	*	1.5	38	9
SD1136	*	4.3	48	12	SD1149	*	3.6	28	6
SD1137	*	3.5	22	5	SD1150	2A・B	4.1	36	10
SD1138	*	6.3	49	7	SD1151	2B	0.6	15	6
SD1139	*	6.4	75	5	SD1152	2C	1.1	32	7
SD1140	*	6.3	36	7	SD1153	2D・E	2.3	35	5
SD1141	*	6.5	49	5					

表3 第1面溝出土遺物一覧表

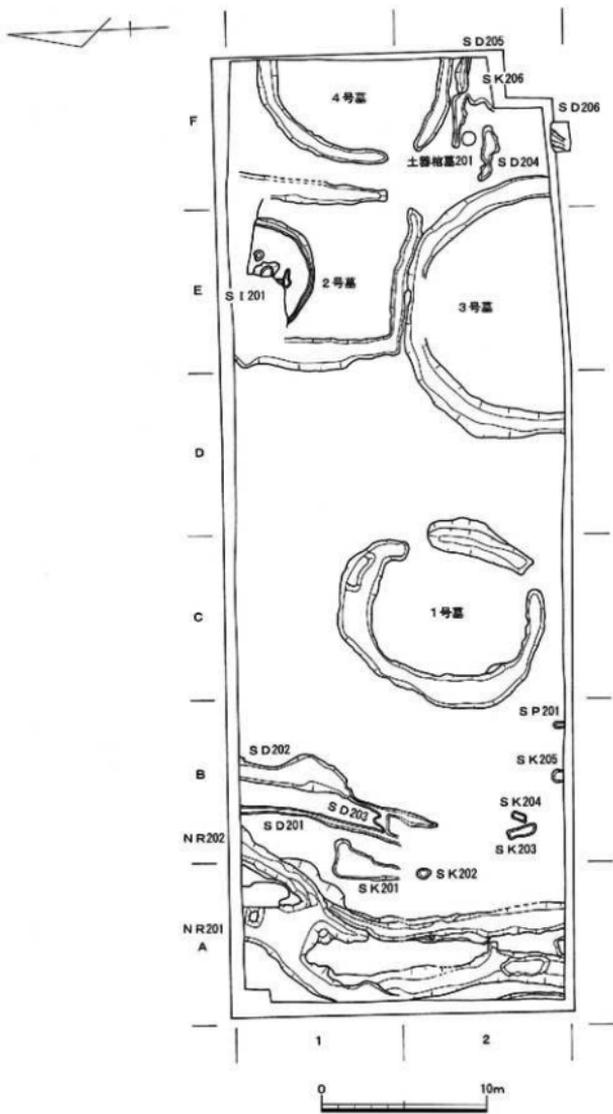
遺構名	出土遺物	遺構名	出土遺物
SD102	V様式、奈良時代土師器	SD173	弥生
SD103	弥生	SD176	土師器
SD124	V様式	SD179	弥生
SD128	V様式 (1)	SD1101	土師器
SD134	弥生	SD1105	弥生、庄内、土師器、須恵器、サヌカイト片
SD135	V様式 (2)	SD1107	V様式
SD136	弥生	SD1108	時期不明高杯脚部
SD151	縄文晩期、弥生、庄内	SD1109	弥生
SD152	弥生	SD1110	弥生、サヌカイト片
SD154	V様式	SD1111	弥生
SD155	庄内	SD1112	V様式
SD158	庄内、土師器	SD1115	土師器皿、土師器
SD161	土師器	SD1117	弥生
SD162	弥生、土師器	SD1121	弥生
SD166	弥生、庄内	SD1122	I・Ⅲ・V様式、布留式土器、須恵器、瓦管輪、サヌカイト片 (3)
SD167	弥生、庄内	SD1124	サヌカイト片
SD168	弥生、庄内	SD1128	弥生、庄内
SD169	弥生、庄内	SD1138	弥生、I様式 (4・5)
SD170	弥生、庄内	SD1140	V様式
SD172	弥生		

(第2面)

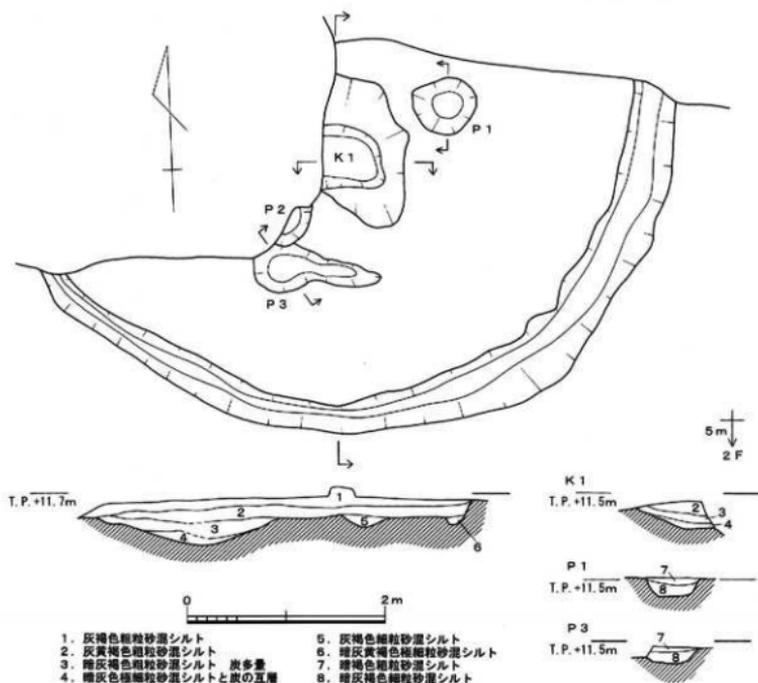
第6層上面で竪穴住居1棟(SI201)、墳墓4基(1~4号墓)、土器棺墓1基(土器棺墓201)、土坑6基(SK201~206)、溝6条(SD201~206)、ピット1個(SP201)、河川2条(NR201~202)を検出した。

SI201

調査区東部1E区に位置し、平面円形を呈する竪穴住居の南半部を検出した。検出面の標高は約T.P.+11.7mを測る。2号墓墳丘の北部で重複する位置にあたり、住居の北部は2号墓周溝に削平されている。また西部は遺構確認トレンチにより削平されている。復元すると直径7m程度の規模となる。壁は高さ10~28cmが遺存している。住居内埋土は上層が灰褐色粗粒砂混シルト、下層が灰黄褐色粗粒砂混シルトで、ほぼ水平な堆積状況を呈している。床面では壁溝、炉(K1)、支柱穴(P1~3)を検出した。壁溝は幅24~54cm、深さ約10cmを測り、幅は東半部が広がっている。壁溝埋土は暗灰黄褐色極細粒砂混シルトである。炉(K1)は中央よりやや南と考えられる位置で検出した。平面不定形で、断面は二段掘り状を成す部分があり、外側の肩からなだらかに10cm程度掘った後、中央部をさらに20cm程度掘り窪めている。平面の規模は外側の肩部で南北160cm以上・東西80cm以上、内側の肩部で南北64cm・東西64cm以上を測る。埋土は底面に沿って



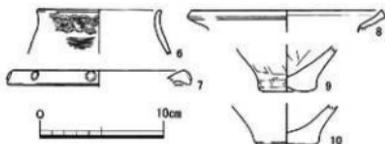
第6图 第2面平面图



第7図 SI 201断面図

堆積する2層からなり、上層が暗灰褐色粗粒砂混シルト(炭多く含む)、下層が灰褐色極細粒砂混シルトと炭層の互層である。主柱穴(P1~3)は炉に近接する位置で検出され、炉の北東に1個(P1)、南西に2個(P2・3)が確認された。後者の2個は切り合っており、柱の立て替えによるものと考えられる。規模(径・深さ)は、P1-64×58cm・23cm、P2-52×20cm以上・8cm以上、P3-54×50cm・18cmである。埋土は共通で上下2層からなり、上層が暗褐色粗粒砂混シルト、下層が暗灰褐色細粒砂混シルトである。P3から拳大の礫1個が出土している。これらの主柱穴の位置関係から推定される柱構成は、やや中央寄りの4本柱となろう。なおP3からは東に伸びる溝(長さ70cm・幅24cm・深さ7cm)が派生している。住居内南東部では床面から壁溝上部にかけて拳大の礫の集積が認められたが、性格は不明である。

遺物は住居埋土・壁溝・K1・P1・P3



第8図 SI 201出土遺物

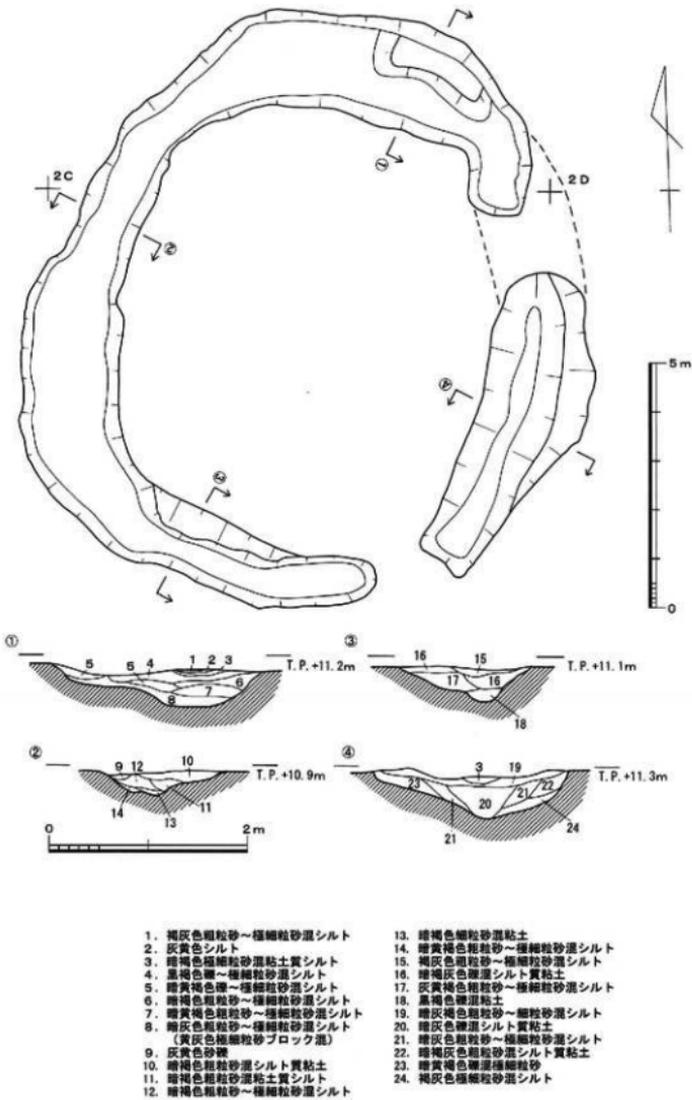
から弥生時代中期～古墳時代初頭(庄内式期)の土器が出土しているが、いずれも小片である。6～10を図化した。8がP1出土、他は住居埋土出土である。6は復元口径10.0cmを測る短頸壺で、外面に櫛播波状文・直線文を施す。色調は明褐色。7は広口壺で、口縁部外端面に円形浮文を付す。8は甕口縁部、9・10は底部である。これらの内、6は弥生時代中期、7は弥生時代後期末～庄内式期、8は弥生時代後期前半に比定される。いずれも生駒西麓産である。

1号墓

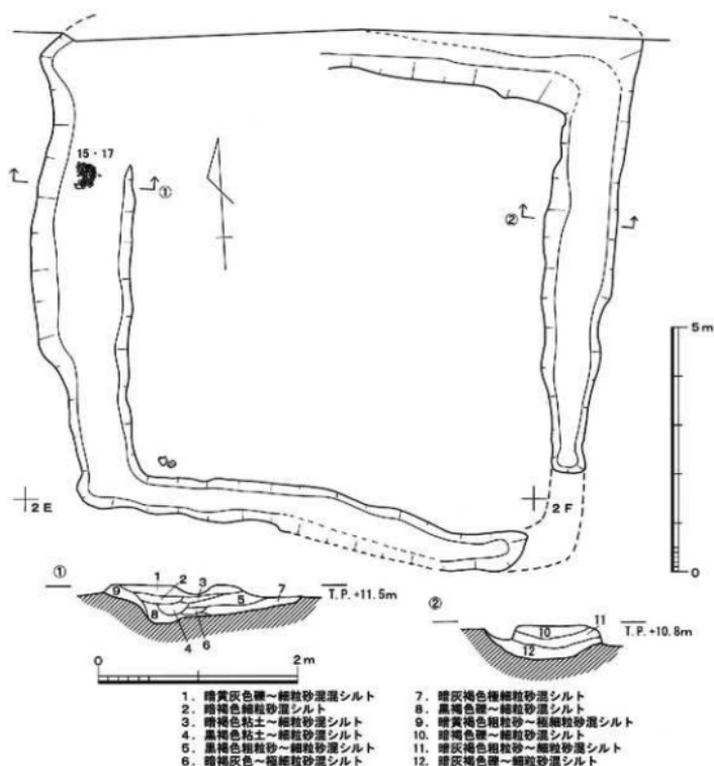
調査区中央南部の1・2B～D区で検出した。地形的には東から西に伸びる丘陵の先端に立地しているといえ、検出標高は約T.P.+11.9mである。平面形は長方形を呈し、長軸の方向は北から東に約13度振っている。墳丘盛土は後世に削平されており、また周溝北東角部は第1面SD1122によって削平されている。墳丘規模は長辺約8.7m・短辺約7.5m、周溝を含めると長辺約12.2m・短辺約11.0mを測る。周溝は幅1.0～2.25m・深さ36～50cmを測り、周溝底部のレベルは西側が約20cm低くなっている。周溝の南東角部は浅くなり、陸橋部を設けていた可能性がある。周溝断面は逆台形に近いもので、埋土はシルトを基調とする24層を確認した。堆積状況からみて自然堆積であり、埋没速度は緩やかなものであったと捉えられる。遺物は墳丘部分・周溝から古墳時代前期(布留式期)までに比定される土器が出土しているが、弥生時代後期の土器が多くを占めている。弥生土器(11・12)、土師器(13・14)を図化した。11は長頸壺で、復元口径13.2cmを測る。調整は外面ハケ後ヘラミガキ、内面下半ヘラミガキである。12は壺底部で、外面に縦方向のヘラミガキが認められる。13・14は小形器台である。13は砂粒を多く含む胎土、14は精良な胎土で別個体である。13は口径9.4cm、14は底径11.0cmを測る。11～13は生駒西麓産である。11・12は弥生時代後期、13・14は庄内式期新相に比定される。11・13は墳丘部分、12・14は南東部周溝埋土の出土である。

2号墓

調査区東部、1・2E・F区で検出した。検出標高は約T.P.+11.8mである。平面形は方形を呈し、主軸の方向は北から東に約4.5度振っている。墳丘規模は南北約8.5m・東西約8.2m、周溝を含めると南北10.5m以上・東西約11.7mを測る。周溝は幅2.0～1.25m・深さ5～40cmを測る。周溝断面は逆台形から皿状を呈し、埋土はシルトから成る12層を確認した。墳丘盛土は後世に削平されており、墳丘北西角が遺構確認トレンチ(第1区)により削平されている他、周溝の南東角は第1面SD1122によって削平されている。遺物は周溝から弥生時代中期～古墳時代前期(布留式期)に比定される土器が出土しており、15～22を図化した。15は土師器広口壺で、ほぼ完形に復元され、口径15.4cm・器高26.4cm・底径3.8cm・体部最大径24.6cmを測る。調整は内面ナデで、外面はヘラミガキと思われるが不明瞭である。体部下位に黒斑を有する。庄内式期新相に比定されよう。16は土師器壺底部である。調整は外面ヘラミガキで、底部付近ヘラケズリ、内面はハケである。体部下位に黒斑を有する。17は土師器庄内式壺で、完形近くに復元できる。口縁端部に1条の沈線を巡らせる。調整は外面上半細目(7本/cm)の平行タタキ、下半ハケ、内面ヘラケズリである。口径14.4cm・器高18.4cm・体部最大径18.1cmを測る。色調は暗灰黄色。庄内式期新相に比定される。18は土師器壺で、復元口径14.4cmを測る。調整は外面平行タタキ後ハケ、内面ハケである。庄内式期に比定される。19は土師器壺で、復元口径21.6cmを測る。調整は外面ハケ、内面ナデである。鉢の可能性もある。20は弥生土器壺で底径6.8cmを測る。外面平行タタキである。

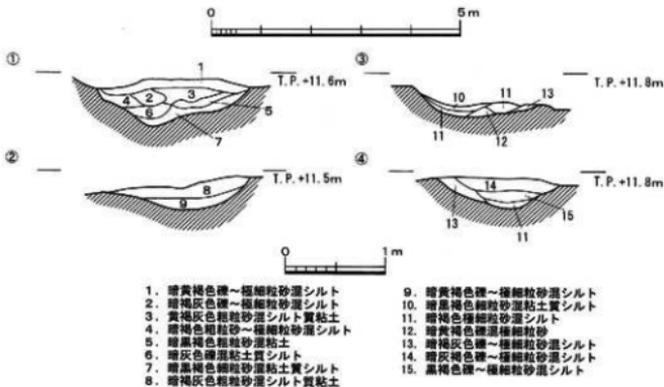
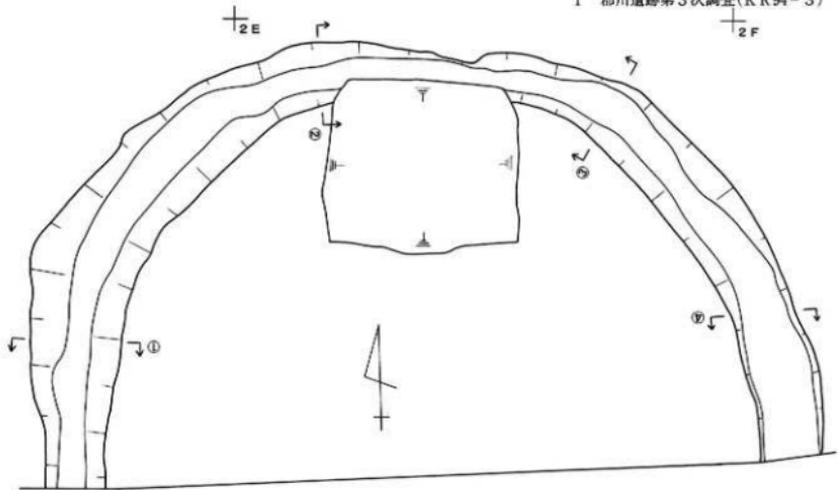


第9図 1号基平断面図



第10図 2号墓平面図

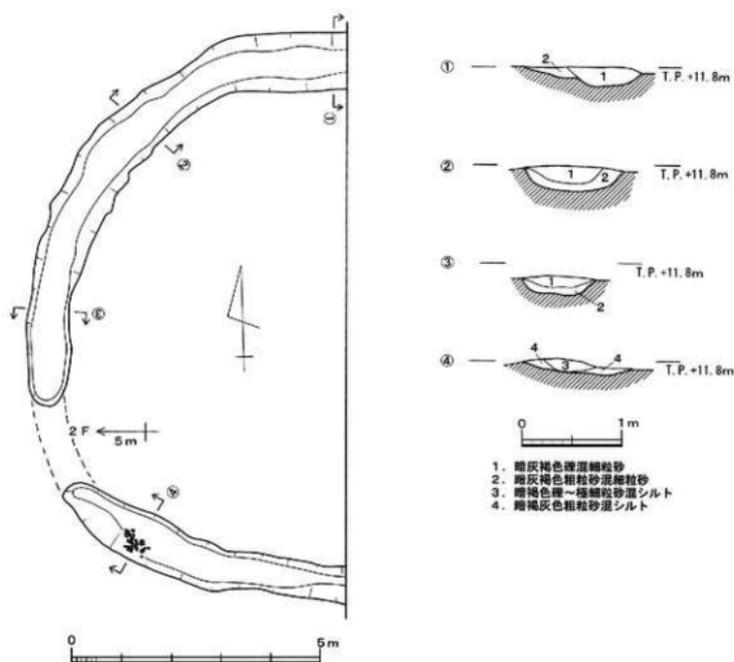
時期は後期初頭頃が考えられる。21は土師器高杯の脚部で、脚柱部外面にヘラミガキ状の面取りを施し、裾部に4方向の円孔を穿つ。22は3方向に円孔を穿つ脚部であるが器種不明である。上部は中央が窪む円盤状を成しており、窪み内側上端に破断面が認められる他、円盤部上面内側には剥離部分とも考えられる焼成不良部分が見られる。杯部の欠損した高杯とも考えられるが、この場合杯底部の直径が約7.0cmと非常に小さくなり断定はできない。15・17・19・21・22は西周溝、16は南周溝、18・20は東周溝出土である。これらの土器はいずれも生駒西麓産である。西周溝から出土した庄内式期新相に比定される15・17は、土圧により押しつぶされた状況であり、墳丘上から転落した供獻土器である可能性が高く、2号墓の時期を示していると捉えられる。なお北側溝掘削時に出土した複合口縁壺(71)は、2号墓北周溝の遺物である可能性がある。



第11図 3号墓断面図

3号墓

2号墓の南側で全体のほぼ北半分を検出したもので、検出標高は約T.P.+11.8mを測る。平面形は円形を呈し、墳丘規模は東西の直径で約13.2m、周溝を含めると約15.7mを測る。周溝は幅1.3～2.15m・深さ32～50cmを測る。周溝北部は2号墓南周溝と接しているが、上部が第1面SD1122に削平されており、切り合い関係等は明確にはできなかった。周溝断面は逆台形に近いもので、埋土はシルトを基調とする15層を確認した。周溝からは古墳時代初頭(庄内式期)までに比定される土器が出土している。弥生土器4点(23～25)を図化した。23は甕で、復元口径20.0cmを



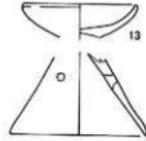
第12図 4号墓平面図

測る。摘み上げた口縁部外端面に段を成す。外面調整はハケである。後期前半に比定される。24・25は壺である。24は外面ハケ、内面ナデで、肩部外面にヘラ記号を有する。25は底部で内面ハケ調整。23・25は生駒西麓産、24は淡灰褐色を呈する非生駒西麓産である。23・24は東部、25・26は西部出土である。

4号墓

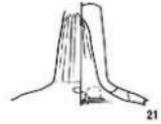
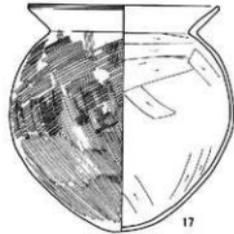
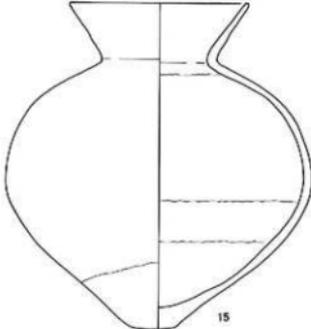
調査区東端で全体のはほぼ西半分を検出したもので、検出標高は約T.P.+11.9mを測る。平面形は円形を呈し、墳丘規模は南北の直径で約9.7m、周溝を含めると約11.6mを測る。周溝は幅1.2～0.7m・深さ10～38cmを測る。周溝断面は逆台形に近いもので、埋土は細粒砂～シルトから成る4層を確認した。周溝の一部は第1面SD1122によって削平されている。周溝からは古墳時代初頭(庄内式期)までに比定される土器が出土している。弥生土器6点(26～31)を図化した。26は長頸壺で、復元口径13.4cm・口頸部高14.6cmを測る。外面調整はヘラミガキで、内面には頸部接合痕が明瞭に残る。底部(27)は胎土・色調の様相から26と同一個体の可能性が高い。28は高杯で、復元口径23.4cmを測る。口縁部外面上下に沈線を巡らせる。杯底部外面ハケ調整である。29は鉢で、復元口径16.7cmを測る。全体に粘土紐接合痕が明瞭に認められる。30は甕、31は壺の底部と

1号墓

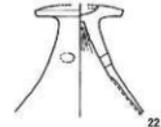


14

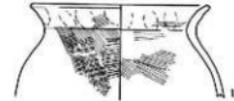
2号墓



21



22



18



20

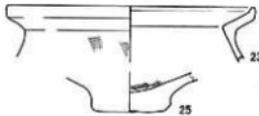


15



19

3号墓

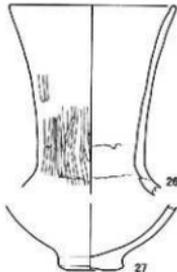


23

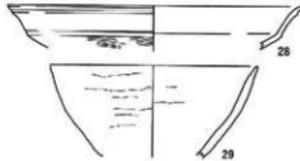


24

4号墓



26



28



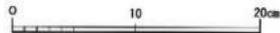
30



31



27



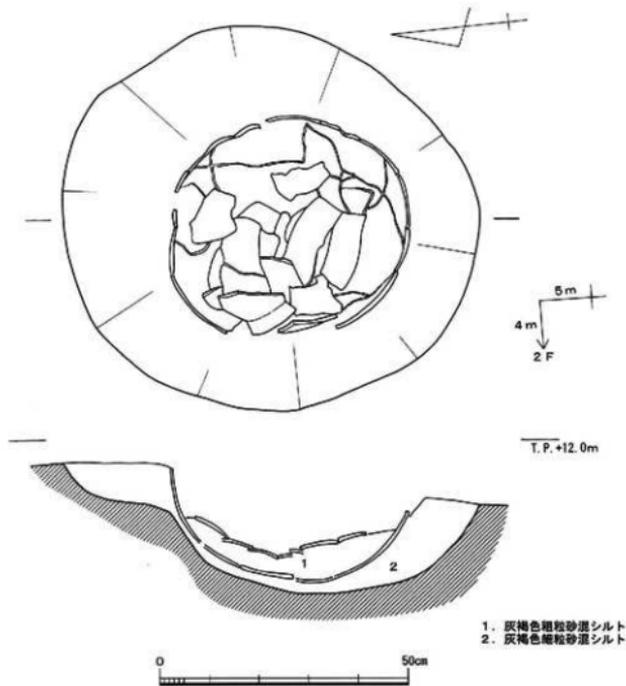
第13回 墳墓出土遺物

考えられる。外面調整は30が平行タタキ後ハケ。31はハケである。これらの土器はいずれも生駒西麓産で、時期は後期に比定される。30が北西部、他は南部出土である。

これらの墳墓は盛土部分が完全に削平され、主体部は検出されなかった。周溝内出土土器からは2号墓が庄内式期新相に位置付けられ、3・4号墓からは庄内式期まで、1号墓からは布留式期までの土器が出土しており、東から順に造墓された可能性があり、墳形では円形→方形の変遷が看取される。但し1号墓に比して2～4号墓は平面形が整っており、新しい様相といえる。

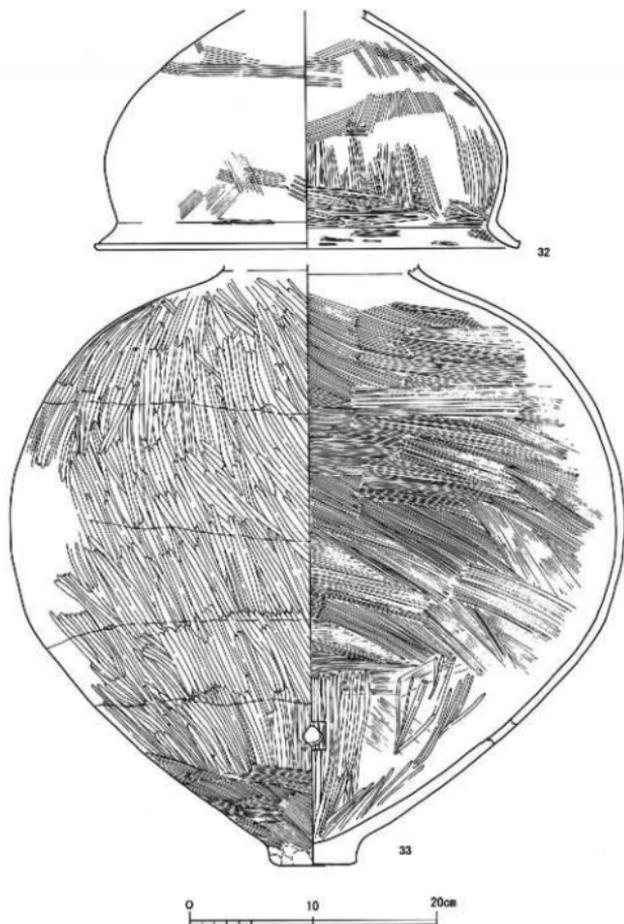
土器棺墓201

調査区東部の2F区で検出した。検出面の標高は約T.P.+11.9mを測る。3号墓と4号墓の間に位置し、3号墓から2.9m、4号墓からは1.4mの距離である。掘形平面形はほぼ円形を呈し、規模は南北84cm・東西78cmを測る。断面形状は椀形を成すが、北側は二段掘り状を呈している。検出面からの深さは約27cmを測り、掘方部の埋土は灰褐色細粒砂泥シルトである。主体部は口縁部を欠いた壺(33)で、掘方のほぼ中央に位置し、口縁方向を南西にやや傾けている。内部に流入した灰褐色粗粒砂泥シルトが、厚さ5cm程度堆積した後、上半部分が崩壊して内部に落ち込んでいる。内部から出土した鉢(32)は棺蓋であろう。33は球形の体部を成し、体部最大径49.2cm・



第14図 土器棺墓201平面断面図

残存高49.2cm・頸部径15.6cmを測る。調整は外面ヘラミガキで、底部付近はハケ、内面ハケで、底部ヘラミガキである。体部下位には、焼成後、外から穿たれた直径約1.5cmの円孔1個を有する。32は約1/3が残存しており、口径34.0cm・体部最大径32.0cm・残存高19.4cmを測る。調整は外面タタキ後ハケ、内面ハケ後上部ヘラミガキである。体部下位外面に黒斑を有する。両方共に、胎土中に角閃石を豊富に含む生駒西麓産の土器である。時期は弥生時代後期～古墳時代初頭(庄内式期)に比定される。



第15図 土器棺墓201出土遺物

S K 201

1 A・B区で検出した。平面不定形で、規模は東西2.3m・南北5.0mを測る大規模な土坑である。断面形状は浅い皿状を成し、深さは9cmを測る。埋土は暗灰黄色細粒砂混シルトである。遺物は出土していない。

S K 202

2 A区で検出した土坑で、平面楕円形を成し、規模は東西60cm・南北85cmを測る。断面形状は逆台形を呈し、深さは10cmを測る。埋土は暗灰黄色極細粒砂～細粒砂である。遺物は出土していない。

S K 203

2 B区で検出した土坑で、平面長方形を成し、規模は長辺172cm・短辺69cmを測る。断面形状は逆台形を呈し、深さは5cmを測る。埋土は暗灰黄色細粒砂～粗粒砂である。遺物は弥生時代後期末～古墳時代初頭頃の土器片が1点出土したのみである。

S K 204

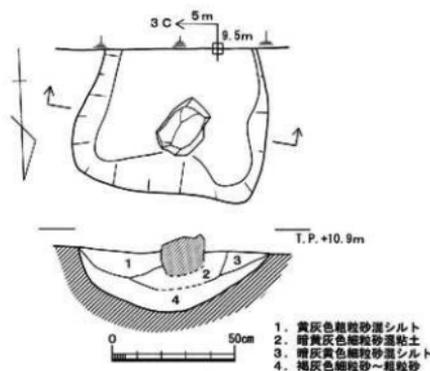
2 B区、S K 203の東側に隣接して検出した土坑で、平面長方形を成し、規模は長辺88cm・短辺44cmを測る。断面形状は逆台形を呈し、深さは5cmを測る。埋土は暗灰黄色細粒砂～粗粒砂で、S K 203と同層である。遺物は弥生時代後期末～古墳時代初頭頃の土器片が2点出土している。

S K 205

2 B区で検出した土坑で、南側は側溝掘削時に掘削しているが、南壁までは至っておらず側溝内に収まる規模である。平面は台形を呈すると考えられ、検出部分での規模は東西77cm・南北63cmを測る。断面碗形を呈し、深さ32cmを測る。埋土は4層からなり、上層(1～3層)が黄灰色系の細粒砂混シルト～粘土、下層(4層)が褐灰色細粒砂～粗粒砂である。遺物は上層から24×16×14cmの立方体状を呈する石材が出土している。土器は出土していない。性格については不明で、石材を礎石と考えれば柱穴の可能性もあるが、底面からはかなり浮いた位置にあることからやや無理があろう。

S K 206

2 F区で検出した平面不定形な土坑で、東・南側は調査区外に至るため詳細は不明である。検出部分での規模は東西3.2m・南北1.4mを測り、さらに北西部からは西に向かって溝状に延びる部分がある。断面皿状を呈し、深さ約10cmを測る。埋土は暗灰黄色粗粒砂混極細粒砂～細粒砂で



第16図 S K 205断面図

ある。遺物は出土していない。性格については不明であるが、下位の第3面SD305の最終堆積部分に当たると思われる。

SD201

1B区で検出した南北方向の溝で、検出長約9.6m・幅約50cm・深さ約5cmを測る。断面皿状を呈し、埋土は黄灰色極細粒砂～シルトである。遺物は弥生土器片が少量出土しているが、図化しえるものは無かった。

SD202

1・2B区で検出した南北方向の溝で、SD201の東側に平行して伸びている。検出長約12.3m・幅25～230cmを測る。断面はほぼ皿状を呈するが、底面は凹凸が顕著で、深さは9～24cmを測る。埋土はSD201と同様の黄灰色極細粒砂～シルトである。遺物は弥生土器片が少量出土しているが、図化しえるものは無かった。

SD203

1B区で検出した東西方向の溝で、SD201とSD202を繋ぐものである。長さ約1.0m・幅40～90cm・深さ約8cmを測る。断面皿状を呈し、埋土はSD201と同様の黄灰色極細粒砂～シルトである。遺物は出土していない。

SD204

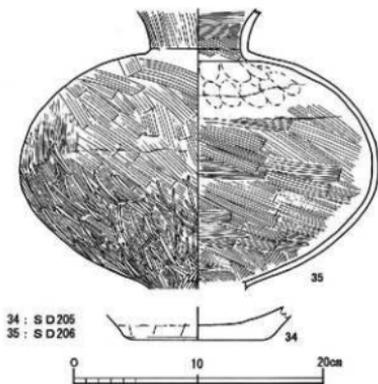
2F区で検出した東西方向の溝で、3号墓の東側、土器棺墓201の南側に近接している。長さ約3.3m・幅35～100cm・深さ約15cmを測る。断面皿状を呈し、埋土は灰褐色砂礫である。遺物は出土していない。性格としては、SK206と同様に、SD305の最終堆積部分に当たると考えられる。

SD205

2F区で検出した東西方向の溝で、4号墓の南側に近接する。検出長約5.4m・幅35～80cm・深さ約38cmを測る。断面碗状を呈し、埋土は上から黄灰色極細粒砂・明褐色極細粒砂(鉄分含む)・淡灰褐色極細粒砂混シルト・暗灰褐色砂礫混シルトである。SK206を切る状況であるが、性格としてはSD204と同様と考えられる。遺物は弥生土器片が数点出土しており、34を図化した。壺の底部と思われ、底径11.6cmを測る。生駒西麓産である。時期は前期～中期に比定される。

SD206

2F区で検出した北東-南西方向の溝で、南壁部分を一部拡張しての調査で全容は不明である。規模は検出長約1.2m・幅53～80cm・深さ約40cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土は上層が暗褐色粗粒砂混粘土質シルト、下層が暗灰褐色大礫～細粒砂混シルトである。3・4号墓の間に位置しており、同様に周溝である可能性もある。遺物は弥生土器が出土しており、上層出土の35を図化した。35は扁球状の体部を有する壺で、口縁部・底部、さらに体部の約1/2を欠く。法量は体部最大径28.8cm・頸部径8.0cmを測る。



第17図 SD205・206出土遺物

調整は内外面ハケの後、口縁部・体部下半の外面にヘラミガキを施す。体部下半に黒斑を有する。生駒西麓産である。時期は後期に比定される。

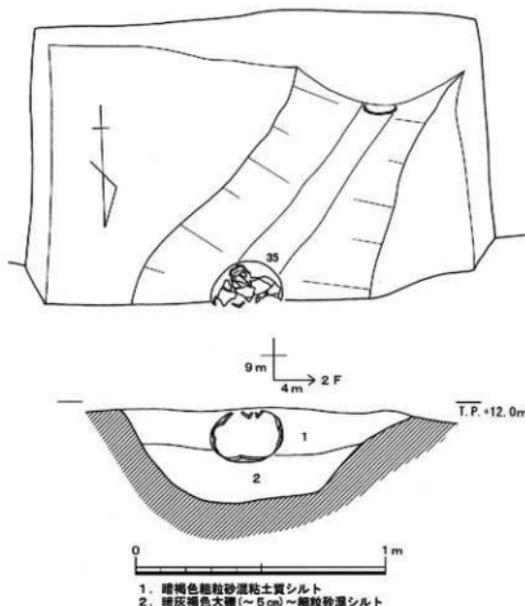
SP201

2B区、SK205東部で検出した平面不定形のピットで、規模は56×41cmを測る。断面皿状を成し、深さは11cmを測る。埋土は暗灰黄色細粒砂混シルトである。遺物は出土していない。

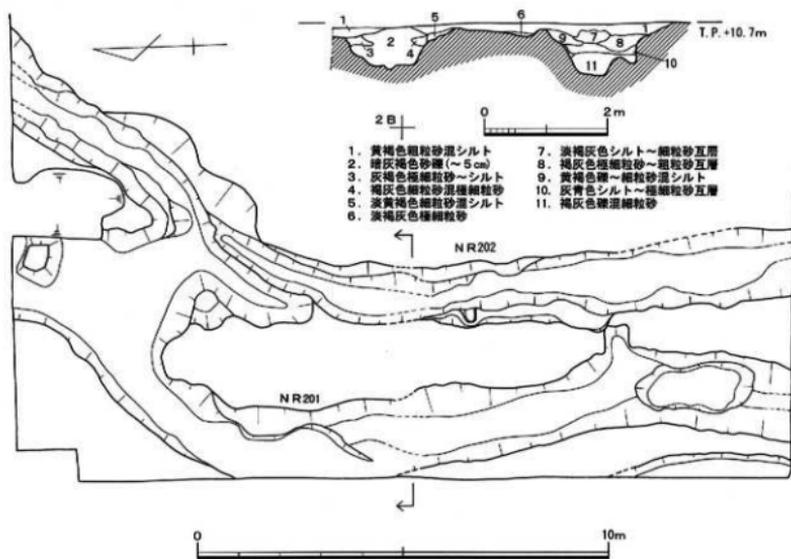
NR201・202

調査区西端を縦断する自然河川で、地形的には東から西への傾斜変換点を北流していると言えよう。2条の河川は中洲状の高まりを隔てて南北方向に平行して流れており、北部でやや東に屈曲している。底部のレベルは西側のNR201が10~20cm高い。平面

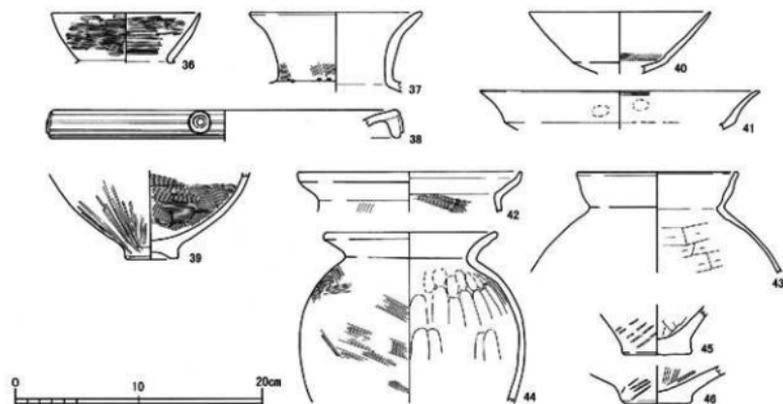
では捉えられなかったが、断面観察では西側のNR201が先に埋没している。NR201は幅2.0~4.1m・深さ25~77cmを測り、埋土は一気に埋まった状況の砂礫層主体である。NR202は幅1.4~2.2m・深さ50~85cmを測る。埋土はNR201とは様相が異なり、シルト~砂礫層が複雑に堆積しており、かなり急な水流が継続していたと思われる。屈曲部では中洲を破壊してNR201に流れが及んだ状況が見られる。両河川からは弥生時代後期~古墳時代前期の遺物が出土しており、36~46を図化した。なお当初は1条の河川と捉えていたため、出土遺物の峻別はできていない。44のみNR201上層の出土が確認できる。36~39は壺である。36は口縁部に横方向のヘラミガキを施す精製品で、復元口径12.0cmを測る。色調は明褐色。37は復元口径14.0cmを測る。外面ハケ調整で、頸部基部に刺突文が認められる。38は復元口径28.0cmを測り、垂下口縁外面に櫛描直線文・二重竹管押圧円形浮文を施す。39は底径4.4cmを測り、調整は外面ヘラミガキ、内面ハケである。40・41は高杯である。40は復元口径14.6cmを測り、杯口縁部最下位にヨコハケを施す。41は復元口径22.6cmを測る。42~46は甕である。42は復元口径18.0cmを測り、口縁端部が上方に屈曲する。外面に煤が付着する。43は布留式甕で、復元口径13.0cmを測る。調整は外面横方向のナデ、内面ヘラケズリである。44は復元口径14.1cm・体部最大径18.2cmを測り、体部外面ハケ、内面ナデで、厚手の器壁を有するものである。外面全体が煤ける。45・46は外面平行タタキ、内面板ナデ・ハ



第18図 SD206平面図



第19図 NR201・202断面図



第20図 NR201・202出土遺物

ケを施す。46は体部の立ち上がり角度から見て壺の可能性もある。これらの土器の内37～39・41・42・44・45が生駒西麓産である。時期は38・39・41・44～46が弥生時代後期、他が庄内式期新相～布留式期に比定される。阿河川は古墳時代前期後半に埋没したと考えられる。

(第3面)

第7層上面で土坑12基(S K 301~312)・溝5条(S D 301~305)・ピット15個(S P 301~315)・石集積(S W 301)を検出した。

S K 301

1 B・C区で検出した。平面不定形な土坑で、規模は115×91cmを測る。断面形状は逆台形を呈し、深さは9cmを測る。埋土は暗灰黄色細粒砂混粘土質シルトの単層である。遺物は出土していない。

S K 302

1 C区、S K 301の東側に近接して検出した土坑である。平面楕円形を呈し、規模は長辺98cm・短辺75cmを測る。断面形状は逆台形を呈し、深さは10cmを測る。埋土はS K 301と同様、暗灰黄色細粒砂混粘土質シルトの単層である。遺物は弥生土器片が1点出土したのみである。

S K 303

2 C区南端で北部のみを検出したもので、全容は不明であるが南壁には及んでおらず、南部は側溝内に収まる規模である。検出部分の規模は東西177cm・南北42cm・深さ25cmを測る。埋土は下から暗灰色極細粒砂混粘土・灰青色粘土質シルト・黄褐色極細粒砂混粘土質シルトが底面に沿って堆積する。遺物は出土していない。

S K 304

2 D区で検出した。平面ほぼ円形を呈する土坑で、規模は128×115cmを測る。断面形状は逆台形を呈し、深さは16cmを測る。埋土は暗褐色粗粒砂～極細粒砂混シルトである。遺物は弥生土器、サヌカイト片が数点出土している。

S K 305

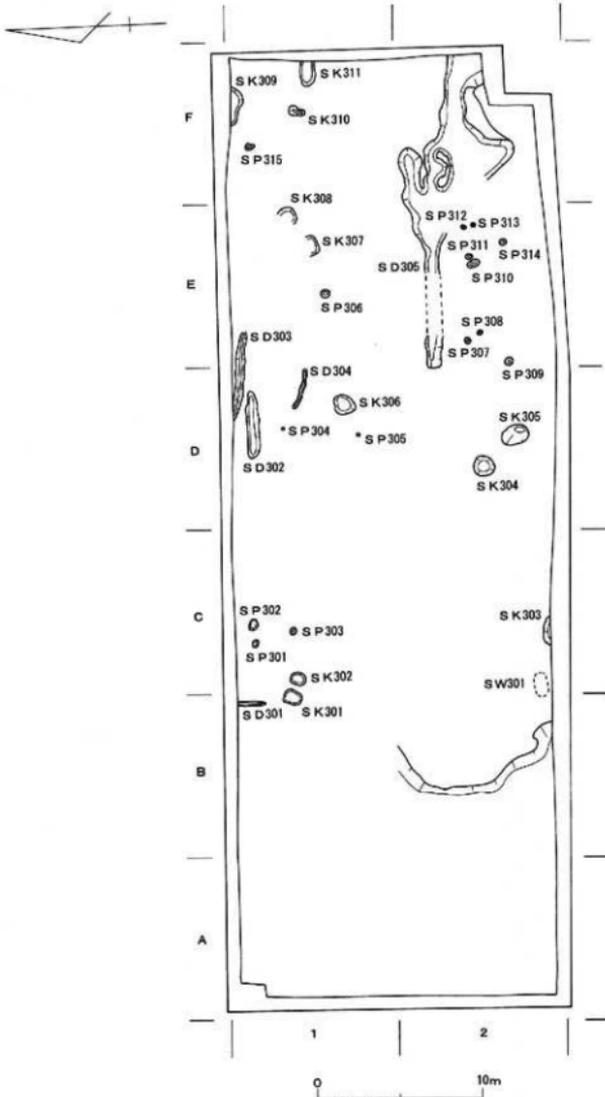
2 D区、S K 304の南東部で検出した土坑である。東側上部は3号墓周溝に削平されている。平面楕円形を呈し、規模は長辺162cm・短辺118cmを測る。断面形状は逆三角形に近い逆台形を呈し、深さは59cmを測る。埋土は下から黒褐色細粒砂混粘土・暗灰青色粘土混細粒砂・暗灰黒色粗粒砂混粘土・暗灰色粗粒砂混粘土質シルト・暗褐色粗粒砂～極細粒砂混シルトの5層が、底面に沿って堆積する状況である。遺物は弥生土器が出土しており、底部3点(47~49)を図化した。47・48は壺であろう。48は底部～体部の外面に黒斑を有する。49は有孔鉢である。いずれも弥生時代後期に比定されよう。

S K 306

1 D区で検出した。平面不定形で、規模は138×111cmを測る。断面形状は逆台形を呈し、深さは27cmを測る。埋土は下から灰褐色極細粒砂～粗粒砂・暗灰黄色細粒砂混粘土・灰褐色粗粒砂～細粒砂混シルトである。遺物は出土していない。

S K 307

1 E区で検出した土坑で、北側はS I 201によって削平されており全容は不明である。規模は東西115cm・南北60cm以上を測る。断面逆台形を呈し、深さは23cmを測る。埋土は上層が暗褐色粗粒砂混粘土質シルト、下層が灰褐色礫混粗粒砂である。遺物は弥生時代前期(河内第I様式)に比定される甕(50)が出土している。50は口縁が小さく外反し端部に刻み目を施すもので、外面調整は板ナデである。復元口径16.0cmを測る。



第21図 第3面平面図

S K 308

1 E区、S K 307の北東部で検出した土坑で、規模等も類似する。西側はS I 201によって削平されており全容は不明である。規模は東西75cm以上・南北118cmを測る。断面逆台形を呈し、深さは17cmを測る。埋土は上層が暗黄褐色細粒砂混粘土質シルト、下層がS K 307と同じく灰褐色礫混粗粒砂である。遺物は弥生土器片が1点出土したのみである。

S K 309

1 F区北端で南部のみを検出したもので、全容は不明であるが北部は側溝内に収まる。検出部分の規模は東西192cm・南北68cm・深さ11cmを測る。埋土は黄褐色極細粒砂混シルトである。遺物は出土していない。

S K 310

1 F区で検出した。平面不定形で、規模は98×57cmを測る。断面形状は逆台形を呈し、深さは18cmを測る。埋土は褐灰色粗粒砂～細粒砂混シルトである。遺物は弥生土器が数点出土しているが、図化しえるものは無かった。

S K 311

1 F区、S K 310の東側で検出した土坑で、東部は側溝内に収まる。平面楕円形を呈すると思われ、規模は東西155cm以上・南北89cmを測る。断面形状は逆台形を呈し、深さは22cmを測る。埋土は黄褐色極細粒砂混シルトである。遺物は出土していない。

S D 301

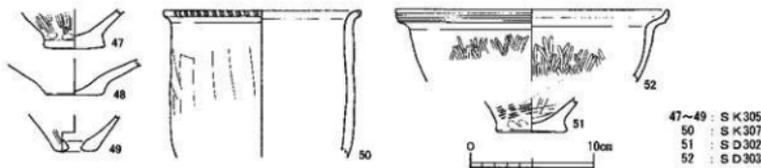
1 B区で検出した南北方向に直線的に伸びる溝で、北は調査区外に至る。規模は検出長約1.7m・幅34cm・深さ約9cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土は上層が褐灰色極細粒砂～粗粒砂混シルト、下層が灰褐色細粒砂～粗粒砂である。遺物は出土していない。

S D 302

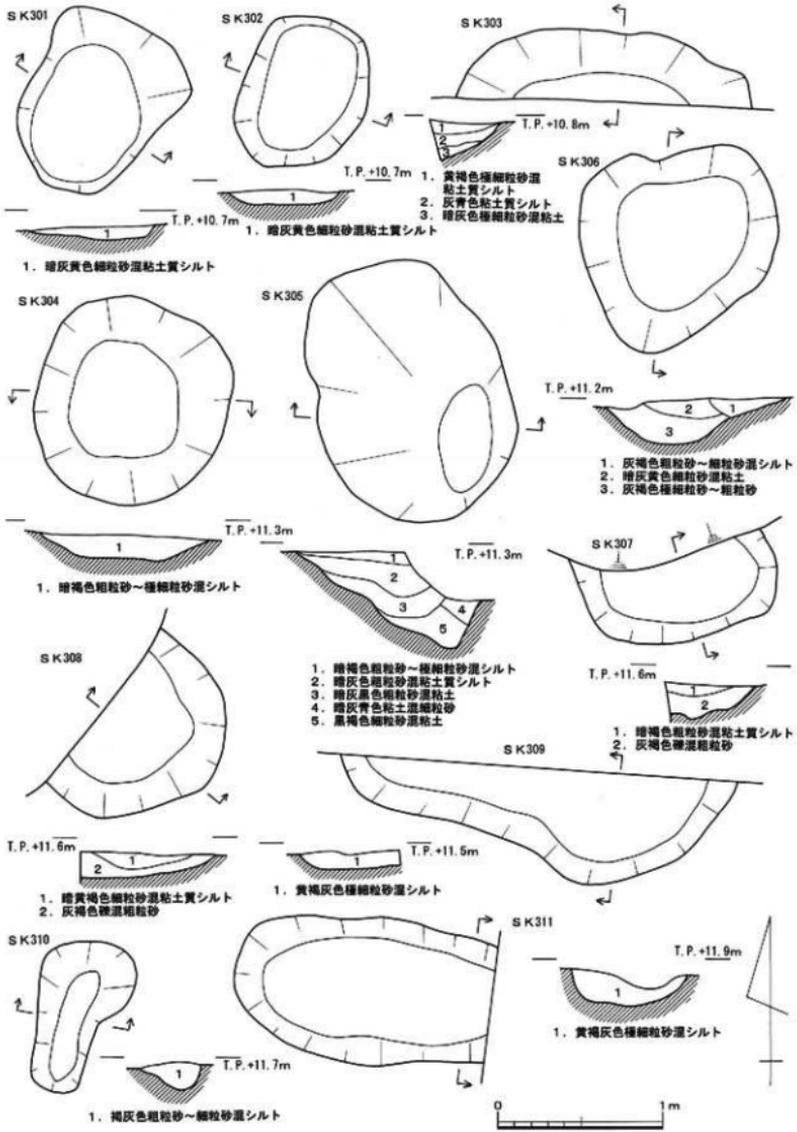
1 D区で検出した東西方向に伸びる溝である。規模は検出長約4.1m・最大幅72cm・深さ約12cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土は灰黄褐色細粒砂～粗粒砂である。遺物は弥生土器、庄内式土器が少量出土しているが、図化しえたのは底部1点(51)のみである。51は底径5.7cmを測り、調整は外面平行タタキで、底部内面にはヘラケズリが認められる。弥生時代後期に比定される。

S D 303

1 D・E区、S D 302の北側を東西方向に伸びる溝で、西部は調査区外に至る。規模は検出長約5.6m・最大幅56cm・深さ約35cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土は上層が第6層に類似する灰褐色極細粒砂～粗粒砂混シルト、下層が暗褐色極細粒砂～粗粒砂混シルトである。遺物は弥



第22回 第3面遺構出土遺物



第23図 第3面土坑平断面図

生時代後期までの土器が出土しており、鉢(52)を図化した。52は受け口状口縁の外面に梯直線文を巡らせるもので、体部調整はヘラミガキである。復元口径22.0cmを測る。弥生時代後期に比定される。

S D304

1 D区で検出した東西方向に伸びる溝で、やや弧状を呈する。規模は検出長約2.5m・最大幅25cm・深さ約8cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土は褐灰色細粒砂混粘土質シルトである。遺物は出土していない。

S D305

2 E・F区で検出した東西方向に伸びる溝で、東部は調査区外に至る。西半部では直線的に伸びるが、東半部では平面形が不定形で、分岐する部分や中洲状の高まりを有する部分が認められる。規模は検出長約18.9m・幅1.0~4.6m・深さ約29cmを測る。埋土は上層が褐灰色極細粒砂~粗粒砂混シルト、下層が灰褐色細粒砂~粗粒砂である。底部のレベルは東で約T.P.+11.5m、西で約T.P.+11.1mとかなり差がある。東から西に流れる自然流路の痕跡と考えられる。遺物は出土していない。

S P301~315

1 C区、及び2 E区で集中して検出された。平面円形・楕円形、直径30~40cm程度、深さ10数cmを測るものが多くを占める。遺物はS P306・315から弥生土器片、S P306・309からサヌカイト片が出土しているが図化しえたものはない。法量等の詳細は表4にまとめた。

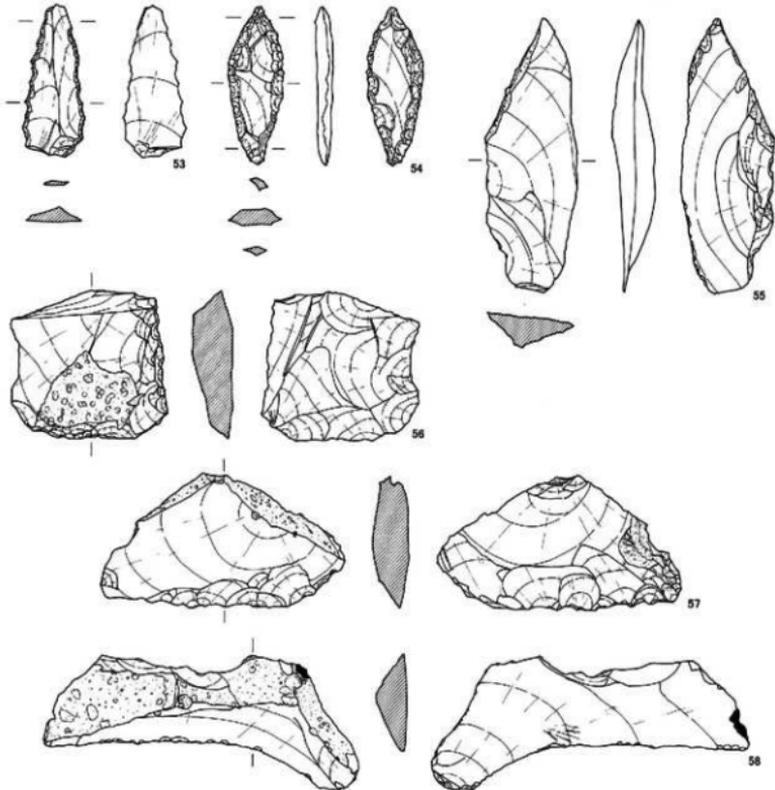
表4 第3面ビット一覧表

遺構名	地区	平面形	断面形	径 (cm)	深さ (cm)	埋 土
S P301	1 C	楕円形	逆台形	48×40	11	灰褐色細粒砂混粘土質シルト
S P302	〃	〃	〃	73×50	5	灰褐色粗粒砂混粘土質シルト
S P303	〃	〃	〃	43×36	13	暗灰褐色粗粒砂混粘土質シルト
S P304	1 D	〃	〃	20×15	12	褐灰色細粒砂混粘土質シルト
S P305	〃	円形	〃	24×22	9	〃
S P306	1 E	〃	〃	56×48	14	〃
S P307	2 E	楕円形	〃	37×27	14	灰褐色細粒砂混シルト
S P308	〃	〃	〃	34×27	10	〃
S P309	〃	楕円形	〃	45×42	10	褐灰色砂礫
S P310	〃	楕円形	〃	68×39	14	灰褐色細粒砂混シルト
S P311	〃	〃	〃	45×36	11	〃
S P312	〃	円形	〃	32×29	12	〃
S P313	〃	〃	〃	30×26	15	〃
S P314	〃	〃	〃	39×37	19	灰黄褐色極細粒砂~細粒砂混粘土質シルト
S P315	1 F	不整形	〃	56×40	14	灰褐色砂礫

S W301

2 B・C区の標高約T.P.+10.9mで検出したサヌカイト剥片の集積で、石器の製作場跡と捉えられよう。南北約0.7m・東西約1.5mの範囲に広がるものであるが、直径約0.7mの集積2箇所が隣接しているようにも捉えられる。周辺には何らかの施設を構成するような遺構は見られなかった。サヌカイトは、一辺3~5cm程度のものを中心に、最大9cmを測る剥片が約150点出土している。接合できた剥片も数点ある(図版13)。製品と認められる6点(53~58)を図化した。53・54は石鎌である。53は平基無茎式石鎌であろう。片面からの調整剥離により両刃部を形成しており、片面は主要剥離面のままである。長さ4.7cm・幅1.8cm・厚さ0.5cm。54は尖基無茎式石

鉄である。縁辺全体に両面からの調整剥離を施し、両面共に中央に主要剥離面を残す。長さ4.8cm・幅1.7cm・厚さ0.5cm。55は横長剥片であるが、刃部の上・下方に片面からの調整剥離が施されており、また形状から見て刃器としての使用が考えられる。長さ8.3cm・幅2.8cm・厚さ1.0cm。56は平面方形を成す楔形石器である。隣り合う2辺に片面からの調整剥離が認められ、この加工面には自然面が残る。縦4.5cm・横4.7cm・厚さ1.2cm。57は楔形石器で、両面から調整剥離を施している。縦4.1cm・横7.4cm・厚さ1.1cm。58は自然面・主要剥離面を大きく残す剥片である。調整剥離と考えられる加工がわずかに認められ、また形状から刃器としての使用が考えられる。長さ9.6cm・幅2.8cm・厚さ0.9cm。



第24図 SW301出土遺物

〈第4・5面〉

トレンチ部分の調査では1E区でのみ遺構が検出された。第8層上面で土坑1基(S K401)・ピット1個(S P401)、また第9層上面で溝1条(S D501)を検出した。また下層確認調査においてはNo.3グリッド第11層上面から切り込む東西方向の流路(流路)を断面で確認した。

S K401

検出面の標高は約T.P.+11.1mを測る。平面不定形で、規模は東西110cm・南北85cm・深さ11cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土は上層が暗灰褐色極細粒砂～粗粒砂混シルト、下層が暗灰褐色極細粒砂～細粒砂である。遺物は出土していない。

S P401

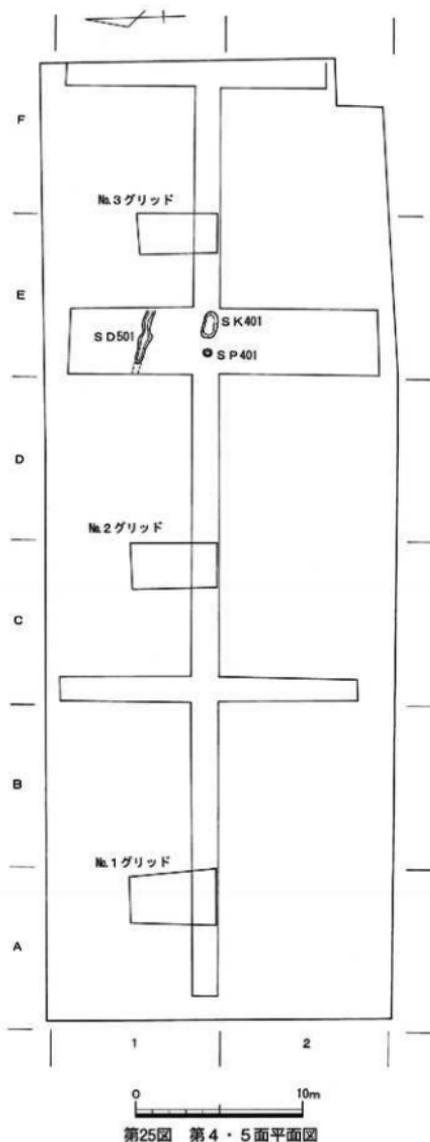
検出面の標高は約T.P.+11.0mを測る。平面楕円形を成し、規模は55×43cm・深さ12cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土は暗灰褐色極細粒砂～粗粒砂混シルトで、S K401上層と同層である。遺物は出土していない。

S D501

東西方向に伸びる溝で、検出面の標高は約T.P.+10.6mを測る。規模は検出長3.8m・最大幅65cm・深さ16cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土は灰色極細粒砂～細粒砂である。遺物は出土していない。

流路

検出面の標高は約T.P.+10.5mを測る。東西方向に伸びると思われる、規模は幅1.5m・深さ0.8mを



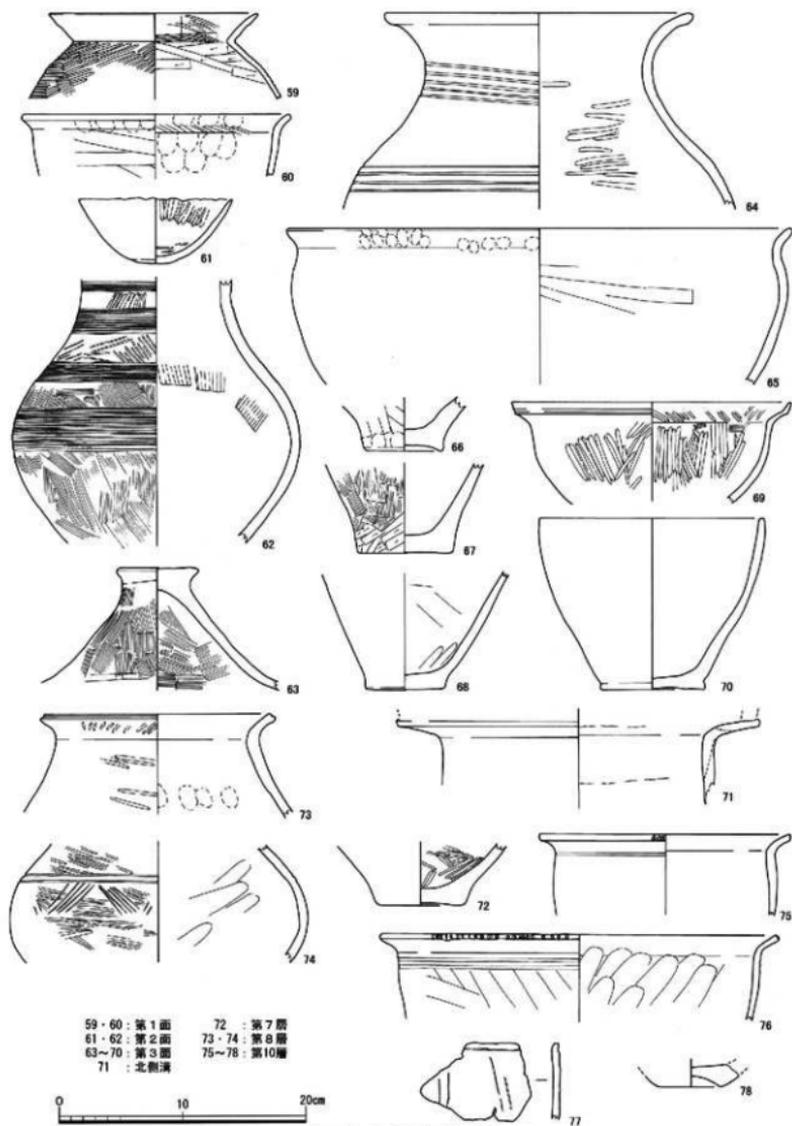
測る。断面逆台形を呈し、埋土は上部が淡灰褐色極細粒砂～細粒砂、下部が灰黄色砂礫(～5cm)である。埋土の様相から、洪水により一時的に形成された流路と考えられる。遺物は出土していない。

(包含層出土遺物)

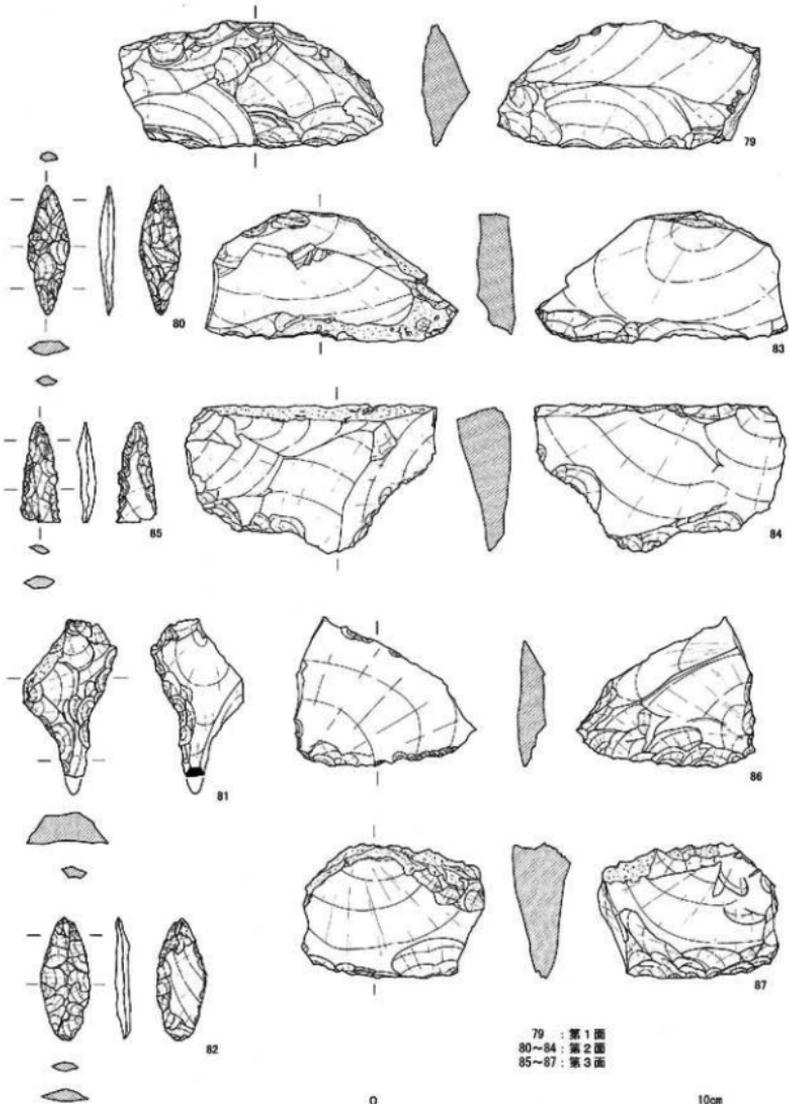
土器(第1面:59・60、第2面:61・62、第3面:63～70、北側溝:71、第7層:72、第8層:73・74、第10層:75～78)、石器(第1面:79、第2面:80～84、第3面:85～87)を図化した。

59は復元口径17.0cmを測る庄内式甕である。体部外面平行タタキで、下位にはハケが認められ、内面はヘラケズリである。生駒西麓産の胎土で庄内式期古相に比定される。1A区出土。60～70・72～76は弥生土器である。60は鉢あるいは甕で、外面が煤ける。第I様式に比定される。1F区出土。61は鉢でほぼ完形。口径12.4cm・器高5.2cm・底径3.5cmを測る。底部はわずかに突出する程度で、一部完全に潰れている。調整は外面ナデ、内面上半縦方向のヘラミガキで、外面には縦方向のクラックが認められる。第V様式に比定されよう。1・2A区出土。62は甕で、外面に篋指沈線文(残存部分で上から5条以上・11条・11条・13条)を施す。第I～4様式に比定される。1E区出土。63は甕蓋で、つまみ径6.6cmを測る。調整は内外面ハケ後ナデで、内面口縁付近が煤ける。2C区出土。64は甕で、復元口径25.0cmを測る。頸部に5条、肩部に4条の篋指沈線文を施す。外面に黒斑を有する。第I～3～4様式に比定される。2D区出土。65は鉢で、復元口径40.8cmを測る。口縁部外面に指頭圧痕が顕著に見られ凹凸がある。第I様式に比定される。2C区出土。66～68は甕底部で、底径は6.5cm・7.8cm・6.4cmを測る。外面調整は66・68がナデ。67はハケで、下位～底面ヘラケズリである。66・67は2E区、68は2D区出土。69は鉢で、復元口径22.6cmを測る。調整はヘラミガキを多用し、口縁部外面に2条の沈線を巡らせる。外面に黒斑を有する。第V様式に比定される。1B区出土。なお1D・E区、SD303出土の52と酷似しており、同一個体の可能性がある。70は口縁部～体部の3/4を欠き、復元口径18.2cm・器高14.0cm・底径8.4cmを測る。摩滅のため調整は不明瞭であるが、内外底面はヘラケズリである。第I様式に比定される。2D区出土。71は土師器複合口縁壺の頸部で、復元頸部径21.8cmを測る。生駒西麓産の胎土である。1E区北側溝の出土で、2号墓周溝内遺物の可能性がある。庄内式期に比定される。72は壺あるいは鉢の底部で、底径7.2cmを測る。内面ヘラミガキを施す。2B区出土。73・74は壺で、それぞれ復元口径19.0cm・体部最大径24.0cmを測る。外面調整はヘラミガキで、73は口縁端部に1条の沈線を巡らせ、74は肩部に2条の篋指沈線、その下にジグザクの平行斜線文(5条)を施す。74は体部下外面が煤ける。共に第I様式に比定され、1F区出土。75・76は甕で、復元口径20.2cm・32.2cmを測る。調整はナデで、口縁端部に刻み日、体部最上位に75は1条、76は2条の沈線を巡らせる。共に第I様式に比定される。75は1A区、76は1C区出土。77・78は縄文土器で、深鉢と考えられる。77は砂粒を多量に含む粗製品である。口縁部外面に2本一組の縦位の沈線を施すもので、口縁端部外面には明確でないが沈線を巡らせているようである。これらの特徴から中期末の北白川C式が考えられる。1E区出土。78は上げ底状の底部で、底径5.0cmを測る。調整は外面ナデ、外底面はヘラケズリである。晩期前半のものか。1B区出土。

80は尖基無茎式石鏃である。縁辺全体に両面からの調整剥離を施している。長さ3.9cm・幅1.3cm・厚さ0.5cm。2A・B区出土。81は石錐で、錐先端を欠く。片面に主要剥離面、頭部側面に



第26図 包含層出土遺物①



第27図 包含層出土遺物②

自然面を残す。残存長4.3cm・頭部幅2.8cm・頭部長2.8cm・頭部厚0.9cm・銚部厚0.3cm・銚部長2.0cm。1・2D区出土。82は尖基無茎式石鏃で、縁辺全体に両面からの調整剥離を施し、片面に主要剥離面を残す。長さ3.7cm・幅1.5cm・厚さ0.4cm。1・2A・B区出土。85は平基無茎式石鏃である。調整剥離は両面からで、片面中央に主要剥離面を残す。長さ3.1cm・幅1.2cm・厚さ0.4cm。2C区出土。79・86は刃器とした。両面に主要剥離面を大きく残し、上・下辺に雑に刃を作り出すもので、刃の潰れが顕著に見られる。79は両側面に自然面を残している。79は長さ8.0cm・幅3.9cm・厚さ1.4cm、86は長さ5.5cm・幅4.6cm・厚さ0.8cm。83・84・87は楔形石器とした。両面に主要剥離面、上辺に自然面を大きく残し、下辺に雑に刃を作り出す。いずれも刃の潰れが顕著に見られる。83は方面にも自然面を残している。83は長さ7.7cm・幅4.0cm・厚さ1.1cm、84は長さ7.6cm・幅4.5cm・厚さ1.5cm、87は長さ5.5cm・幅4.1cm・厚さ1.6cm。79は1E・F区、83・84は2C区、86・87は2B区出土。

第3章 まとめ

今回の調査では縄文時代から近世の遺構・遺物を検出した。遺構面は後世にかなり削平を受けており、特に調査区東部では弥生時代後期から近世の遺構が同一面で捉えられ、また近世の耕作溝から縄文土器も出土するという状況であった。出土遺物量はコンテナ11箱を数える。

縄文時代中期末～弥生時代中期では土器が出土しているが、遺構は検出されなかった。

縄文土器は標高T.P.+10.0m前後の第9～11層から少量出土している。詳細は不明であるが、当地周辺に当該期の集落が存在したことを示唆するものである。

弥生時代では第2・3面で後期の遺構が検出されている。包含層中には前期～中期の土器が相当量含まれており、下層確認調査第4面(第8層上面)、第5面(第9層上面)で検出された遺構が当該期に相当する可能性がある。第3面では石器製作場と考えられるSW301の存在が目目される。なお調査地から南約500mの第2次調査地では、弥生時代前期～中期の遺構・遺物が検出されている。

弥生時代後期～古墳時代前期では、第2面で竪穴住居・墳墓・土器棺墓が検出され、当地が居住域から墓域に移り変わったことが確認された。古墳時代初頭～前期の墳墓4基については、墳丘・主体部が削平されており、出土遺物も少量で、このため築造時期等に不明確な点が多い。このうち円形を呈する3・4号墓については、河内地域における当該期の墳墓が方形を一般的とする中で特筆される。円形周溝墓は大阪市長原遺跡で確認されており、長原遺跡においても方形と円形の周溝墓が近接して築かれている。今回の例では周溝出土土器から見て、円形から方形へと形態が変容した可能性があり、当時の墓制を考える上で貴重な資料といえよう。

続く古墳時代中期～中世では遺構は検出されなかった。中世～近世では調査地全域が生産域となっており、耕作溝が多数検出された他、畷畑+水田と捉えられる耕作形態も認められた。土地利用についてはそのまま現在に至っているといえる。

参考文献

- ・井上智博 1999「高畑の考古学的研究-池島・福万寺遺跡の事例の再検討-」『光陰如矢-萩田昭次先生古稀記念論集-』『光陰如矢』刊行会
- ・寺沢 薫・森井貞雄 1989「2-1 河内地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅰ』木耳社
- ・滑 斎 1997「19. 水越遺跡(95-582)の調査」『八尾市内遺跡平成8年度発掘調査報告書Ⅰ 八尾市文化財調査報告36 平成8年度国庫補助事業』八尾市教育委員会
- ・松山聡・佐伯公子・溝川陽子 1993「第四章 第3節 石器」『河内平野遺跡群の動態Ⅵ』大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター
- ・原田昌則 1999「Ⅲ 郡川遺跡(第2次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告64』財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・大阪市教育委員会・(財)大阪市文化財協会 2004「長原遺跡(NG03-6次)発掘調査 現地説明会資料」

圖 版



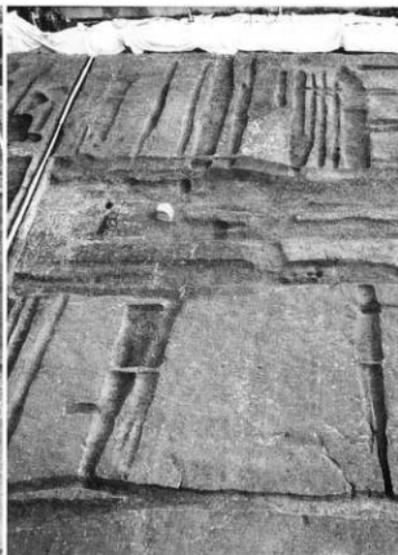
全景 (西から)



全景 (東から)



西部（北から）



東部（北から）



SD103（北から）



全景（東から）



東部検出状況 (東から)



全景 (西から)



S I 201 (北から)



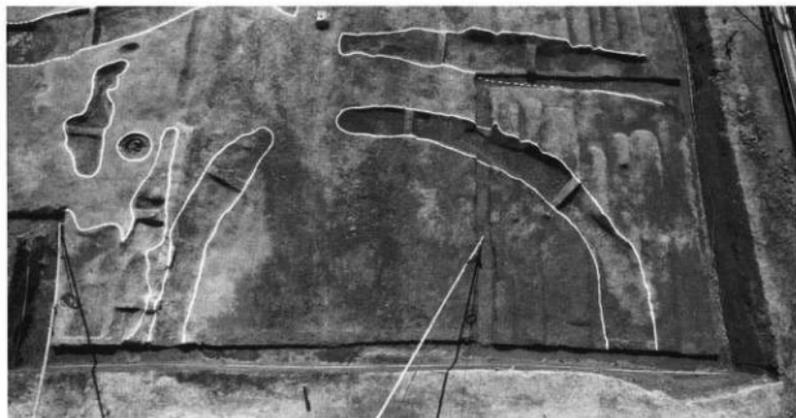
1号墓 (北から)



2号墓 (北から)



3号墓 (北から)



4号墓 (東から)



2号墓西周溝遺物出土状況 (西から)



4号墓周溝遺物出土状況 (北から)



土器棺墓201 (西から)



土器棺墓201 (南から)



S K 205 (北から)



S D 206南壁



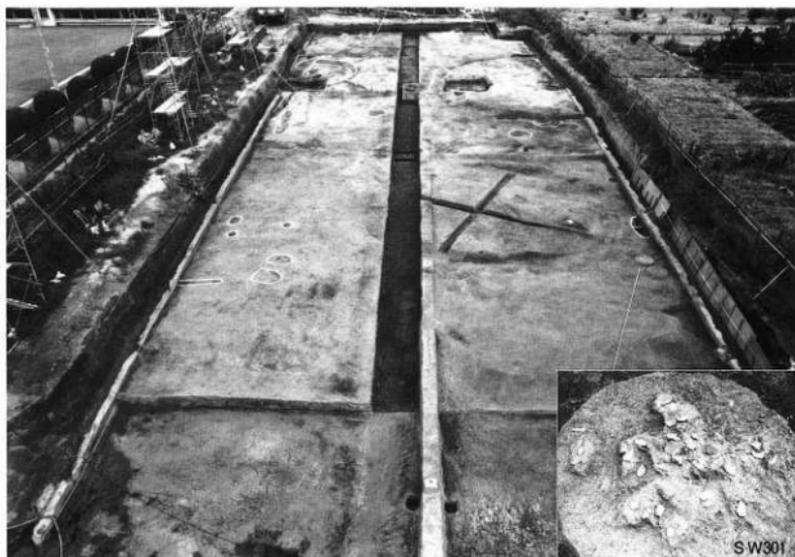
NR 201土器 (44) 出土状況



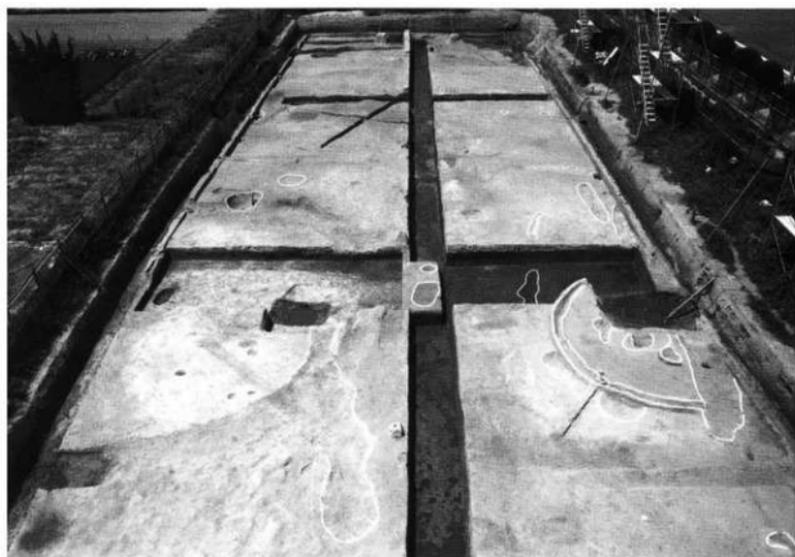
S D 206 (東から)



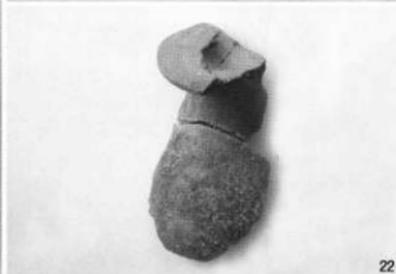
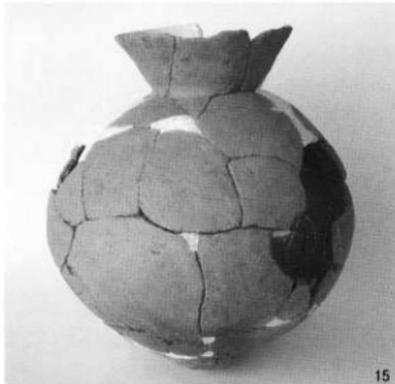
NR 201・202 (西から)



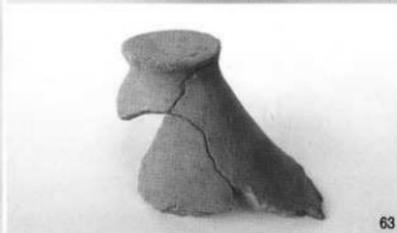
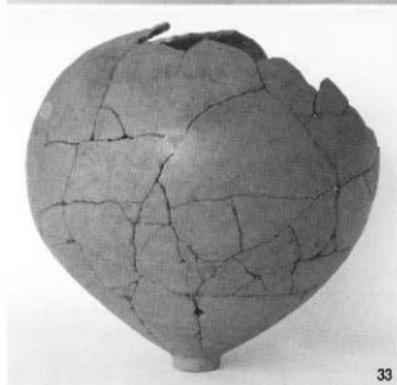
第3面 (西から)



第4・5面 (東から)



SD128 (1)、SD135 (2)、SI 201 (6)、2号墓 (15~18·22)



3号墓 (24)、S D206 (35)、土器棺墓201 (32-33)、NR201 (44)、S K307 (50)、第1面 (59)、第2面 (61)、第3面 (63)



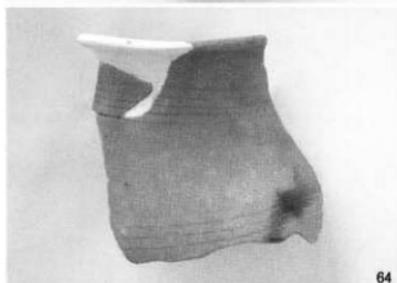
62



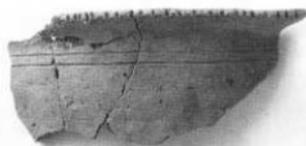
70



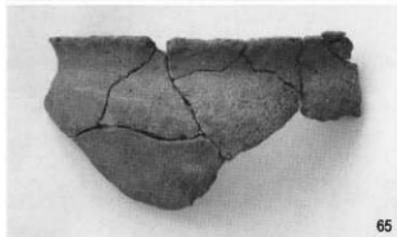
74



64



76



65



77

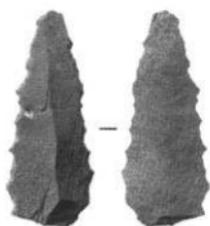


69

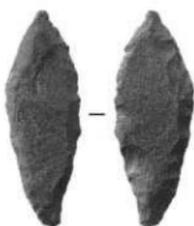


78

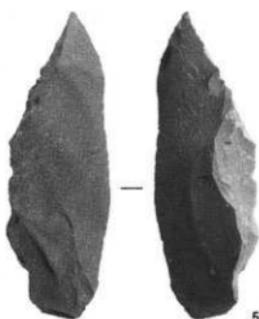
第2面 (62)、第3面 (64·65·69·70)、第8層 (74)、第10層 (76~78)



53



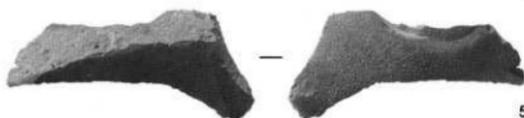
54



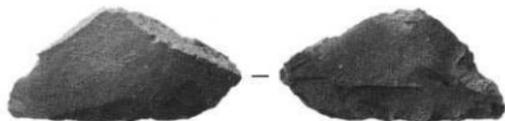
55



56



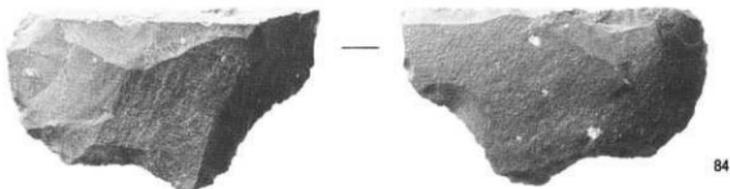
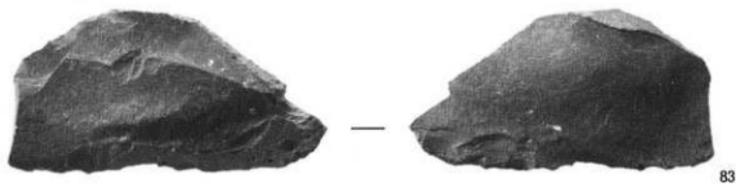
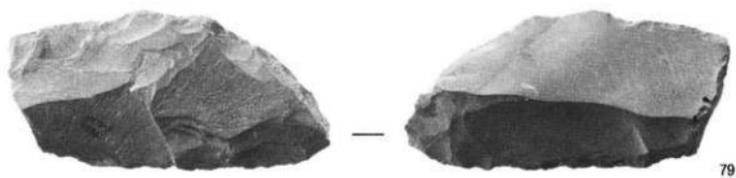
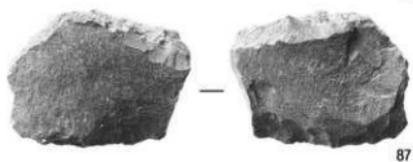
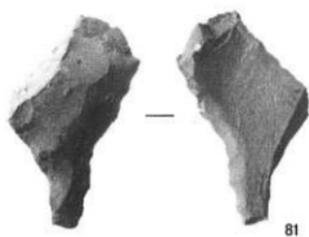
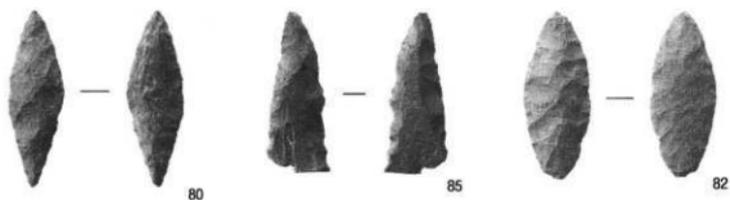
58



57



SW301



第1面 (79)、第2面 (80~84)、第3面 (85~87)

II 水越遺跡第5次調査 (MK95-5)

例 言

1. 本書は、大阪府八尾市服部川1丁目102番地で実施した高安受水場配水池築造工事に伴う水越遺跡第5次調査(MK95-5)の発掘調査報告書である。
1. 本調査は、八尾市教育委員会の指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 調査は当調査研究会 坪田真一・成海佳子が担当した。
1. 現地調査は、平成7年10月24日～平成8年3月25日(実働96日)に実施した。調査面積は約2,000㎡である。
1. 現地調査には磯上サカエ・河合せき子・斎藤真理・中前和代・西田真紀・宮崎寛子・村井俊子・山内千恵子が参加した。
1. 内業整理には上記の他、伊藤静江・岩沢玲子・岩本順子・垣内洋平・加藤邦枝・川村一吉・北原清子・竹田貴子・田島宣子・都築聡子・永井律子・中村百合・村田知子・吉川一栄・若林久美子が参加し、現地調査終了後に着手して平成18年7月をもって終了した。
1. 測量用基準点設置、及び航空写真撮影は株式会社八州に委託した。

本文目次

第1章 はじめに	37
第2章 調査概要	40
第1節 調査方法	40
第2節 基本層序	40
第3節 検出遺構と出土遺物の概要	42
第3章 まとめ	74

挿 図 目 次

第1図 調査地位置図	38
第2図 地区割図	39
第3図 基本層序	41
第4図 第1面平面図	42
第5図 第2面平面図	43
第6図 第3面平面図	44

第7図	第4面平面図	46
第8図	第5面平面図	47・48
第9図	S I 501出土遺物①	49
第10図	S I 501平・断面図	50
第11図	S I 501出土遺物②	51
第12図	S I 501出土遺物③	52
第13図	S I 501出土遺物④	53
第14図	S I 502平断面図	54
第15図	S B 501平断面図	55
第16図	S B 501柱根	56
第17図	S B 502平断面図	57
第18図	S E 501～503出土遺物	57
第19図	S E 501平断面図	58
第20図	S E 502平断面図	58
第21図	S E 503平断面図	59
第22図	S D 538出土遺物	61
第23図	S D 543出土遺物	61
第24図	S D 538・543・544断面図	62
第25図	S D 544出土遺物	63
第26図	S D 564平断面図	65
第27図	S D 564出土遺物	65
第28図	S P 501～503、506～508、510～512平断面図	66
第29図	第5面溝・ピット出土遺物	71
第30図	第5面出土遺物	72
第31図	包含層出土遺物	73

表 目 次

表1	調査地一覧表	37
表2	第5面溝一覧表	67・68
表3	第5面ピット一覧表	68～71

図 版 目 次

図版 1		調査地より北方を望む	
		調査地より東方を望む	
図版 2	第 1～3 面	第 1 面南東部 (東から)	S D101 木樋 (北から)
		第 1 面北東部 (東から)	S D101 木樋 (西から)
		第 1 面南西部 (西から)	第 2・3 面東部 (東から)
図版 3	第 3・4 面	全景 (上が東)	
		全景 (西から)	全景 (東から)
図版 4	第 4 面	全景 (東から)	
		S E 401 (北から)	
図版 5	第 5 面	全景 (上が東)	
図版 6	第 5 面	全景 (西から)	
		全景 (西から)	南部 (東から)
図版 7	第 5 面	S I 501・S D 538 (北から)	S I 501 (南から)
図版 8	第 5 面	S I 501 遺物出土状況 (西から)	S I 501 P 2 (南から)
		S I 501 P 3 (北から)	S I 501 P 4 (南から)
		S E 501 (東から)	S E 502 (東から)
図版 9	第 5 面	S I 502 周辺 (西から)	
		S I 502 (南から)	
図版 10	第 5 面	S E 503 西壁 (東から)	S E 503 (北から)
		S P 5108 (東から)	S P 5109 (東から)
		S P 5110 (南から)	S P 5111 (東から)
図版 11	第 5 面	S D 538 (南から)	S D 543 (東から)
		S D 538 南部遺物出土状況 (東から)	S D 543 西壁 (東から)
		S D 538 遺物出土状況 (西から)	S D 543 遺物出土状況 (北から)
図版 12	第 5 面	S D 544 (東から)	
		S D 544 東部遺物出土状況 (東から)	S D 544 東端遺物出土状況 (北から)
図版 13	第 5 面	S D 564 (東から)	
		S D 564 遺物出土状況 (東から)	
図版 14	出土遺物	S I 501	
図版 15	出土遺物	S I 501	
図版 16	出土遺物	S I 501	
図版 17	出土遺物	S I 501、S B 501、S E 501、S E 502、S D 538、S D 543	
図版 18	出土遺物	S D 544	
図版 19	出土遺物	S D 564、S D 546、S P 558	
図版 20	出土遺物	第 5 面、第 13 層、第 5 層、第 4 層	

第1章 はじめに

水越遺跡は大阪府八尾市の北東部に位置し、現在の行政区画では水越・千塚・大窪・服部川一帯の約1.2km四方がその範囲とされている。地形的には生駒山西麓から河内平野に続く扇状地上に立地し、西側には旧大和川の主流であった玉串川・恩智川の氾濫原が広がっている。当遺跡は北側で太田川遺跡・大竹遺跡、南側で郡川遺跡に接しており、東側には高安古墳群が広がっている。今回の調査地の南約250mには、すでに消滅しているが中期の前方後円墳である郡川西塚古墳が、またその東には郡川東塚古墳が東西に並んで立地している。

当遺跡内では、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当調査研究会により数次の発掘調査が行われている。これらの調査地点をみると、当調査地から北に約900mの④地域と、北東に約500mの③地域に集中しているといえる。④地域では古来より、縄文時代の石器や弥生～古墳時代の土器・玉作関係資料が多く採集されており、この一帯は「高安遺跡」・「千塚遺跡」等の名称で遺跡の存在が知られていた。そして最初の発掘調査として昭和53年に、大阪府教育委員会によって大阪府立清友高等学校建設に伴う調査①が実施された。調査では既知の採集資料と同様の成果が得られた他、弥生時代～古墳時代の集落遺構(井戸・溝・方形周溝墓・方墳・土器棺等)、中世の集落遺構(掘立柱建物・井戸等)が検出された。また古墳時代の銅鏃・鉄鏃が出土しており、周辺の前期古墳との関連が注目されている。その後、昭和57年以降の調査②～⑤・⑧でも弥生～古墳時代の集落遺構が確認されており、④では縄文時代中期の自然河川が検出されている。また④では南北方向に伸びる弥生時代中期の大溝の存在から、環濠集落が推定されている。一方、③地域では⑬で縄文時代中期末～後期中葉の土坑・ピット、⑮で縄文時代晩期の土器埋納ピットの可能

表1 調査地一覧表

番号	調査主体(略号)	調査年月	文 献
①	府教委	昭和53年	大阪府立清友高等学校「紀要清友」第1号 1988
②	市教委	昭和57年3月～4月	財団法人八尾市文化財調査研究会報告3 1983
③	研究会(MK82-1)	昭和57年7月～8月	財団法人八尾市文化財調査研究会報告23 1989
④	研究会(MK89-2)	平成元年5月～6月	財団法人八尾市文化財調査研究会報告57 1997
⑤	研究会(MK89-3)	平成元年6月～7月	財団法人八尾市文化財調査研究会報告57 1997
⑥	市教委(89-559)	平成2年6月～7月	八尾市文化財調査報告22 1991
⑦	研究会(MK91-4)	平成4年2月	財団法人八尾市文化財調査研究会報告34 1992
⑧	市教委(92-602)	平成4年12月～5年1月	八尾市文化財調査報告29 1994
⑨	市教委(94-663)	平成7年7月	八尾市文化財調査報告34 1996
⑩	市教委(95-450)	平成7年10月	八尾市文化財調査報告33 1996
⑪	研究会(MK95-5)	平成7年10月～8年3月	今回報告
⑫	市教委(95-582)	平成8年5月	八尾市文化財調査報告36 1997
⑬	研究会(MK96-6)	平成8年8月～9月	財団法人八尾市文化財調査研究会報告60 1998
⑭	市教委(99-342)	平成11年10月	八尾市文化財調査報告42 2000
⑮	研究会(MK2000-7)	平成12年4月～5月	八尾市立埋蔵文化財調査センター報告2 2001
⑯	市教委(2001-97)	平成13年6月	八尾市文化財調査報告46 2002
⑰	研究会(2002-79)	平成14年6月	八尾市文化財調査報告48 2003
⑱	研究会(2002-82)	平成14年6月	八尾市文化財調査報告48 2003
⑲	研究会(2002-343)	平成15年8月	八尾市文化財調査報告49 2004
⑳	研究会(2003-233)	平成15年11月	八尾市文化財調査報告49 2004
㉑	研究会(2003-356)	平成16年1月	八尾市文化財調査報告50 2005
㉒	研究会(2004-37)	平成16年5月	八尾市文化財調査報告50 2005
㉓	研究会(2005-322)	平成17年11月	八尾市文化財調査報告53 2006
㉔	研究会(MK2005-8)	平成17年12月～18年1月	平成17年度 八尾市文化財調査研究会事業報告 2006

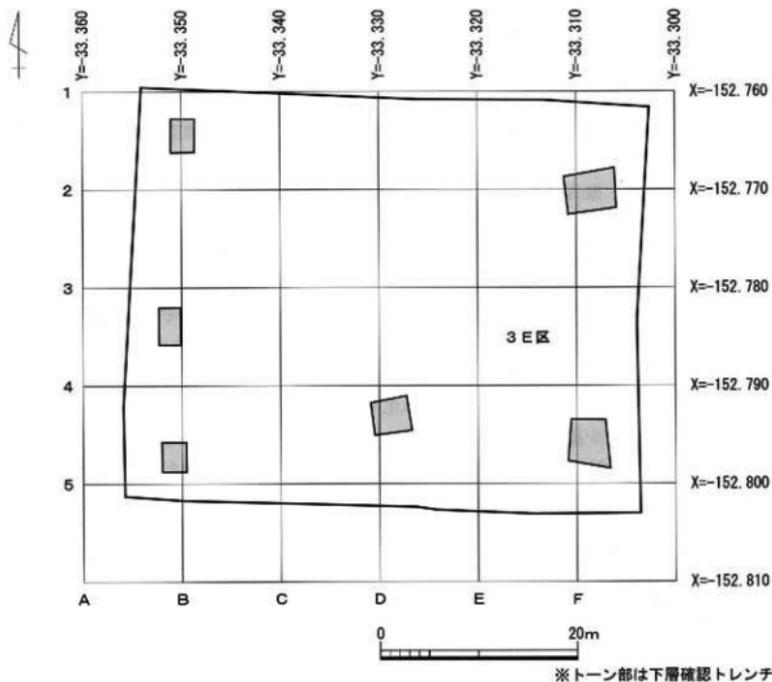


第1図 調査地位置図

性がある遺構が検出されている。弥生時代ではほぼ全域で遺構や遺物包含層が認められるが、④地域とは様相が異なり後期が中心となっている。また古墳時代の遺構は顕著ではない。⑮では平安時代の土坑や地鎮祭祀を示唆するような土器埋納ピットが検出されている。これらの調査成果から、当遺跡は縄文時代中期～近世にわたる複合遺跡であることが認識されている。

このような情勢下の平成7年、八尾市水道局から、八尾市服部川1丁目102番地における高安受水場配水池築造工事の届出書が、八尾市教育委員会文化財課に提出された。これを受けた同文化財課では、当該地が水越遺跡範囲内にあたることから、平成7年7月20・21日に、建築予定地内に6箇所のトレンチを設定して遺構確認調査⑨を実施した。その結果、古墳時代・中世の遺構面・遺物包含層が検出され、同文化財課では発掘調査が必要であると判断し、事業者にその旨を通知した。そして発掘調査を実施することが両者で合意され、調査にあたっては八尾市・文化財課・当調査研究会の三者協定により、当調査研究会が主体となって発掘調査を実施することとなった。

なお今回の調査地の南約60mに位置する既設受水池部分では、平成6年度に郡川遺跡第3次調査(KR94-3)を実施しており、弥生時代後期～古墳時代前期では竪穴住居・周溝墓・土器棺墓等の集落遺構、近世以降では水田・鳥畑等の生産関連遺構が検出されている。(本書I参照)



第2図 地区割図

第2章 調査概要

第1節 調査方法

今回の調査は高安受水場配水池築造工事に伴う調査で、当調査研究会が水越遺跡内で実施した第5次調査(MK95-5)である。

調査前の現地は、段々畑に近年盛土を施した空地という状況であった。調査は、八尾市教育委員会文化財課が実施した遺構確認調査の成果を参考に、まず現地地表下1.4~2.5mを機械掘削し、以下0.1~1.1mを人力掘削により実施した。そして最終遺構面調査終了後、調査区内に6ヶ所のトレンチを設定し、主に機械掘削による下層確認調査を実施し、断面観察を行った。

調査地の地区割については、国土座標第VI系(日本測地系)(原点:東経136°00'・北緯36°00' - 福井県越前岬付近)を基準とした。調査地を含む南北50m・東西60mの範囲について10m方眼を設定し、東西ラインに算用数字(北から1~5)、南北ラインにアルファベット(西からA~F)を冠し、地区名については北西交点名(1A~5F区)とした。

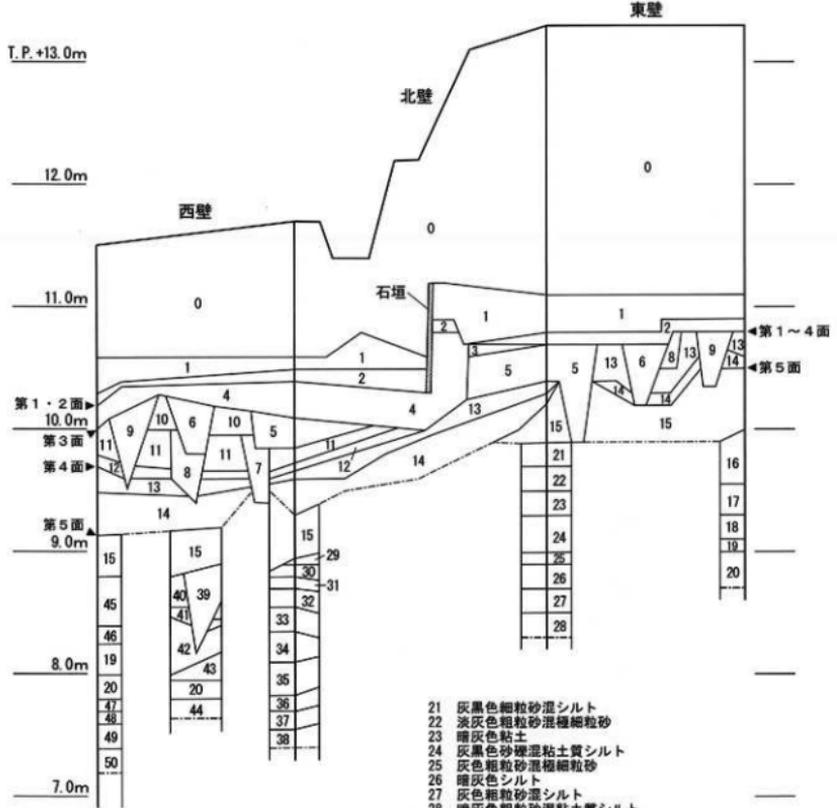
遺構名については、遺構略号+面番号+遺構番号で表記した。

なお航空写真撮影を2回(平成8年1月31日、同3月6日)実施した。

第2節 基本層序

第0層は近年の盛土で、現地表面の標高はT.P.+13.3~11.5mを測り東部が高い。第1層が旧耕土で、数枚に分層が可能である。第1層の上面は調査区の中央やや東に存在した南北方向の石垣を境に段差があり、標高は東部が約T.P.+11.1m、西部がT.P.+10.6mを測る。第2層がこれに伴う床土にあたり、第1層と同様に東西で段差がある。ほぼ第2層下面までが機械掘削部分にあたり、ここで第1面を検出した。第4層も前段階の作土で、調査区中央~西半にみられる。東区第3層の上面は非常に固く締まっており、第4層の作土に対する耕作段差上段の強固な整地が窺える。第5・6層は水成層で、第3面で検出した水田301・302を覆う。おそらく北側に位置する河川の氾濫に起因する層位であろう。第7~9層は水田301~303作土、第10・11層は島畑301~303盛土に当たる。これより下の層位は、東から西に、また南から北にも下がる傾斜堆積がみられる。第12層は調査区西半に堆積し、遺物は弥生時代後期~古墳時代前期の土器を主とし、飛鳥~奈良時代頃の土器も少量含んでいる。調査区中央では非常に固く締まっている。第13層が調査区全域にみられる弥生時代後期~古墳時代前期の遺物包含層である。北東部では弥生時代後期の土器がまとまって出土している。第14層上面が当該期のベース面となり、標高は南東角が最も高く約T.P.+10.6m、低い北西角で約T.P.+9.6mを測る。第14層からは遺物は出土しておらず、部分的な確認であるが第15層上面からの遺構は検出されなかった。

これ以下は下層確認トレンチによる調査である。おおまかにみれば暗灰色~灰黒色系のシルト~粘土、灰色系の砂が互層状に堆積し、植物遺体が多く観察できる。北東部第24層以下、及び西中央部第39層以下は河川堆積の様相を呈している。トレンチ調査での遺物は、北東部第23層から縄文時代後期~晩期に比定される土器が出土している。



- 0 盛土
- 1 旧耕土
- 2 床土：灰青色～黄灰色系細粒砂混シルト
- 3 淡褐色細粒砂混シルト
- 4 灰色～灰黄色極細粒砂～シルト
- 5 淡褐色系極細粒砂～中礫
- 6 黄褐色シルト
- 7 水田301作土
- 8 水田302作土
- 9 水田303作土
- 10 淡褐色系細粒砂混シルト：鳥畑盛土
- 11 灰褐色系極細粒砂混粘土：鳥畑盛土
- 12 暗褐色系極細粒砂混粘土
- 13 灰褐色系極細粒砂混粘土
- 14 黄褐色系極細粒砂混粘土
- 15 灰色系粘土質シルト～極細粒砂
- 16 灰褐色極細粒砂混粘土
- 17 暗灰色細粒砂混粘土
- 18 明灰色細粒砂混シルト～極細粒砂
- 19 灰黒褐色細粒砂混シルト質粘土
- 20 灰黄褐色系極細粒砂～砂礫

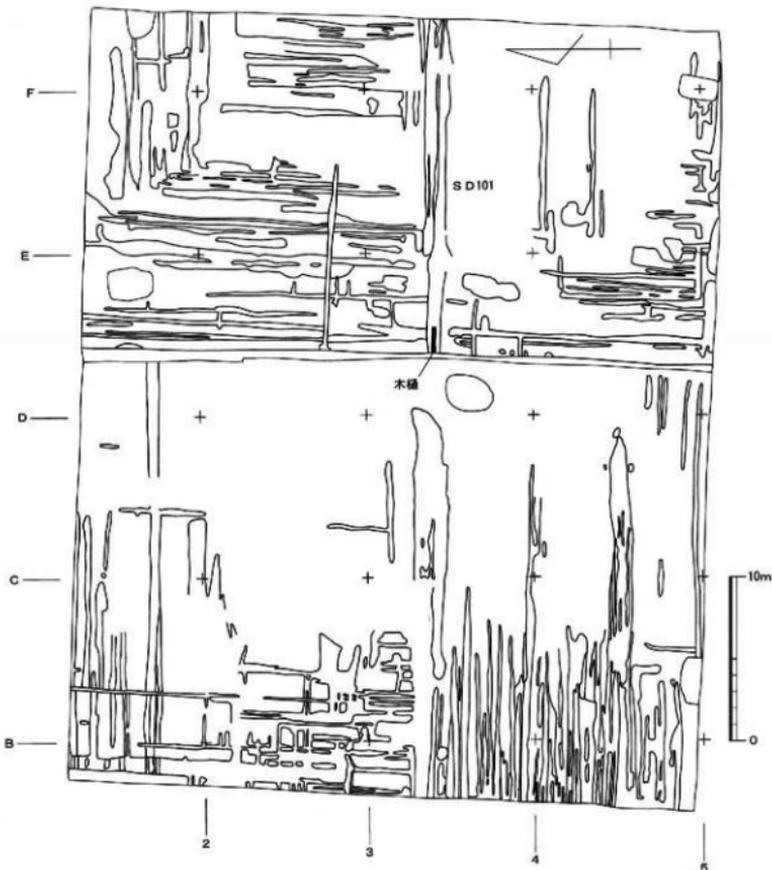
- 21 灰黒色細粒砂混シルト
- 22 淡灰色粗粒砂混極細粒砂
- 23 暗灰色粘土
- 24 灰黒色砂礫混粘土質シルト
- 25 灰色粗粒砂混極細粒砂
- 26 暗灰色シルト
- 27 灰色粗粒砂混シルト
- 28 暗灰色粗粒砂混粘土質シルト
- 29 暗灰青色粘土質シルト
- 30 暗灰色極細粒砂混シルト
- 31 淡緑灰色極細粒砂混シルト
- 32 暗灰色極細粒砂混シルト質粘土
- 33 灰色細粒砂混粘土質シルト
- 34 淡灰褐色粗粒砂混極細粒砂
- 35 灰黒色極細粒砂混粘土
- 36 淡灰褐色極細粒砂混シルト
- 37 灰黒色極細粒砂混粘土質シルト
- 38 灰色極細粒砂混シルト
- 39 灰褐色細粒砂～シルト互層
- 40 暗灰色極細粒砂混粘土
- 41 灰黒色後極細粒砂混粘土質シルト
- 42 淡褐色粗粒砂～粘土互層
- 43 暗褐色系極細粒砂混粘土質シルト
- 44 暗灰色粘土質シルト
- 45 暗灰色細粒砂混粘土
- 46 灰緑色細粒砂混シルト
- 47 灰黒色粘土
- 48 淡灰色粗粒砂混極細粒砂
- 49 暗灰色粘土質シルト
- 50 淡灰褐色粗粒砂～細粒砂

第3図 基本層序

第3節 検出遺構と出土遺物の概要

〈第1面〉

ほぼ第2層床土を除去した段階で捉えた遺構面である。現代の石垣と同位置にある耕作段差を境に、東区・西区に分割され、標高は東区がT.P.+10.6~10.8m、西区がT.P.+10.2~10.4mで、西区が約0.4m低い。東区・西区ともに、東部では弥生時代後期~古墳時代前期の包含層である第13層の上面となっており、第2面以下の遺構が一部確認できる状況である。第1面の遺構としたものは土坑1基(SK101)、ピット7個(SP101~107)、東西及び南北方向の溝147条(SD101~147)である。近代の耕作に伴う遺構群であり、個々の遺構の詳細については割愛する。溝の切

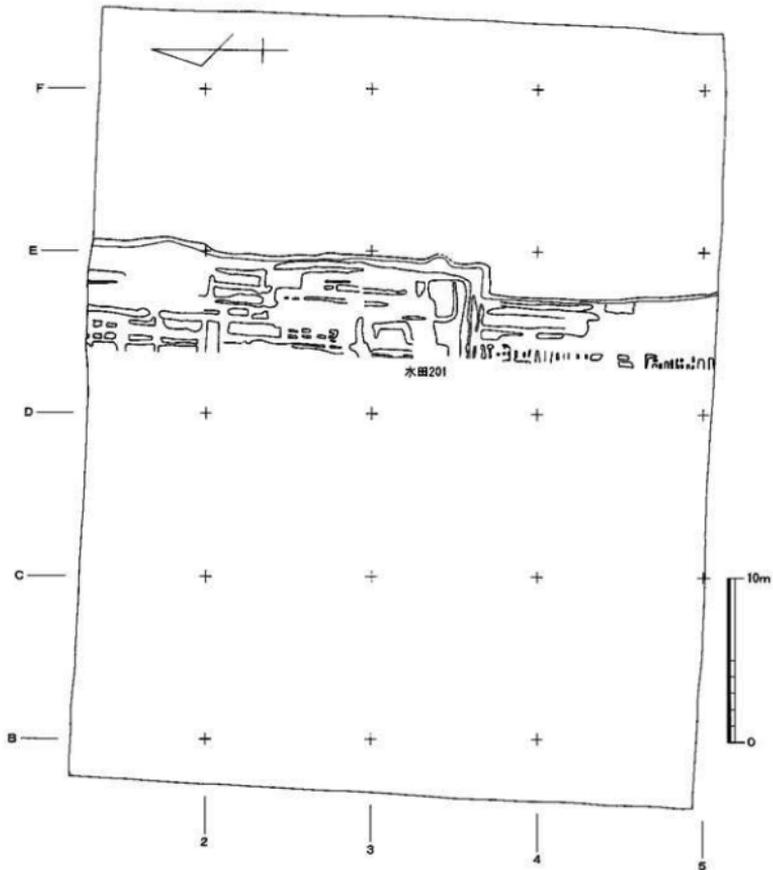


第4図 第1面平面図

り合い関係や埋土の状況から、少なくとも3時期の遺構が重複していると思われる。出土遺物は少量で、近世の陶磁器や須恵器等があるが、下位の包含層からの混入である弥生時代後期～古墳時代前期の土器の占める割合が高い。なお東西を分ける耕作段差については、第1面より前段階には現位置より約5m東に位置していたことを確認している。この段差の肩のラインは南北方向に直線的に延び、中央やや南で屈曲している。段差部分には第1面と同様に石垣が構築されていたらしく、段際の所々に根石が遺存している。

SD101

東区中央を東西方向に延びる溝で、規模は検出長20.5m・幅50～80cm・深さ約30cmを測る。砂を基調とする埋土の状況等から水路としての機能が考えられる。西端部の段際には芯材を削り抜

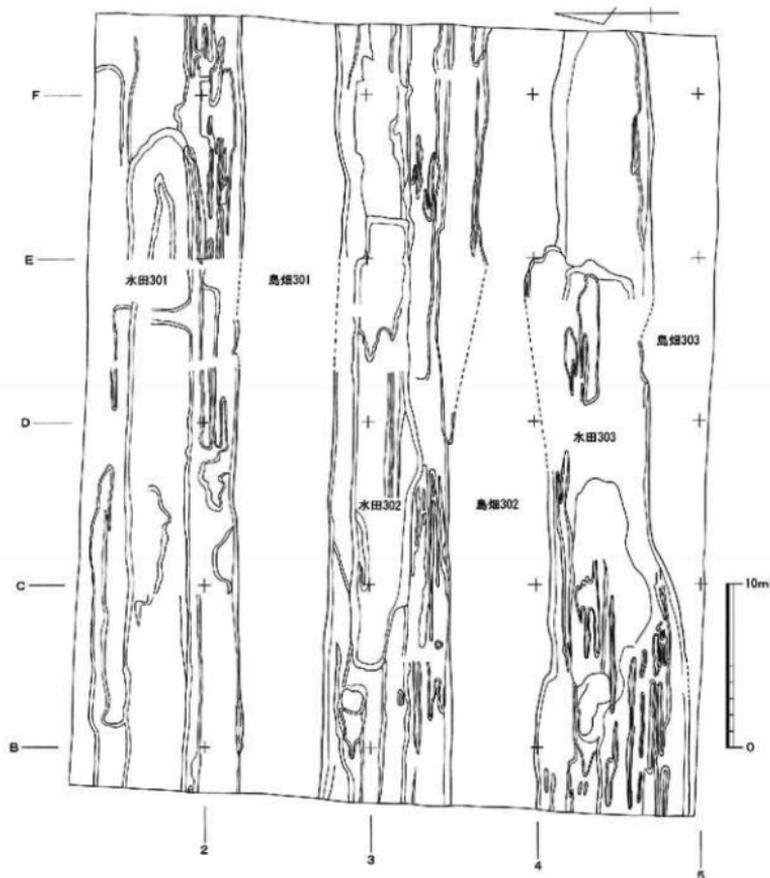


第5図 第2面平面図

いた半截木に板で蓋をした木樋(長さ1.7m・幅0.2m)が埋め込まれ、その周囲は石で補強されている。この木樋は農業用水を下段に落とす部分と考えられる。

〈第2面〉

先述のように第1面の耕作段差より約5m東で段差が検出され、これより西側の水田を第2面遺構とした(水田201)。作土は灰色～灰黄色系極細粒砂～シルトで、北部で約0.5m・南部で約0.4mの層厚を測る。作土下面では耕作溝68条(S D 201～268)を検出したが、水田201に伴う溝の他、下位の第4面遺構も含まれている。第1面と同様、近代の耕作面であろう。個々の耕作溝の詳細については割愛する。



第6図 第3面平面図

(第3面)

断面観察、及び第1面検出の段階で、調査区を横断する大規模な水田・鳥畑を確認しており、この検出を目的に掘削を進めた。その結果水田3筆(水田301~303)、鳥畑3基(鳥畑301~303)が検出され、水田部分は作土下面、鳥畑部分はその上面を検出面とした。北部の水田301・302上部は、水成層である第5・6層に覆われている。各水田作土中~下面では耕作溝35条(SD301~335)を検出したが、個々の詳細については割愛する。当地は条里地割に沿った東西方向に長い短冊型の鳥畑・水田で構成された耕作地であったと捉えられる。出土遺物からみて時期は鎌倉時代以降と考えられる。

水田301

規模は南北幅10.0m以上・東西幅48m以上を測る。作土は厚さ約0.5mを測り、数枚に分層が可能である。作土下面のレベルは東で約T.P.+9.9m、西で約T.P.+9.4mを測り、調査区中央西から段差がついて西が深くなっている。作土は暗灰青色系粘土で、上面では東西方向に歩行する動物の足跡が確認できた。

水田302

幅は東部で約12.0m、西部で約8.2mを測る。作土は褐灰色系粘土質シルトで、下面のレベルは東部で約T.P.+10.3m、西部で約T.P.+9.4mを測る。

水田303

幅は東部で約8.8m・西部で約9.2mを測る。作土は水田302と同様で、下面のレベルは東で約T.P.+10.5m、西で約T.P.+9.5mを測る。

鳥畑301~303

規模が確認できる鳥畑301・302で、幅8.0~10.0m、長さ48m以上を測る大規模なものとなる。盛土は上部が淡褐灰色系細粒砂混シルト(第10層)、下部が灰褐色系細粒砂混粘土(第11層)である。共に数層に分層が可能で、一部ブロック状の堆積がみられるものの非常に均質な土層で、西部では固く締まっている。盛土中に遺物はほとんど含んでおらず、鎌倉時代頃までの土器が極少量出土したのみである。

(第4面)

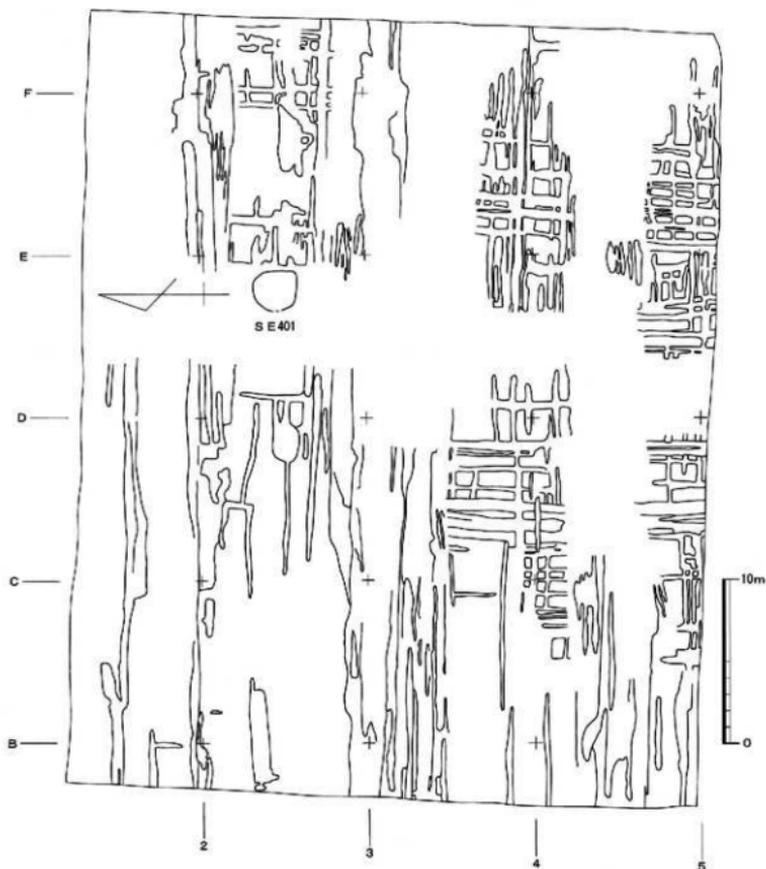
第13層上面にあたり、第3面鳥畑盛土部分を掘削した範囲で検出した。検出遺構は井戸1基(SE401)、溝145条(SD401~4145)である。遺構面は東から西に階段状に下がっており、これは耕作に伴う段差であろう。

SE401

2D区で検出した井戸で、鳥畑301内に位置する。井戸枠は遺存していないがその有無は不明である。掘方平面形は不整形円形を呈し、南部はやや直線的である。直径は南北約2.6m・東西約2.9m、検出面からの深さは約2.0mを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は上層が黄褐色粗砂混粘土質シルト、下層が淡灰褐色細粒砂で、中層は黒褐色~灰色粘土をブロック状に含む汚れた層が複雑に堆積している。上・中層は埋め戻しに伴う層位である。出土遺物は庄内式期~布留式期の土器が少量である。鳥畑301盛土中からの遺構と捉えられ、時期は中世~近世に比定される。

SD401~4145

鳥畑盛土の下面で検出した溝群で、鳥畑構築直前の耕作溝と考えられる。東西方向及びこれに

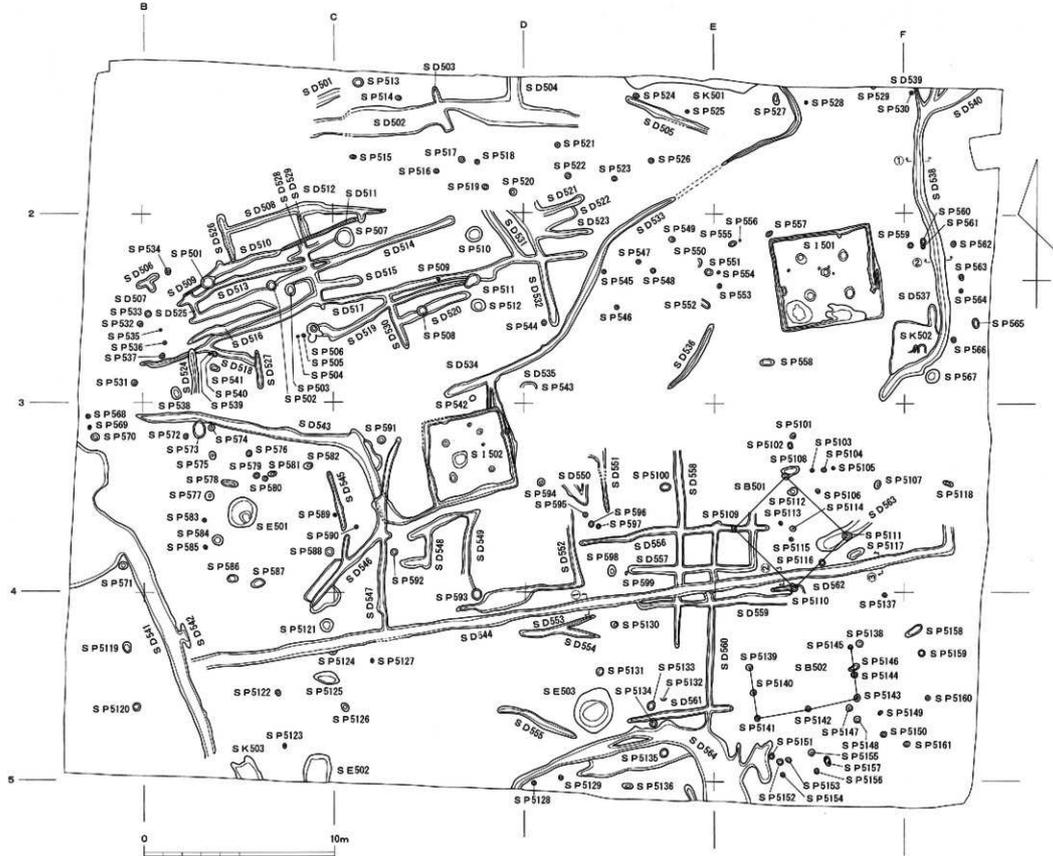


第7図 第4面平面図

直交する南北方向の溝で構成されている。規模は幅20～70cm・深さ10cm程度を測る。切り合いについては、鳥畑302下位においては南北溝(埋土：黄褐色極細粒砂混粘土)が東西溝(暗黄褐色極細粒砂混シルト)を切る状況を確認している。各溝の詳細については割愛する。

〈第5面〉

第15層上面で竪穴住居2棟(S I 501・502)・掘立柱建物2棟(S B 501・502)・井戸3基(SE 501～503)・土坑3基(S K 501～503)・溝64条(S D 501～564)・ピット161個(S P 501～5161)を検出した。なお、このうち調査区北西部に位置するピット12個(S P 501～512)は、第14層上面で検出したものである。溝・ピットの法量・埋土・出土遺物等は表2・3にまとめた。

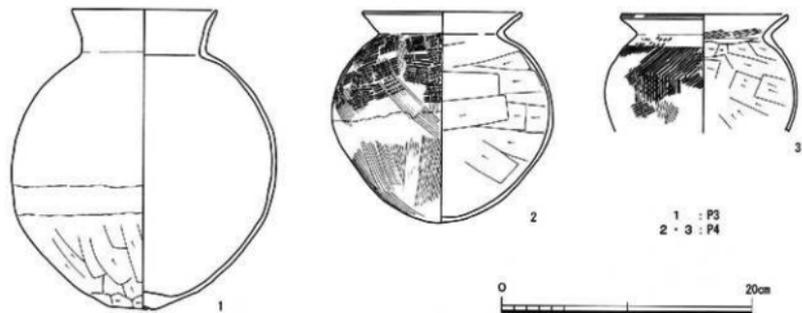


第8図 第5面平面図

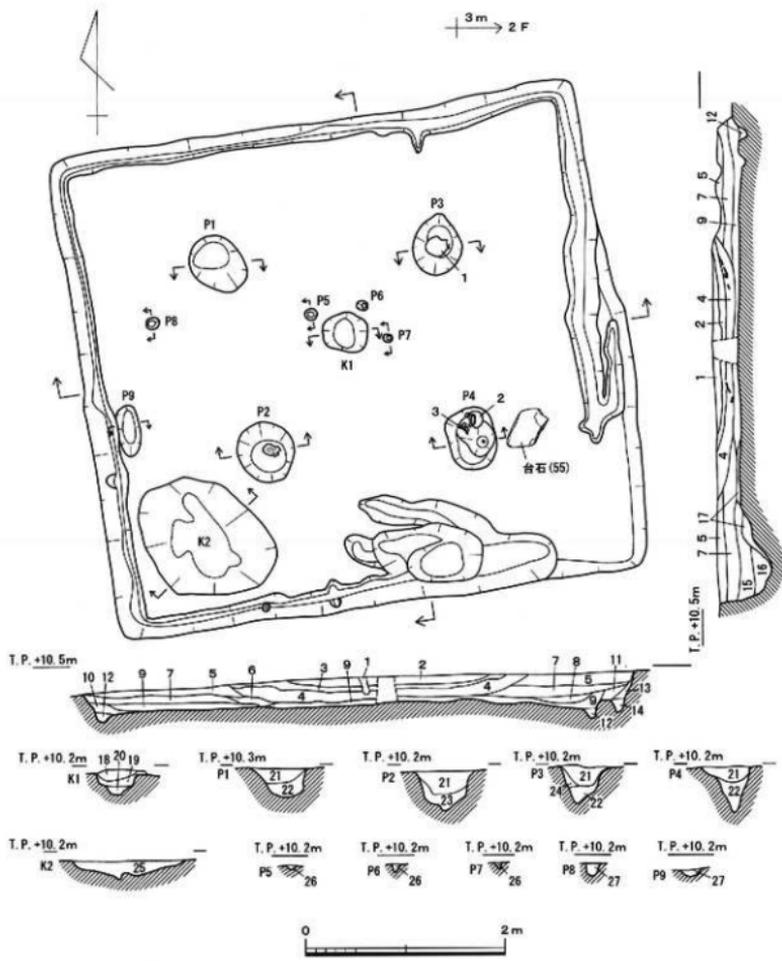
S I 501

2 E区に位置する平面方形の竪穴住居である。主軸は座標北から約8度西に振っている。規模は東西約5.4m・南北約5.0m、検出面から床面までの深さ約30cmを測る。床面では壁溝、支柱穴(P1~4)、炉(K1)の他、土坑(K2)、ピット(P5~9)を検出した。壁溝は幅20~30cm・深さ約10cmを測る。南東角部を除いて床面を巡っており、この南東角部が住居の出入り口となる可能性がある。また東辺・南辺の中央ではやや形状が乱れ、2条となる部分や、南辺では深さ約30cmを測る土坑状を成す部分が見られる。支柱穴は平面形に沿った4個(P1~4)で、柱間距離は約2.0mを測る。いずれも平面不整形形を成し、規模(長辺×短辺×深さ)はP1が63×50×29cm、P2が62×57×40cm、P3が62×50×39cm、P4が63×48×46cmである。南東のP4には柱痕が認められた。床面ほぼ中央には東西45cm・南北40cm・深さ25cmの炉(K1)を有している。埋土には炭を多量に含んでいるが、内壁は火を受けていない。炉の周囲北半部では、直径10cm・深さ5cm程度のピットが3個(P5~7)検出され、炉に伴う施設が存在した可能性がある。なお、P4の掘形から東側約10cmに近接して床面上に台石(55)が遺存していた。55は平面形が平行四辺形を成し、長さ44.8cm・幅33.6cm・厚さ7.0~9.4cmを測る。上面は平滑になっている。

遺物はP2底部から庄内式甕底部、P3上層からは土師器壺(1)、P4上層から庄内式甕(2・3)が出土しており、1・2は完形に近いものである。1は口径11.8cm・器高24.4cm・体部最大径21.4cmを測る。全体に磨耗が著しく調整は不明瞭である。底部付近はケズリを施し、底径約3.6cmの上げ底を形成している。体部外面に黒斑を有する。2は口径13.0cm・器高17.3cm・体部最大径17.8cmを測る。調整は外面上半部タタキ後ハケ、下半部ハケで、タタキは右上がりであるが水平に近い。口縁屈曲部内面はやや丸みをもつ。3は復元口径13.6cmを測る。肩部の外面タタキは右上がりであるが、角度が急で一部垂直な部分がある。体部にはハケも認められる。口縁部ヨコナデが肩部上位にまで及びタタキを消しており、体部との境に稜を成している。2と同様、口縁屈曲部内面はやや丸みをもつ。2・3は生駒西麓産、1は黄橙色を呈するもので他地域産と考えられる。これらの土器については、住居廃絶時に柱を抜き取った後に埋置されたものと捉えられよう。また住居内埋土の堆積状況を見ると、住居がほぼ埋没した後に中央部を掘り窪めているよ

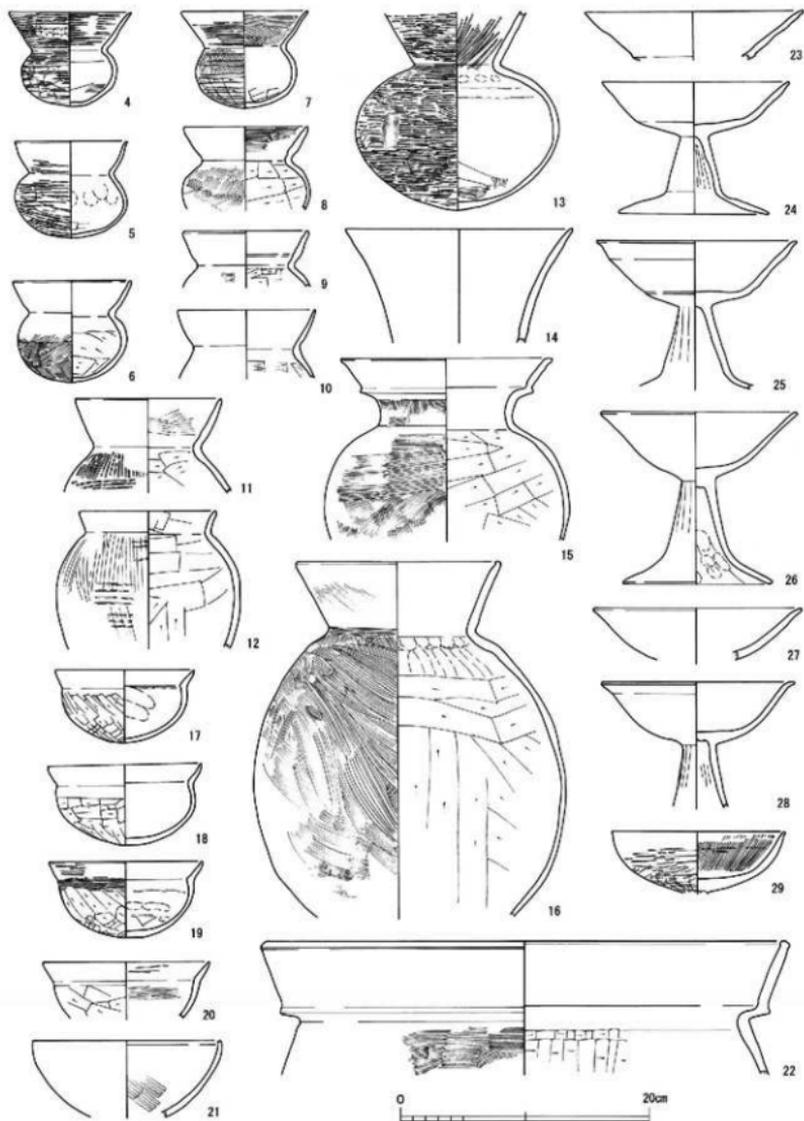


第9図 S I 501出土遺物①

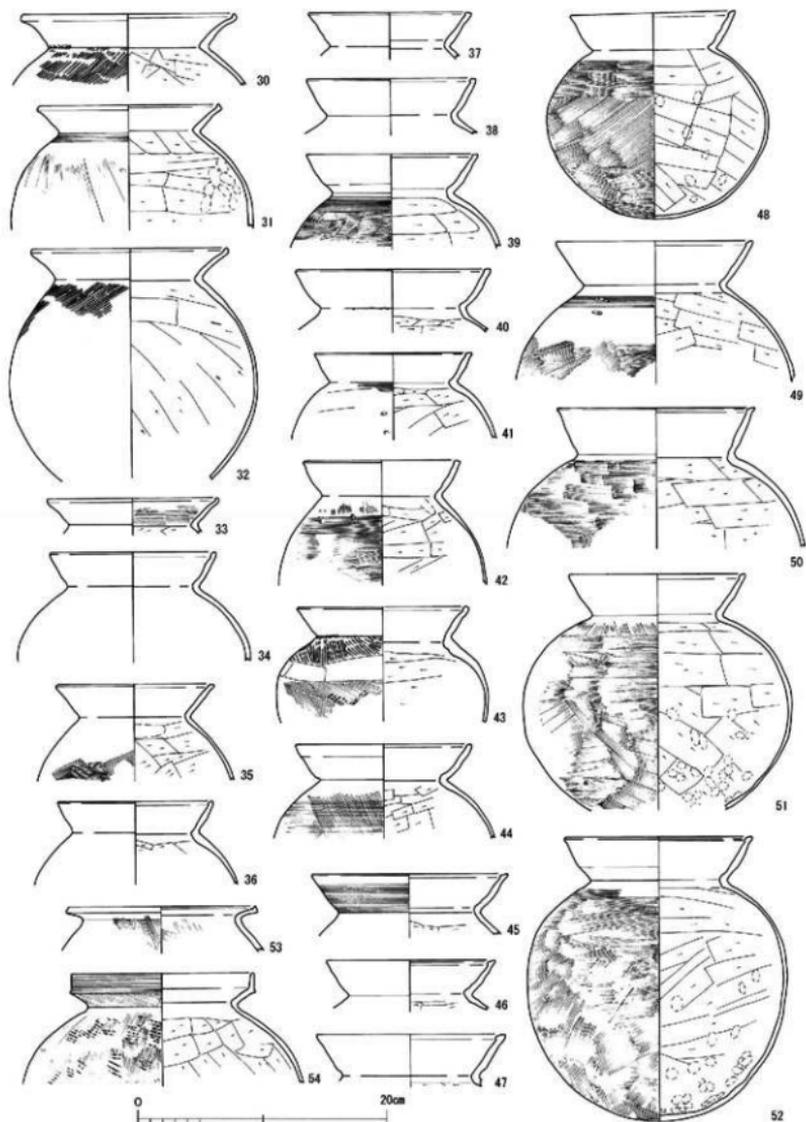


- | | | |
|------------------|------------------------|------------------------|
| 1. 黄褐色細粒砂混粘土 | 10. 灰色極細粒砂混シルト | 19. 暗黄灰色極細粒砂混粘土質シルト |
| 2. 褐色シルト | 11. 褐色細粒砂混シルト | 20. 淡灰色極細粒砂混粘土質シルト(灰少) |
| 3. 淡黄灰色粘土 | 12. 暗黄灰色極細粒砂混シルト | 21. 暗褐色極細粒砂混シルト |
| 4. 暗褐色粗粒砂混粘土(灰多) | 13. 褐色シルト | 22. 暗黄灰色極細粒砂混粘土 |
| 5. 灰褐色細粒砂混シルト | 14. 暗黄灰色極細粒砂混シルト | 23. 灰色極細粒砂混粘土質シルト |
| 6. 灰色細粒砂混シルト | 15. 暗褐色極細粒砂混粘土質シルト | 24. 21に黄褐色粘土ブロック含む(灰) |
| 7. 褐色極細粒砂混シルト | 16. 灰色細粒砂混粘土質シルト | 25. 褐色細粒砂混粘土(汚れる) |
| 8. 灰色極細粒砂混シルト | 17. 暗黄灰色極細粒砂混粘土質シルト | 26. 灰色細粒砂混粘土 |
| 9. 暗黄灰色極細粒砂混シルト | 18. 暗褐色極細粒砂混粘土質シルト(灰多) | 27. 褐色細粒砂混粘土 |

第10図 S I 501平・断面図

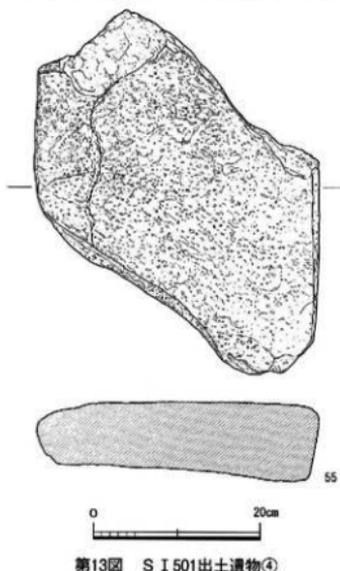


第11図 S I 501出土遺物②



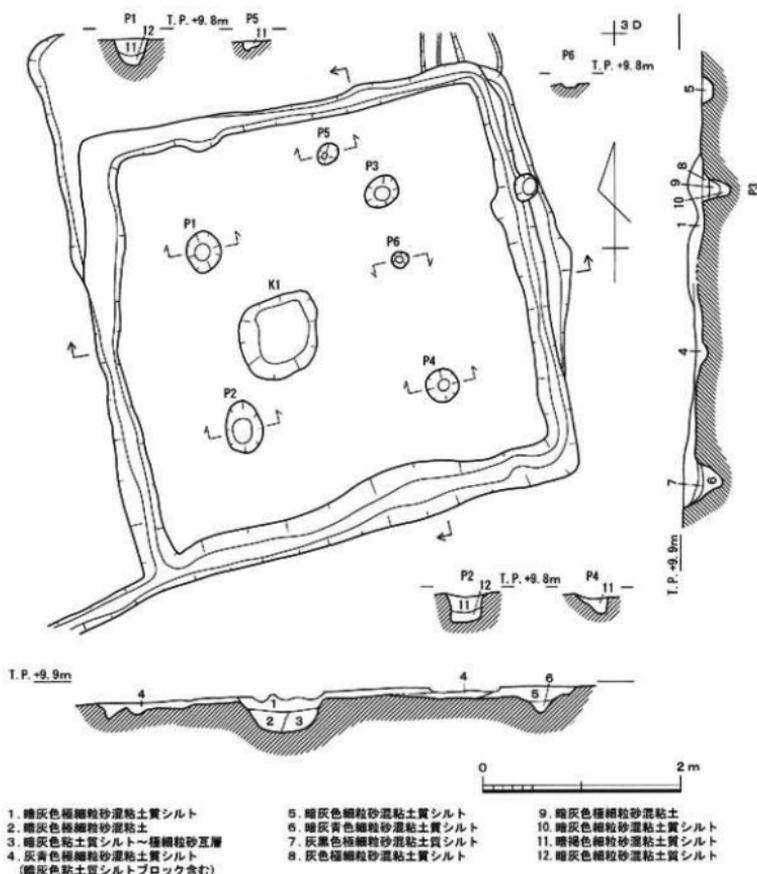
第12図 S I 501出土遺物③

うで、この部分の埋土からは布留式期中相段階頃までの土器が多量に出土しており(4~54)、住居廃絶後に廃棄坑として機能していたと考えられる。4~10は小形丸底壺で、口径は9.0~11.0cmを測る。4・6は完形品で、口径・器高・体部最大径は4が9.8・7.8・7.7cm、6が9.6・8.2・8.8cmを測る。器形の特徴としては、4・7は口径が体部最大径を凌駕し、他はほぼ等しい。外面調整は4・5・7がヘラミガキを施し、6・8・9はハケである。4は口縁部内面にもヘラミガキを施す。7はヘラミガキが粗で肩部にハケが認められる。胎土は4・6が砂粒を多く含む生駒西麓産の胎土で、他は比較的精良な胎土である。色調は4~6が褐色系、7~9が明褐色系、10が淡灰黄色である。11は壺で、復元口径11.7cmを測る。磨耗の為不明瞭であるが、体部外面にはタタキが認められる。12は壺あるいは甕で、復元口径11.0cm・体部最大径14.8cmを測る。外面調整は横方向のタタキ後板ナデ、内面調整は上部ナデ、下部ヘラケズリである。13は精製の直口壺で、口縁部上位を欠く以外はほぼ完形に接合される。体部最大径16.2cm・頸部径7.0cmを測る。調整はヘラミガキを多用するもので、底部外面には先行するヘラケズリが認められる。14は広口壺で、復元口径18.0cmを測る。15は複合口縁壺で、口径16.8cm・体部最大径19.6cm・頸部径10.5cmを測る。外面調整はハケを基調とし、体部内面はハケである。16は直口壺で、口径16.5cm・体部最大径25.2cm・頸部径11.8cmを測る。調整は外面ハケ、内面はヘラケズリで上位ナデである。17~20は精製の小形鉢で、残存率は17が1/2残存、18がほぼ完形、19が完形、20が1/5残存である。口径11.2~13.4cm・器高6.0~6.8cm・体部最大径10.0~11.2cmを測る。外面調整はヘラケズリで、19は口縁~体部にヘラミガキを加える。内面調整はナデで、20はヘラミガキを加える。19は体部外面に黒斑を有する。21は鉢で、復元口径15.2cmを測る。調整は外面ナデで、表面にクラックが見られ、内面はハケである。22は大形鉢で、復元口径42.6cmを測る。調整は口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ、内面ヘラケズリである。砂粒を多量に含む胎土で、山陰地方からの搬入品と考えられ、時期は庄内式期新相に比定される。23~29は高杯である。23~25は有稜高杯で、杯屈曲部に稜を成し、脚柱部~裾部の屈曲も比較的明瞭である。全容の知れる24は、口径15.0cm・器高10.8cm・底径12.0cm・脚高6.3cmを測る。布留式期中相に比定される。26~28は杯屈曲部、及び裾部の屈曲が丸味を帯び、23~25より退化した形態である。26は口径15.8cm・器高14.0cm・底径12.0cm・脚高8.6cmを測る。布留式期新相に比定される。29は椀形高杯で、口径14.0cm・杯部高5.0cmを測る。調整はヘラミガキを多用する。庄内式期に比定される。30~54は甕である。30~33は体部内面ヘラケズリが口縁屈曲部に及び「く」の字形を呈するもので、庄内式期の要素を残している。その内30・32は外面タタキ、31はハケを施し、33は不明である。口

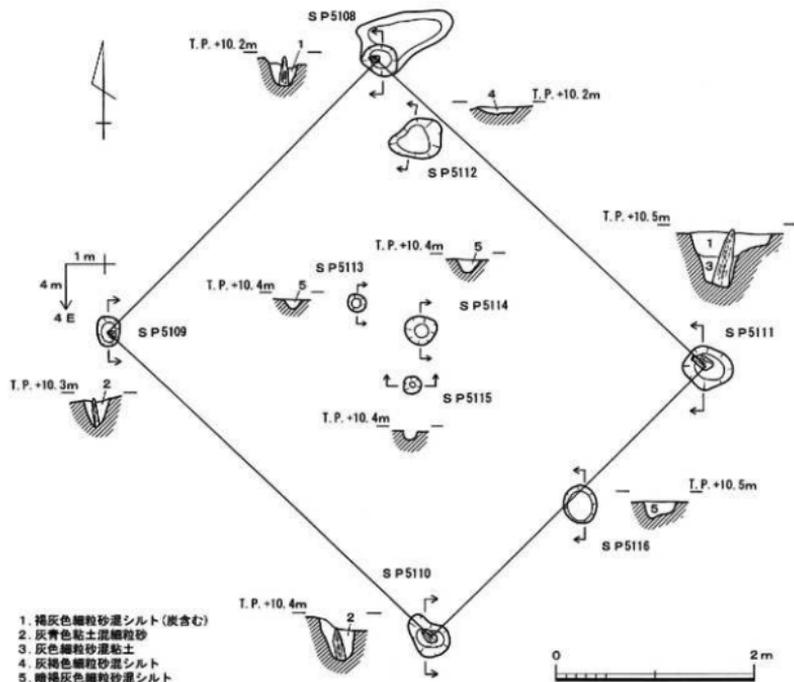


第13図 S I 501出土遺物④

径は13.8cm(33)～17.4cm(30)である。34～52は布留式甕である。34～44は口縁端部が丸いもの、方形に近いもの、そして小さく肥厚し水平～外傾する面を成すものである。口径は12.6cm(36)～15.8cm(40)を測る。45～52は口縁端部が内側に肥厚し、内傾する面を成すものである。口径は13.3cm(48)～15.9cm(45)を測る。全容の知れる48は口径13.3cm・器高16.8cm・体部最大径18.0cm、52は口径15.2cm・器高23.2cm・体部最大径21.0cmを測る。43は肩部外面タタキであるが、生駒西



第14図 S I 502平断面図



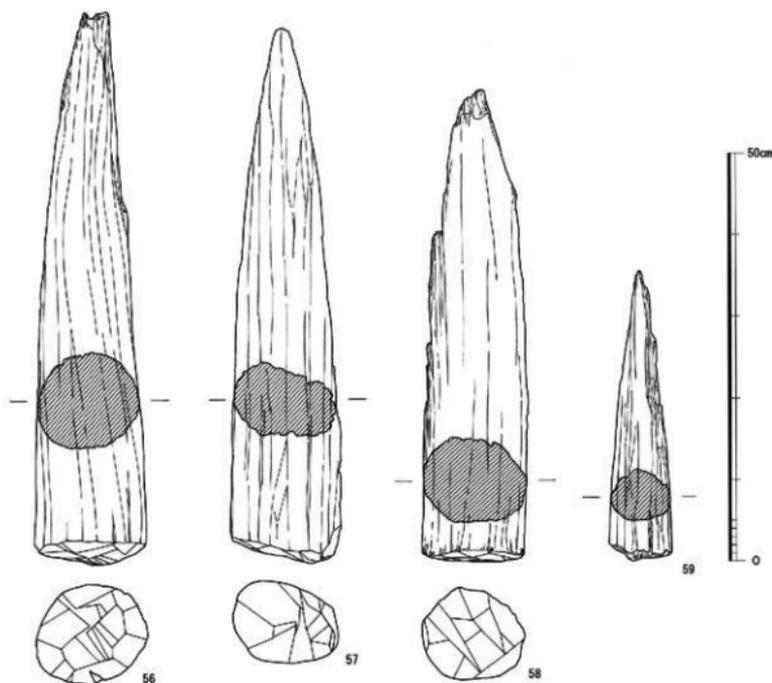
第15図 SB 501平面図

麓産胎土の特異な資料である。41・42・49は肩部に刺突文を有する。53は復元口径15.4cmを測り、口縁端部を摘み上げるもので、外面調整はハケである。54は復元口径14.6cmを測る。口縁部が短く直立し、外面に柳描直線文を巡らせる。調整は体部外面タキ後ハケである。53は四国、54は吉備地方からの搬入品であろう。

住居の時期については、柱穴内土器からみて庄内式期新相が廃絶の時期に比定され、布留式期中相段階には廃棄坑として利用されていたと捉えられる。

S I 502

3 C区に位置する平面方形の竅穴住居である。主軸は座標北から約12度西に振っている。規模は一辺約4.5m、検出面から床面までの深さは10~20cmを測る。S I 501よりやや小規模であるが、住居の方向はほぼ同じと捉えられよう。床面では壁溝、主柱穴(P1~4)、炉(K1)の他、ピット(P5・6)を検出した。壁溝は全周し、幅17~58cm・深さ10~27cmを測り、南辺で規模が大きい。また南西角から西にのびる排水溝を有しており、S D 543に繋がっている。主柱穴は平面形に沿った4本(P1~4)で、柱間距離は約1.9mを測る。平面円形~楕円形を成し、規模(長辺×短辺×深さ)はP1が42×35×27cm、P2が52×37×30cm、P3が35×29×29cm、P4が34×33×19cmである。中



第16図 SB501柱根

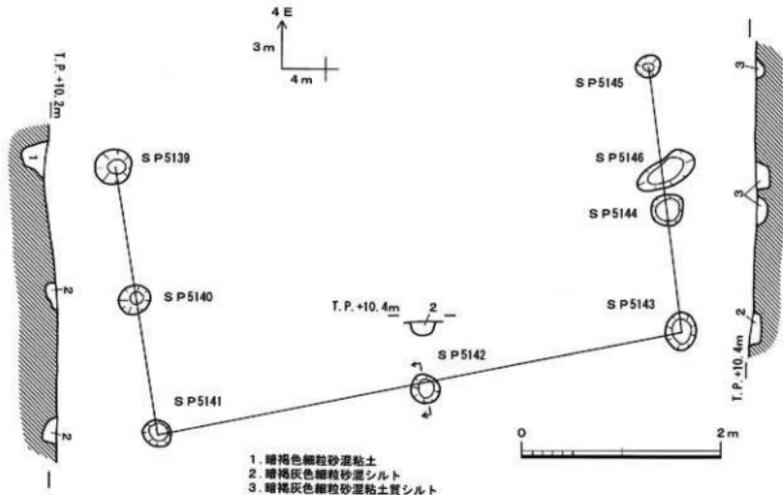
央西寄りには東西78cm・南北85cm・深さ33cmの炉(K1)を有しているが、顕著な炭の堆積は認められない。住居内埋土からは庄内式期新相に比定される土器片が少量出土しているが、図化しえるものは無かった。

SB501

3E区に位置する掘立柱建物で、規模は桁行約3.9m×梁行約4.5mを測る。SP5108～5111で構成され、主軸は座標北から約46度西に振っており、堅穴住居(SI501・502)とは大きく異なる。柱穴には太さ8～14cm・長さ36～68cmの柱根(55～58)が遺存していた。構造は1×1間であるが、柱間距離からみると桁間が南東辺中央のSP5116も含めた2間が妥当と思われ、梁間は2～3間である可能性もある。またほぼ中央に位置するSP5114を含めて総柱の建物とも考えられる。遺物はSP5108・5111から庄内式期頃の土器片が出土しているが、図化しえるものは無かった。柱穴の法量等は表3にまとめた。

SB502

4E区に位置する掘立柱建物で、規模は桁行約2.7m×梁行約5.3mを測る。SP5139～5145で構成され、主軸は座標北から約11度西に振るもので、堅穴住居(SI501・502)の主軸に近いとい

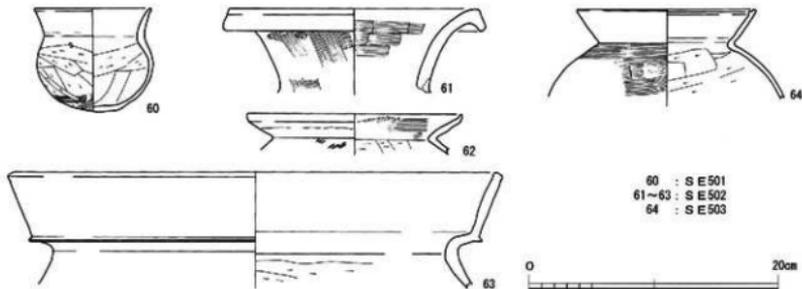


第17図 SB502平面図

える。構造は桁間2間以上×梁間2間が確認でき、柱間距離は桁間約1.4m・梁間約2.6mを測る。柱穴から遺物は出土しておらず時期は不明であるが、建物の方向性から見て竪穴住居と同じく区内式期新相が考えられる。柱穴の法量等は表3にまとめた。

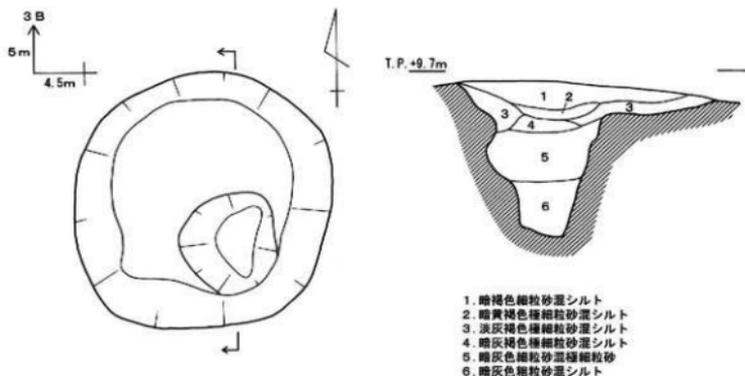
SE501

3B区に位置する素掘り井戸で、平面形はほぼ円形を呈し、規模は直径1.52~1.67mを測る。掘方は二段掘り状を成しており、検出面から深さ約0.1mが断面皿状、さらに南側を直径約0.6m・深さ約0.7mの断面逆台形に掘り下げている。埋土は6層から成り、おおまかにみて下層が暗灰色粗粒砂・細粒砂混シルト、中層が暗灰色細粒砂混極細粒砂、上層が暗褐色系極細粒砂混シルトである。遺物は布留式期中相までの土器が少量出土しており、小形丸底壺1点(60)を図化した。



第18図 SE501~503出土遺物

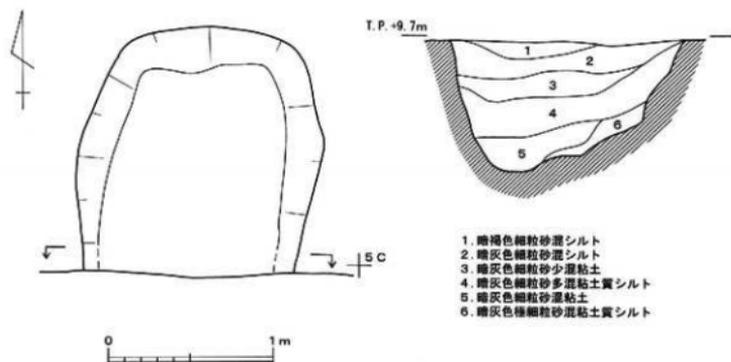
60は約1/2の残存で、口径9.4cm・器高8.5cm・体部最大径9.4cmを測る。調整は底体部外面ヘラケズリ後底部ハケ、内面上部ヘラケズリ、下部ナデで、口縁部ヨコナデである。褐色を呈し、胎土中には砂粒を多く含む。



第19図 SE 501断面図

SE 502

4 B区に位置する素掘り井戸で、検出部分からみて平面形は隅丸長方形と考えられる。規模は東西1.45m・南北1.5m以上を測り、南部は側溝内に収まる。断面形状はほぼ逆台形を成し、検出面からの深さは約0.8mを測る。埋土は6層から成り、おおまかにみて暗灰色～暗褐色系細粒

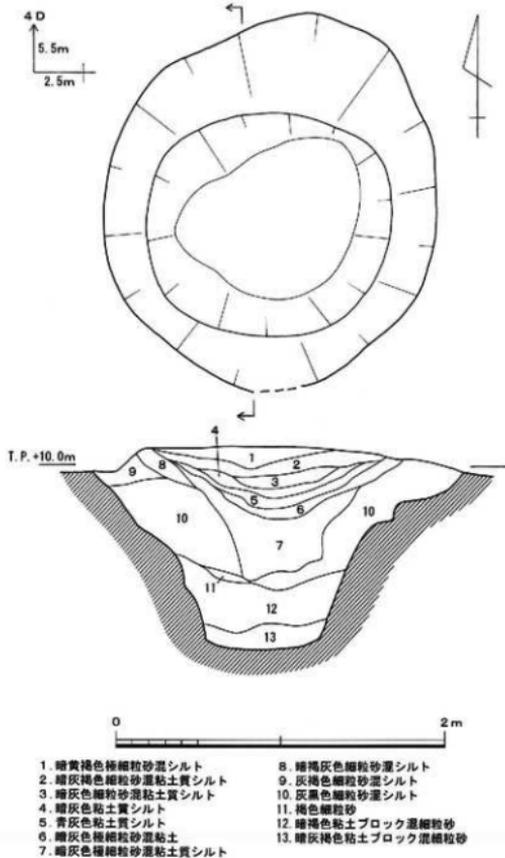


第20図 SE 502断面図

砂混シルト～粘土で、全体にブロック状である。遺物は布留式期新相までの土器が少量出土しており、61～63を図化した。61は弥生土器広口壺で、復元口径20.0cmを測る。調整はハケである。生駒西麓産の胎土で、時期は後期初頭に比定されよう。62は庄内式壺で、復元口径17.4cmを測る。口縁部内面にハケを施す。63は土師器複合口縁壺で、復元口径40.0cmを測る。調整は口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ、内面ヘラケズリである。砂粒を多量に含む胎土で、形態的にも山陰地方からの搬入品と考えられ、時期は庄内式期新相に比定される。なおS I 501出土の22と酷似しており、体部外面調整の違いを部分的なものと捉えた場合同一個体の可能性がある。

S E 503

4 D区に位置する素掘り井戸で、平面形はやや南北に長い偏円形を呈し、直径は東西約2.0m・南北約2.3mを測る。掘方は二段掘りに近い逆台形を呈し、検出面からの深さは約1.2mを測る。埋土は13層から成り、おおまかにみて下層が灰褐色系粘土混細粒砂、中層が灰黒色細粒砂混シルト、上層が暗灰色～暗褐色系シルト～粘土である。断面観察から見て掘り直しが行われており、中央の直径約1.5m・深さ約0.8mの上層部分(1～7層)については、掘り直し後の堆積部分と捉えられる。遺物は布留式期中相までの土器が少量出土しており、64を図化した。64は布留式壺で、復元口径14.4cmを測る。内側に肥厚させた口縁端部に1条の沈線を巡らせる。なお同一個体と考えられる破片の屑部には二段に刺突文が認められる。時期は布留式期中相に比定される。



第21図 S E 503平面断面図

S K 501

1 D・E区で検出した土坑で、規模は検出部分で東西約7.0m・南北約0.7mを測り、北は調査区外に続く。深さ約5cmの浅い土坑で、底面は平坦である。埋土は褐色極細粒砂混シルトの単層である。遺物は出土していない。

S K 502

2 E・F区で検出した土坑で、平面形は方形の角部を成しており、北辺から北に延びるS D 537が付随している。S D 538との切り合いは無く一連の遺構と捉えられる。規模は南北約2.8m・東西約2.4m・深さ約6.0cmを測る。また底部中央には東西約40cm・南北50cm以上の窪み部分が見られる。断面逆台形を呈し、深さ約23cmで、埋土は3層から成り、上から暗褐色極細粒砂混シルト、褐色極細粒砂混シルト、暗褐色極細粒砂混シルト質粘土で、上層には炭を多く含んでいる。遺物は出土していない。

S K 503

4 B区で検出した平面不定形な土坑で、検出部分の規模は南北約1.5m・東西約1.2mを測り、南は調査区外に続く。断面逆台形で深さ約50cmを測り、埋土は上から灰色細粒砂混粘土質シルト、灰色極細粒砂混粘土質シルト、暗褐色細粒砂混粘土、淡褐色細粒砂混粘土である。遺物は出土していない。

S D 501～532

調査区北西部で検出した溝群である。規模はS D 502が幅約1.6mを測る以外は、幅0.2～0.6mを測る。東西方向の溝とこれらに直交する溝で構成されている。

S D 533～536

S D 533は調査区中央北部で約24mにわたって検出した蛇行する溝である。幅約0.4m・深さ約0.3mを測り、断面逆台形を呈し、埋土は上層が褐色細砂混じりシルト質粘土、下層が暗褐色粗砂混じりシルトである。庄内式期頃の土器が少量出土している。南部ではS D 534・535が南に分岐して延び、S I 502に至っている。S D 536はS D 533の約7m東に位置しており、S D 533の一部と平行している。

S D 537～540

S D 538は調査区北東部で検出した南北方向に延びる蛇行する溝で、規模は検出長約17m・幅約0.5m・深さ約0.5mを測る。断面逆台形を呈し、埋土は4層から成り、上から褐色極細粒砂混シルト、暗褐色極細粒砂混シルト、暗褐色極細粒砂混シルト、暗褐色極細粒砂混粘土質シルトである。位置的にはS I 501の東側に位置しており、方向性や住居南東角に沿って屈曲していることから勘案して、防水機能等、S I 501との有機的な関連が考えられる。北部ではS D 539・540が合流する状況である。S D 537はS D 538の西側に平行している。S D 538からは布留式期中相までの土器が出土しており、65～67を図化した。65は小形鉢で、約2/3が残存しており、口径16.4cm・器高6.7cmを測る。66は鉢で約1/3が残存しており、復元口径10.5cm・器高6.5cmを測る。調整は全体にヘラミガキが施され、口縁端部はヨコナデである。67は壺で、復元頸部径8.8cm・体部最大径27.2cmを測る。調整は体部外面ヘラミガキ、内面板ナデ。

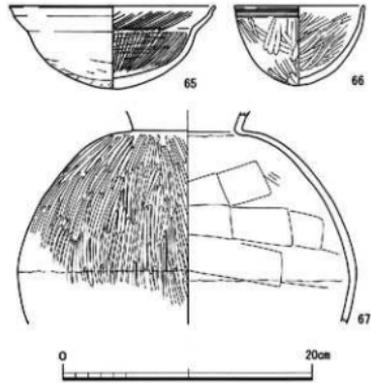
S D 541・542

調査区南西部で検出した北西～南西方向の溝である。S D 541は検出長約11.7m・幅約1.0mを

測り、北部では西に屈曲して幅が増大し調査
区外に続く。断面皿状を呈し、深さ10cm程度
で、埋土は暗灰褐色細粒砂多混粘土質シルト
である。SD542はSD541の東側にほぼ接し
て平行している。SD541からは弥生時代後
期～庄内式期に比定される土器片が少量出土
している。

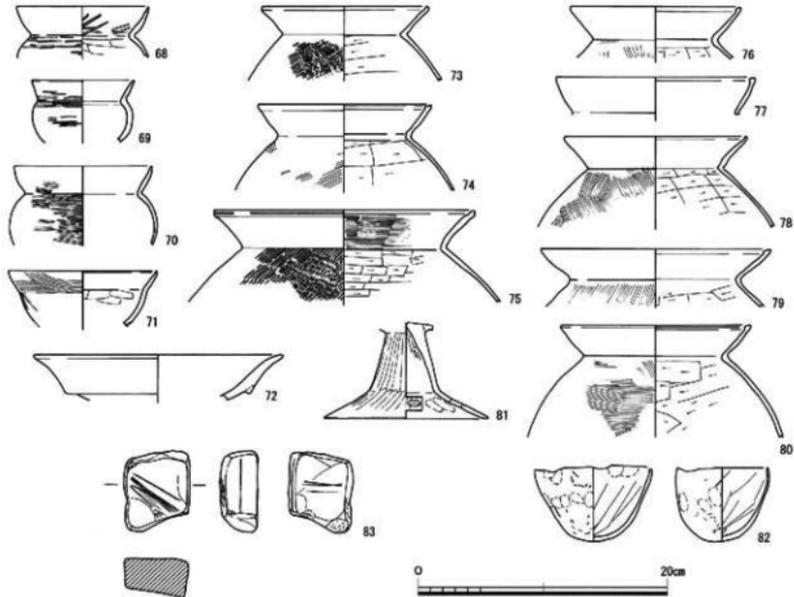
SD543

SI502の南西角から、南壁溝を延長して
西に延びる溝で、住居の排水溝と捉えられる。
約2.5mで北に屈曲した後、さらに西に屈曲
して延びており、検出長約16m・幅約0.5m・
深さ約0.5mを測る。断面逆台形を呈し、埋
土は3層から成り、上から暗褐灰黄色細粒砂
混シルト質粘土、暗灰褐色細粒砂混粘土質シルト、暗灰色極細粒砂混粘土質シルトである。出土
遺物としては、西への屈曲部の上層に土器溜りが形成されているが、ここ以外からは少量であつた。布留式期中相までの土器・石器が出土しており、68～83を図化した。68～70は小形丸底壺で



第22図 SD538出土遺物

第22図 SD538出土遺物

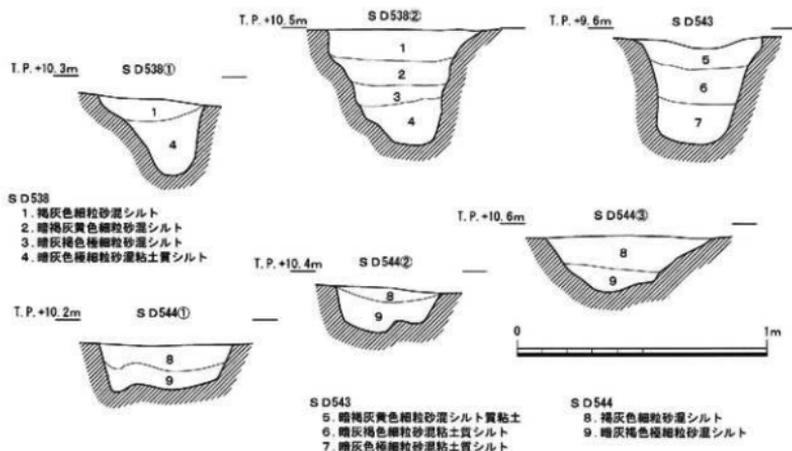


第23図 SD543出土遺物

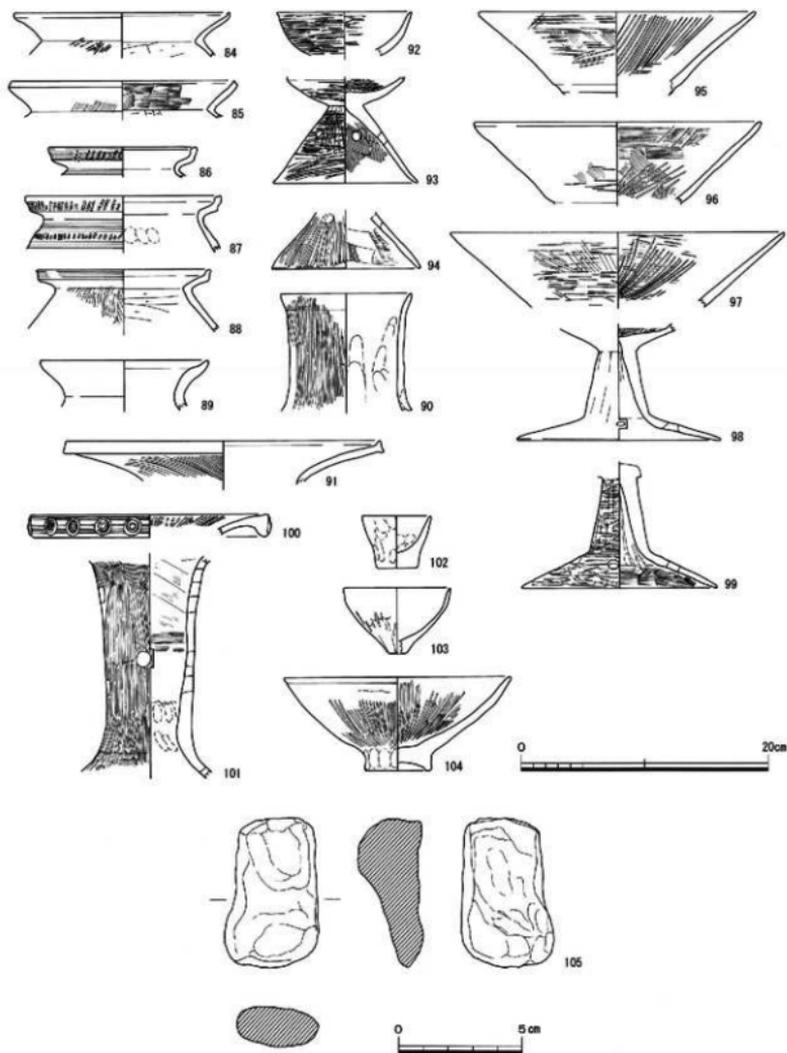
ある。口径・体部最大径は68-10.6・10.5cm、69-8.3・8.0cm、70-11.2・11.5cmを測り、いずれも口径と体部最大径がほぼ等しいタイプである。調整はヘラミガキを多用する。71は小形鉢で、復元口径12.0cmを測る。外面に黒斑を有する。72は複合口縁壺で、復元口径20.0cmを測る。73-80は甕で、口径13.4-21.0cmを測る。73・75は肩部にタタキを施す庄内式甕、他はハケ調整の布留式甕であるが、78は体部内面のヘラケズリが口縁屈曲部に及ぶもので、庄内式甕の要素を残している。81は高杯脚部で、底径13.2cmを測る。裾部に四方孔を穿つ。82は鉢である。手握ね成形によるもので口縁部が歪で、平面形は長径9.4cm・短径7.4cmの楕円形を成す。器高6.2cmを測り、調整は外面ナデ、内面ヘラナデである。83は砥石で、長さ6.6cm・幅5.2cm・厚さ3.1cmを測る。全面を使用しており、両平面・片側面には断面V字型を成す溝状の使用痕が認められる。二次焼成を受けており、片面が黒色を呈する。

SD544

調査地南部を約40mにわたって直線的に延びる東西方向の溝で、東端ではほぼ直角に北に屈曲している。幅約0.5m・深さ約0.2mを測り、断面逆台形を呈する。埋土は上層が褐灰色細砂混じりシルト、下層が暗灰褐色微砂混じりシルトである。溝の方向が竪穴住居(S I 501・502)の主軸と一致していることから、有機的な関係が想定でき、居住域を区画する性格等が考えられよう。弥生時代後期末～庄内式期新相の遺物が出土しており、84-105を図化した。84・85は庄内式甕である。復元口径17.5cm・18.5cmを測る。86-88は受け口状口縁の甕である。復元口径12.0cm・16.0cm・14.0cmを測る。86・87は口縁部外面～肩部に櫛描直線文・櫛描刺突文、88は口縁部外面に櫛描直線文を巡らせるものである。88は体部外面板ナデ、内面ヘラケズリである。いずれも生駒西葦産の胎土と思われるが、口縁部形状や装飾の特徴から近江地方からの影響が看取される。庄内式古相のものか。89は広口壺で、復元口径13.6cmを測る。頸部直下にヘラによる刺突文を巡



第24図 SD538・544断面図



第25図 SD544出土遺物

らせる。90は長頸壺で、復元口径10.6cmを測る。口縁部外面ヘラミガキである。91は複合口縁壺と考えられ、復元口径26.0cmを測る。外面調整はハケである。在地の胎土ではなく、形態から見て四国からの搬入品と考えられる。92は碗形高杯の杯部で、復元口径11.0cmを測る。調整はヘラミガキである。93・94は小形器台で、底径は11.7cm・12.0cm、93の脚高は6.4cmを測る。調整はヘラミガキで、脚部内面はハケ。93は脚部の四方、94は三方に円孔を穿つが、93の円孔は均等でなく片側に3個が片寄っている。95～99は有稜高杯で、口径は22.4～27.2cm、底径は16.5・15.8cmを測る。調整はハケ後ヘラミガキを基調としており、98・99は裾部に四方孔を穿つ。100・101は器台で、同一個体の可能性がある。復元口径19.4cmを測る。100は外面ハケ・内面ヘラミガキ、101は外面ハケ後ヘラミガキ、内面上位ハケである。100は口縁部外端面に櫛描直線文・二重竹管押圧円形浮文を巡らせる。101は3段4方向に円孔を施すが、均等でなくズレが大きい。102・103は手捏ね成形による小形鉢である。口径・器高・底径は102-5.6cm・4.3cm・3.4cm、103-8.7cm・5.4cm・1.6cmを測る。103は外面に縦方向のクラックが顕著に見られる。104は鉢で、復元口径18.4cm・器高7.6cm・底径5.5cmを測る。調整はヘラミガキを多用する。105は鉄製品である。錆に覆われ、現状で長さ6.1cm・幅3.8cm・厚さ2.6cmを測る。形状からみて鉄斧の可能性はある。

S D545～555

3・4 B～D区で検出した幅40cm・深さ10cm程度の溝群である。S D547やS D552はS D544と平行・直交方向の溝で、何らかの関連が考えられる。S D547はS D543を切っている。遺物はS D552出土の123、S D546出土の125を図化した。123は庄内式甕で、復元口径17.4cmを測る。125は平基無蓋式石甕で、法量的にみて中型に分類されるものである。完形品で、法量は長さ7.1cm・幅3.0cm・厚さ1.0cmを測る。全体に調整剥離が施され、主要剥離面を残していない。刃部はやや鋸歯状を呈する。

S D556～562

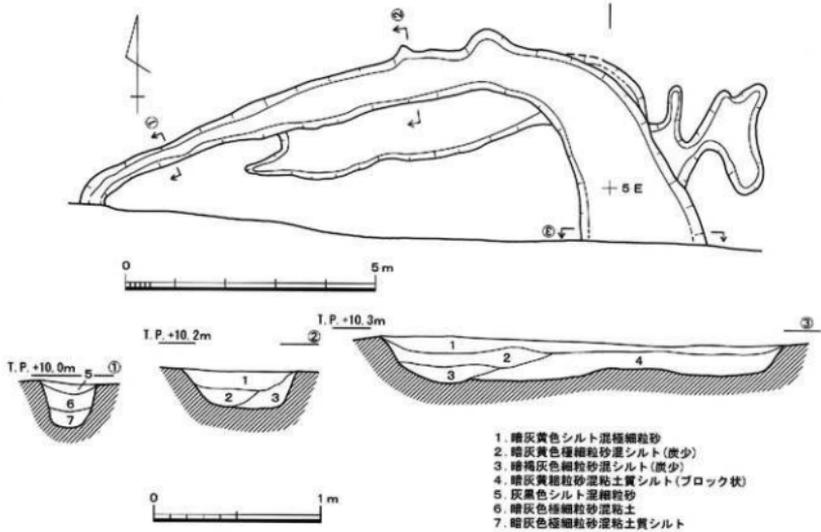
3・4 D・E区で検出した溝群で、南北方向とこれらに直交する東西方向の溝で構成される。幅40cm・深さ10cm程度を測り、いずれも直線的に伸び、S D557は直角に屈曲する。遺物はS D557出土の124を図化した。124は台付き壺、あるいは甕の脚台部である。底径8.3cm、脚台高2.8cmを測る。磨耗の為調整は不明である。

S D563

3 E区で検出した北東-南西方向の溝である。S B501を構成するS P5111と重複する関係にあり、S B501に関連する溝の可能性もある。布留式期古相までの土器が出土しており、118～122を図化した。118は小形鉢で、復元口径11.0cmを測る。調整は体部外面ハケ、内面ナデである。角閃石を含まない胎土で他地域産と考えられる。119は布留式甕で、復元口径13.8cmを測る。肩部外面にタテハケが認められる。120～122は壺・甕の底部で、底径はそれぞれ4.4cm・7.2cm・3.6cmを測る。調整はいずれも板ナデ、ナデである。

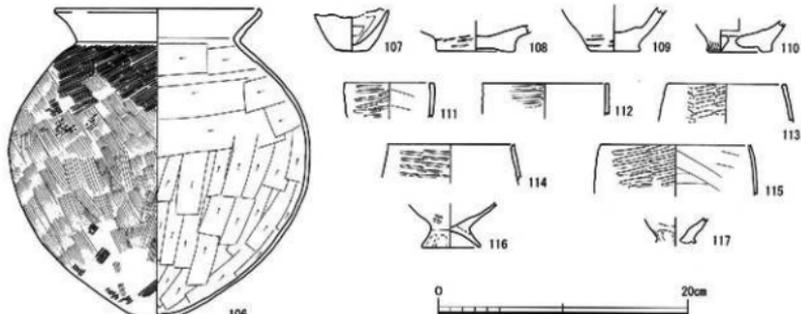
S D564

4・5 C～E区で検出した溝で、東西方向に伸び、西・東端で南に屈曲する。溝の平面形状、及び南部の郡川第3次調査地の状況からみて、墳墓の周溝北部にあたる可能性がある。この場合墳丘上部は削平されており、また西部では周溝は底部のみが遺存しているため幅が狭く浅い。規模は一辺9m程度と考えられ、周溝は東部で幅約2.0m・深さ約0.3mを測る。周溝断面は逆台形

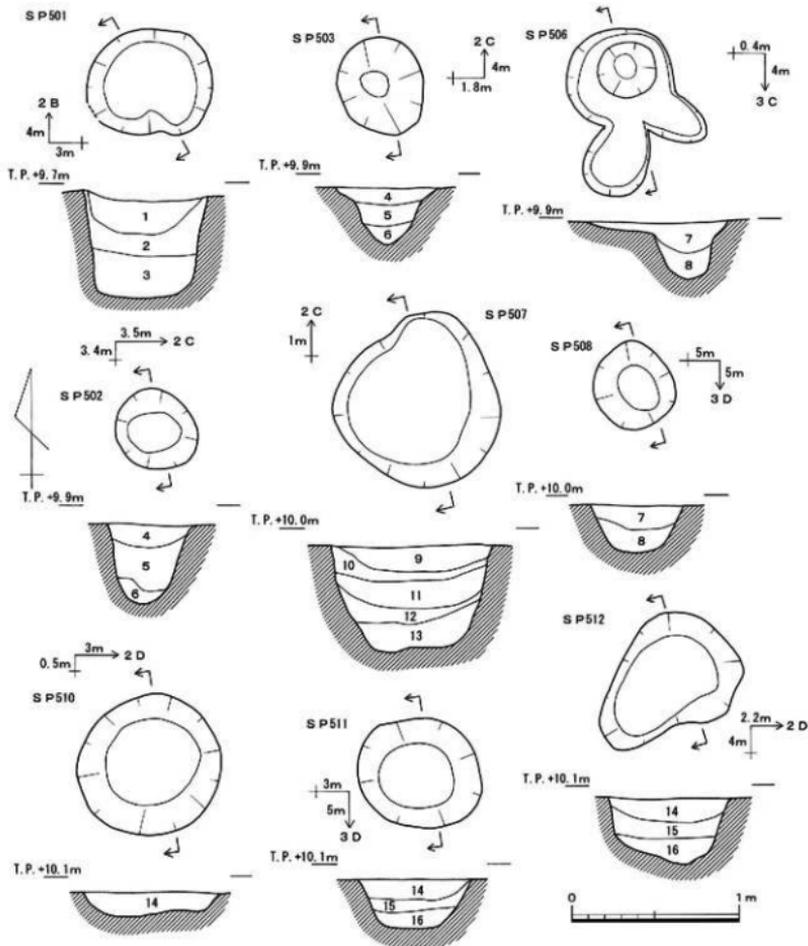


第26図 SD564断面面図

に近く、埋土は暗褐色系細粒砂混シルト～粘土で、下層には炭が含まれる。また内側には墳丘盛土の流れ込みとも捉えられる暗灰黄色粗粒砂混粘土質シルトが認められる。遺物は庄内式期新相までの土器が出土しており、106～117を図化した。106は庄内式甕で、北東コーナー上層からの出土である。完形近くに復元され、口径16.6cm・器高25.5cm・体部最大径24.2cmを測る。調整は外面細かいタタキ(7本/cm)後ハケ、内面ハラケズリである。107は小形鉢で、口径5.9cm・器高3.4cm・底径2.6cmを測る。黒斑を有する。108は壺底部で、底径6.3cmを測る。底面はハラケズリである。109は甕底部と考えられ、底径4.0cmを測る。110は底部穿孔土器の底部で、底径5.2cm



第27図 SD564出土遺物



- | | | |
|----------------|---------------------|-------------------------|
| 1. 暗灰黄色極細粒砂混粘土 | 7. 灰褐色極細粒砂混粘土 | 12. 暗灰褐色粘土質シルト混極細粒砂～細粒砂 |
| 2. 灰黄色極細粒砂混粘土 | 8. 暗褐色極細粒砂混粘土 | 13. 暗灰褐色極細粒砂混粘土質シルト |
| 3. 暗灰色極細粒砂混粘土 | 9. 灰黄色極細粒砂混粘土 | 14. 暗黄色極細粒砂混シルト |
| 4. 褐色極細粒砂混粘土 | 10. 暗灰黄色極細粒砂混粘土 | 15. 暗灰褐色極細粒砂混粘土 |
| 5. 褐色極細粒砂混粘土 | 11. 暗灰褐色極細粒砂混粘土質シルト | 16. 暗灰色極細粒砂混シルト |
| 6. 灰黄色極細粒砂混粘土 | | |

第28図 SP 501～503、506～508、510～512断面面図

を測る。中心からずれた位置に焼成後の穿孔を有する。111~117は製塩土器である。111~115は口縁部で、器壁は2mm程度である。形状には体部から口縁部がほぼ直立する111・112と、ややすぼまる113~115がある。口径は前者が7.2・10.0cm、後者が9.6~12.0cmを測る。外面調整は平行タタキで、タタキ幅は114が約2mm、他は約4mmである。内面はいずれもナデ。116・117は脚台部で、116は底径4.7cm・脚台高1.5cmを測る。体部外面下位のタタキはナデ消しており、脚台外面には指頭爪痕が明瞭に認められる。製作にあたっては脚台上部に体部を付加している。これらの製塩土器は形態から脚台Ⅲ式に分類される。製塩土器の破片数は、口縁部30点以上、一辺1cm以上の破片約380点、それ以下の細片約2,000点が出土している。

表2 第5面溝一覧表

遺構名	地区	長さ (m)	幅 (cm)	深さ (cm)	埋 土 (上から)	遺 物
S D 501	1B-C	1.5	50	8	暗褐色粗粒砂混シルト	
S D 502	1B-D	14.2	68~163	12	黄褐色細粒砂混粘土質シルト	
S D 503	1C	2.52	38~50	5	*	
S D 504	*	1.5	70	12	*	
S D 505	1D	4.7	35~55	16	褐色細粒砂混シルト質粘土・暗褐色黄色極細粒砂混粘土質シルト	庄内
S D 506	2A-B	1.35	39	17	褐灰色砂礫混粘土	
S D 507	2B	0.5	40	7	*	
S D 508	1B-C, 2B	8.5	40~70	7	*	
S D 509	2B	1.1	15	3	*	庄内
S D 510	*	4.15	30~80	6	*	
S D 511	2B-C	4.4	20	5	*	
S D 512	*	3.7	40	6	*	
S D 513	2B	10.3	40	6	*	庄内
S D 514	2B-C	4.4	20	11	*	
S D 515	*	2.2	50	8	*	
S D 516	2B	7.2	38~105	5	*	庄内
S D 517	2A-D	24.55	20~84	13	*	弥生中、庄内
S D 518	2B	2.6	48	21	*	
S D 519	2B-C	8.2	35~70	45	*	
S D 520	2C	4.0	60	16	褐灰色砂礫混粘土・褐色極細粒砂混粘土	
S D 521	1-2D	2.3	42	12	暗褐色粗粒砂混シルト	
S D 522	*	1.9	65	11	*	
S D 523	2D	3.0	40	23	*	
S D 524	2B	2.4	40	8	褐灰色砂礫混粘土	
S D 525	*	1.15	30	6	*	
S D 526	*	2.65	41	5	*	
S D 527	*	2.05	30	7	*	
S D 528	*	3.7	35~45	9	*	
S D 529	*	1.2	40	9	*	
S D 530	2C	3.0	45	6	*	
S D 531	1-2B	3.2	50	10	*	
S D 532	1-2C-D	7.0	45~120	9	*	
S D 533	1D, 2C-D	16.9	55	26	褐色細粒砂混シルト質粘土	庄内
S D 534	2-3C	1.35	20	3	*	
S D 535	*	4.7	30	4	*	
S D 536	2D	4.25	35	9	暗灰色細粒砂混シルト	
S D 537	2F	1.4	45	3	暗褐色極細粒砂混シルト	
S D 538	2E, 1-2F	18.6	45~75	47	別記	弥生前・後、庄内
S D 539	1F	1.2	30	6	褐灰色極細粒砂混シルト質粘土	
S D 540	*	2.1	170	9	暗褐色粗粒砂混シルト質粘土	
S D 541	3A, 3-4B	12.1	100	8	褐灰色粗粒砂混シルト	庄内
S D 542	4B	1.35	40	7	*	
S D 543	3A-C	18.4	20~115	47	別記	庄内、布留
S D 544	3D~F, 4B~D	41.5	40~75	29	褐灰色細粒砂混シルト・暗褐色極細粒砂混シルト	弥生後、庄内
S D 545	3B-C	5.0	20~40	7	暗灰色細粒砂混シルト	不明
S D 546	3-4A, 3C	4.8	40	12	暗褐色黄色極細粒砂混シルト・暗褐色粗粒砂混粘土質シルト	弥生後、庄内
S D 547	3-4C	10.3	30~80	17	暗褐色粗粒砂混シルト・暗褐色黄色極細粒砂混シルト	
S D 548	3C	2.9	35~65	8	暗褐色粗粒砂混シルト	庄内

遺構名	地区	長さ (m)	幅 (cm)	深さ (cm)	埋 土 (上から)	遺 物
S D 549	◇	7.55	40~75	9	◇	庄内
S D 550	3D	2.1	30~80	7	暗黄褐色細粒砂混シルト	庄内
S D 551	◇	3.4	20~100	5	◇	庄内
S D 552	3・4C, 3D	10.65	30~110	15	◇	庄内
S D 553	4C・D	4.1	38~45	4	褐灰色極細粒砂混シルト	
S D 554	4D	2.0	45	12	◇	庄内、布留
S D 555	4C・D	4.5	50	16	灰色砂礫	
S D 556	3D・E	10.0	45	5	褐灰色極細粒砂混シルト	
S D 557	◇	9.5	50	7	◇	庄内
S D 558	3・4D	10.55	30~45	11	◇	
S D 559	4D・E	7.85	25~61	11	褐灰色極細粒砂混シルト	庄内
S D 560	3・4D~F	11.1	35	9	◇	
S D 561	4D・E	5.6	40	9	◇	
S D 562	◇	1.7	65	7	◇	
S D 563	3E	3.0	90	20	褐灰色極細粒砂混シルト	弥生後、庄内、布留
S D 564	4C~E	14.0	40~230	30	別記	弥生後、庄内

S P 501~512

北西部の2B・C区において検出したピット群で、第14層上面を構築面とする。平面円形のものが多くを占め、規模は直径20cm、深さ10cm程度のS P 504・505・509の他は、直径47~117cm、深さ24~74cmを測る大型のピットである。遺物はS P 511から時期不明の土師器片が出土したのみで、遺構の時期は不明である。

S P 513~5161

主に北部・西部・南東部で集中して検出され、南東部では掘立柱建物2棟(S B 501・502)を構成するピットが検出された。平面円形を呈するものが多い。各ピットからの出土遺物は少量で、そのうち図化したものはS P 5148からの126、S P 558からの127のみである。126は壺で、復元口径15.8cmを測る。調整は外面が肩部~口縁部に粗いタテハケ、肩部に細かいヨコハケ、内面が縦方向のヘラケズリである。127は壺で、体部最大径23.2cmを測る。調整はヘラミガキを多用し、体部内面はハケである。角閃石を含まない胎土で他地域産と考えられる。

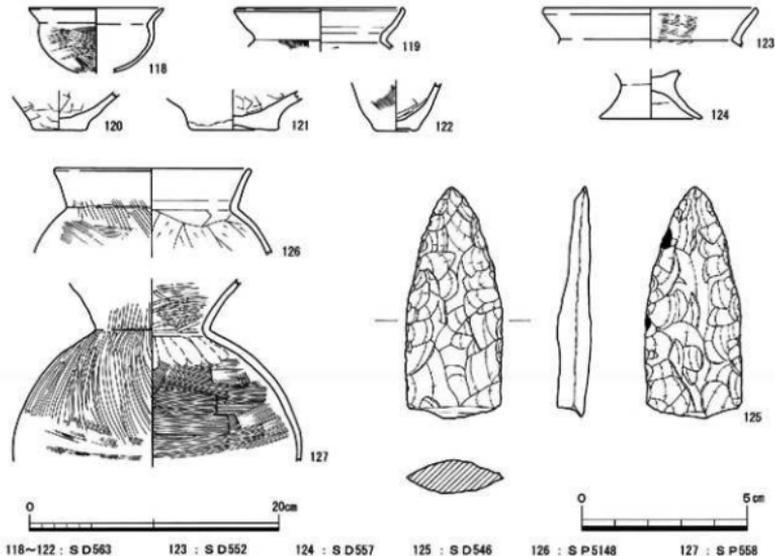
表3 第5面ピット一覧表

遺構名	地区	平面形	径 (cm)	深さ (cm)	埋 土 (上から)	遺 物
S P 501	2B	円	62×85	65	別記	
S P 502	◇	◇	47×51	50	◇	
S P 503	◇	楕円	50×60	34	◇	
S P 504	◇	◇	14×15	2	灰褐色極細粒砂混粘土	
S P 505	◇	円	22×23	6	別記	
S P 506	◇	◇	64×102	28	◇	
S P 507	2C	不整円	117×128	74	◇	
S P 508	◇	円	47×53	30	◇	
S P 509	◇	◇	19×21	14	灰褐色極細粒砂混粘土	
S P 510	◇	◇	108×113	24	別記	
S P 511	◇	不整円	72×93	40	◇	不明
S P 512	◇	楕円	65×76	30	◇	
S P 513	1C	円	50×51	12	褐灰色極細粒砂混シルト	
S P 514	◇	楕円	28×30	6	◇	
S P 515	◇	◇	22×30	11	◇	
S P 516	◇	円	24×28	17	時灰色極細粒砂混粘土質シルト	
S P 517	◇	◇	30×32	19	◇	
S P 518	◇	◇	28×29	18	◇	
S P 519	◇	◇	27×28	16	◇	
S P 520	◇	◇	38×43	15	◇	
S P 521	1D	◇	25×30	11	◇	
S P 522	◇	◇	33×37	14	◇	
S P 523	◇	◇	29×30	19	◇	
S P 524	◇	楕円	29×34	10	褐灰色極細粒砂混シルト	

遺構名	地区	平面形	幅 (cm)	深さ (cm)	埋 土 (上から)	遺 物
S P 525	*	円	20×21	10	褐色細粒砂混シルト	
S P 526	*	*	28×29	16	暗灰色極細粒砂混粘土質シルト	
S P 527	1E	楕円	26×53	14	淡灰黄色極細粒砂混シルト	
S P 528	*	門	16×18	11	褐色極細粒砂混シルト	
S P 529	*	不明	26×-	11	*	
S P 530	1F	門	16×23	10	*	
S P 531	2A	*	23×34	30	暗黄褐色極細粒砂混粘土	
S P 532	2A-B	*	30×32	19	灰黄褐色細粒砂混シルト	
S P 533	2B	*	36×40	29	*	
S P 534	*	*	30×36	32	暗灰褐色極細粒砂混シルト(供含む)	
S P 535	*	*	14×15	20	灰黄褐色細粒砂混シルト	不明
S P 536	*	*	20×22	22	暗黄褐色極細粒砂混粘土	
S P 537	*	不整円	27×31	22	*	
S P 538	*	楕円	48×62	45	*	
S P 539	*	円	14×15	9	*	
S P 540	*	*	26×28	10	*	
S P 541	*	楕円	30×56	12	淡灰黄色極細粒砂混粘土質シルト・灰黄褐色極細粒砂混粘土質シルト	
S P 542	2C	*	25×31	24	褐色粗粒砂混シルト	
S P 543	2C-D	不明	87×-	12	*	
S P 544	2D	楕円	22×36	14	*	
S P 545	*	円	19×20	22	*	
S P 546	*	*	22×36	22	*	庄内
S P 547	*	*	27×29	10	褐色細粒砂混シルト	
S P 548	*	*	26×29	26	*	
S P 549	*	*	31×33	28	*	
S P 550	*	不明	43×-	16	*	
S P 551	*	楕円	34×49	28	*	
S P 552	*	不明	27×-	5	*	布留
S P 553	2E	円	25×25	20	*	
S P 554	*	*	14×19	14	*	
S P 555	*	楕円	29×45	22	*	
S P 556	*	門	9×11	8	*	
S P 557	*	楕円	24×37	7	*	
S P 558	*	*	32×71	6	暗灰色細粒砂混シルト	庄内~布留 127
S P 559	2F	円	27×29	14	褐色細粒砂混シルト	
S P 560	*	*	30×30	13	*	
S P 561	*	*	21×24	8	*	
S P 562	*	*	27×35	8	*	
S P 563	*	不整円	25×34	6	*	
S P 564	*	円	20×20	6	*	
S P 565	*	楕円	34×55	6	*	
S P 566	*	円	27×30	13	*	
S P 567	*	*	63×69	8	*	
S P 568	3A	*	22×25	12	灰黄褐色細粒砂混シルト	
S P 569	*	楕円	17×22	10	*	
S P 570	*	円	37×45	7	*	不明
S P 571	*	楕円	35×47	14	*	
S P 572	*	*	24×24	24	*	
S P 573	3B	*	66×93	19	*	弥生後
S P 574	*	円	34×36	15	*	
S P 575	*	楕円	32×40	20	*	
S P 576	*	門	31×35	26	灰色細粒砂混粘土・暗灰色極細粒砂混粘土質シルト	
S P 577	*	*	46×48	25	灰黄褐色細粒砂混シルト	
S P 578	*	楕円	33×89	32	*	
S P 579	*	*	29×34	19	*	
S P 580	*	円	26×30	14	*	
S P 581	*	楕円	22×48	13	*	
S P 582	*	*	33×46	28	灰色極細粒砂混粘土・暗灰色極細粒砂混粘土質シルト	
S P 583	*	円	17×20	11	灰黄褐色細粒砂混シルト	
S P 584	*	*	20×20	12	*	
S P 585	*	*	53×54	16	*	
S P 586	*	楕円	37×55	21	*	
S P 587	*	*	45×73	13	*	
S P 588	*	円	45×48	16	*	

通稱名	地区	平面形	径 (cm)	深さ (cm)	埋 土 (上から)	違 物	
SP589		3C	楕円	17×22	18		
SP590	*	円	22×23	16	*		
SP591	*	*	37×45	20	灰色細粒砂混粘土質シルト		
SP592	*	*	37×40	9	*		
SP593	3-4C	*	53×57	15	*		
SP594	3D	*	34×35	21	*		
SP595	*	*	21×22	17	灰褐色細粒砂混シルト	庄内	
SP596	*	*	17×19	10	*		
SP597	*	*	19×20	13	*		
SP598	*	楕円	40×57	22	暗灰色粘土質シルト・炭粉細粒砂・暗褐色細粒砂混粘土		
SP599	*	*	13×20	4	灰褐色細粒砂混シルト		
SP5100	*	*	43×57	18	*		
SP5101	3E	不整形	25×31	14	褐色細粒砂混シルト		
SP5102	*	楕円	21×37	28	*		
SP5103	*	円	20×21	8	灰褐色細粒砂混シルト		
SP5104	*	*	25×28	13	*		
SP5105	*	*	17×18	10	*		
SP5106	*	楕円	23×27	10	*		
SP5107	*	*	29×43	20	*		
SP5108	*	*	45×100	13	褐色細粒砂混シルト(炭含む)	弥生後～布留	
SP5109	*	*	21×29	30	灰青色粘土混細粒砂		
SP5110	*	*	34×47	42	*	不明	
SP5111	*	円	43×51	55	褐色細粒砂混シルト(炭含む)・灰色細粒砂混粘土		
SP5112	*	不整形	41×52	7	灰褐色細粒砂混シルト		
SP5113	*	円	17×19	10	暗褐色細粒砂混シルト		
SP5114	*	*	28×33	15	*		
SP5115	*	*	17×20	9	*	不明	
SP5116	*	*	33×37	18	*		
SP5117	*	楕円	40×92	23	*	庄内	
SP5118	3F	*	22×56	8	暗褐色細粒砂混シルト		
SP5119	4A	不整形	48×54	22	暗褐色細粒砂混粘土		
SP5120	*	円	39×41	21	*		
SP5121	4B	*	64×69	35	暗褐色細粒砂混粘土質シルト・灰色細粒砂混粘土質シルト・灰色細粒砂混粘土・灰色粘土質シルト混細粒砂		
SP5122	*	楕円	28×32	12	灰色細粒砂混粘土		
SP5123	*	*	20×30	32	*		
SP5124	4B-C	不明	48×-	31	褐色細粒砂混粘土質シルト		
SP5125	*	楕円	70×135	10	*		
SP5126	4C	*	37×47	34	*		
SP5127	*	*	15×22	10	*		
SP5128	4-5D	円	23×25	11	暗褐色細粒砂混シルト	庄内	
SP5129	4D	*	24×26	20	暗褐色細粒砂混粘土(炭含む)	布留	
SP5130	*	*	33×39	14	暗褐色細粒砂混シルト	不明	
SP5131	*	*	40×44	14	*		
SP5132	*	不明	31×-	34	暗褐色細粒砂混粘土質シルト・灰色細粒砂混粘土質シルト・灰色粘土質シルト		
SP5133	*	楕円	43×49	22	暗褐色細粒砂混シルト・暗褐色細粒砂混粘土	不明	
SP5134	*	円	37×38	19	暗褐色細粒砂混シルト		
SP5135	*	*	32×33	12	*		
SP5136	5D	楕円	28×58	13	*	不明	
SP5137	4E	楕円	22×24	16	褐色細粒砂混粘土質シルト(炭含む)		
SP5138	*	*	38×38	19	暗褐色細粒砂混粘土質シルト		
SP5139	*	*	35×48	26	暗褐色細粒砂混粘土		
SP5140	*	*	28×32	12	暗褐色細粒砂混シルト		
SP5141	*	*	27×29	16	*		
SP5142	*	*	28×30	14	*		
SP5143	*	楕円	32×38	13	*		
SP5144	*	円	32×33	11	暗褐色細粒砂混粘土質シルト		
SP5145	*	*	23×25	9	*		
SP5146	*	楕円	29×63	14	*		
SP5147	*	円	31×33	20	暗褐色細粒砂混シルト	不明	
SP5148	*	*	33×37	19	*	庄内 126	
SP5149	*	楕円	19×25	13	*		
SP5150	*	*	31×34	15	*		
SP5151	*	*	24×32	13	*		

遺構名	地区	平面形	径 (cm)	深さ (cm)	埋 土 (上から)	遺 物
SP5152	*	不整円	31×34	18	暗灰色粘土質シルト混優粒砂・暗褐色極細粒砂混粘土	布留
SP5153	*	楕円	22×31	15	暗褐色細粒砂混シルト	不明
SP5154	*	円	20×23	13	*	
SP5155	*	*	33×33	15	*	庄内
SP5156	*	楕円	27×29	18	*	庄内
SP5157	*	*	29×49	16	*	
SP5158	4F	*	35×96	11	*	
SP5159	*	円	34×36	18	暗褐色細粒砂混粘土質シルト	
SP5160	*	*	22×24	10	*	
SP5161	*	楕円	24×33	11	暗褐色細粒砂混シルト	

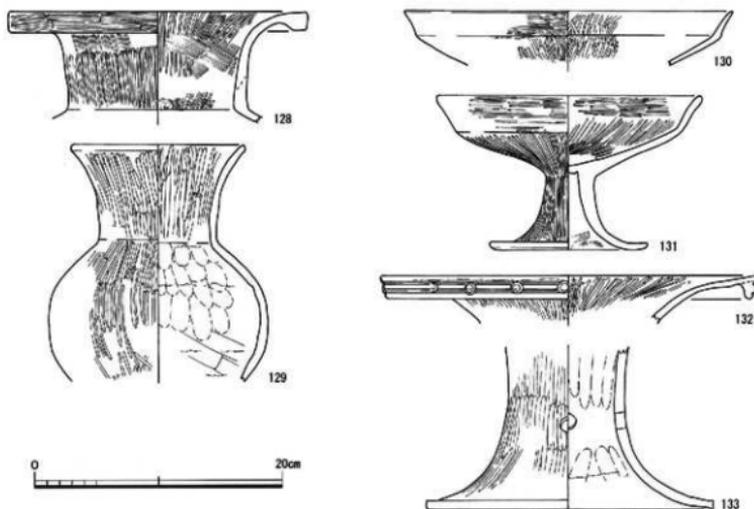


第29図 第5面溝・ピット出土遺物

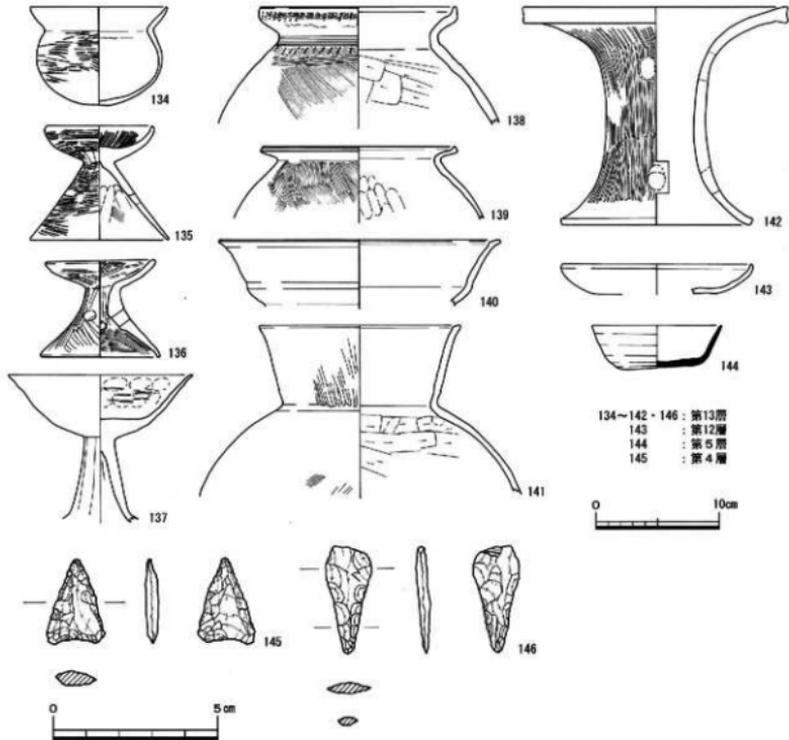
〈包含層出土遺物〉

128~133は2F区の第5面、S I 501とS D538の間でまとまって出土したものである。128は口縁端部を台形に垂下させる広口壺で、口径24.0cm・頸部径14.2cmを測る。調整はハケ後ヘラミガキである。129は長頸壺で、復元口径14.0cm・体部最大径17.6cm・頸部径9.4cmを測る。調整はヘラミガキを多用する。130・131は高杯である。130は復元口径26.4cm、131は復元口径21.4cm・器高12.7cm・底径13.2cm・脚高6.1cmを測り、杯部高が脚高を凌ぐ形態である。調整は共にヘラミガキを多用する。132・133は器台で、同一個体と考えられる。復元口径30.4cm・底径23.2cmを測り、器高は22cm程度に復元できる。調整はヘラミガキを多用する。垂下させた口縁端部外面に2条の凹線と竹管文を巡らせ、柱状部下位4方向に円孔を施す。

134は小形丸底壺で、復元口径11.0cm・体部最大径10.2cm・器高8.1cmを測る。体部外面にヘラミガキが確認できるが、その他は磨耗の為不明である。布留式古相に比定される。3C区第13層出土。135・136は小形器台で、136は中空である。口径・器高・底径は、135が9.0・9.4・11.2cm、136が9.0・8.9・9.6cmを測る。共に調整はヘラミガキを多用し、脚部内面はハケで、脚部3方向に円孔を穿つ。135は布留式古相、136は庄内式古相に比定される。共に4D区第13層出土。137は高杯で、復元口径15.0cmを測る。口縁部内面にヘラミガキが確認できるが、他は磨耗の為調整不明。布留式新相に比定される。138は甕で、復元口径16.0cmを測る。受口状口縁の外側～肩部に櫛描直線文・櫛描刺突文を巡らせる。調整は体部外面ハケ、内面ヘラケズリである。生駒西麓産の胎土であるが、口縁部形状や装飾の特徴から近江地方からの影響が看取される。庄内式古相のものか。139は甕で復元口径16.0cmを測る。口縁端部を小さく積み上げ、体部調整は外面ハケ、内面ナデである。140は複合口縁壺で、復元口径22.8cmを測る。139は阿波地方、140は吉備地方からの搬入品と考えられ、時期は布留式古相に比定される。137～140は2E・F区第13層出土。141は直口壺で、復元口径16.2cmを測る。調整は口縁部外面ヘラミガキで、体部は上位ナデ、下位ハケ、内面ヘラケズリである。布留式古相に比定される。4D区第13層出土。142は器台で、上部・下部を図上で復元したものである。復元口径21.4cm・器高18.0cm・底径15.5cmを測る。調整は外面ヘラミガキで、縦長の円孔を二段に施す。弥生時代後期に比定される。5C・D区第13層出土。143は土師器皿で、復元口径15.4cm・器高2.5cmを測る。磨耗の為調整不明。奈良時代末～平安時代初頭に比定されよう。3・4C区第12層出土。144は須恵器杯身で、口径10.4cm・器高3.5cm・底径7.0cmを測る。飛鳥時代後半に比定される。2E・F区第5層出土。145は凹釜無茎式石甌で、先端をわずかに欠く。残存長2.6cm・幅1.8cm・厚さ0.4cmを測る。全面に調整剥離



第30図 第5面出土遺物



第31図 包含層出土遺物

を施す。3 D区第4層出土。146は尖基無基式石鏃で、逆刺は丸みをもつ。先端を欠き、残存長3.3cm・幅1.4cm・厚さ0.4cmを測る。全面に調整剥離を施す。第13層出土。

第3章 まとめ

今回の調査では、古墳時代前期を中心に、弥生時代後期から近世にわたる遺構・遺物を検出した。出土遺物量はコンテナ16箱を数える。

古墳時代初頭～前期では第5面において居住域と墓域が近接している状況が確認された。南部の郡川遺跡第3次(KR94-3)調査地では、弥生時代後期の竪穴住居1棟・土器棺墓1基、弥生時代後期から布留式期にわたる周溝墓4基が検出されており、今回の調査と合わせて、居住域の北への移動が確認されたといえ、当該期の集落構成を知るうえで重要な成果が得られた。

特筆すべき遺物としてSD564から出土した多量の製塩土器がある。脚台Ⅲ式にあたり、共伴土器から見て古墳時代初頭(庄内式期新相)に比定される。脚台式の製塩土器は内陸部からの出土例は少なく、八尾市域では葦振遺跡・東弓削遺跡で確認されているにすぎない。葦振例は布留式期古相、東弓削例は不明で、本例は八尾市域最古例となろう。

弥生時代後期の土器は調査地内東部に顕著に認められ、当時の集落域が東に広がっている可能性がある。

調査区北西部で検出した第14層上面遺構のピット(SP501-512)については、層的にみて古墳時代前期以降のものである。包含層出土遺物から勘案して古墳時代後期～奈良時代頃に帰属する可能性があるが、明確にはしえなかった。調査地東部には、奈良時代からの古代寺院である高麗寺が位置していることから、周辺での当該期の遺構の検出に期待したい。

中世・近世以降は、ごく近代までは水田・鳥畑・井戸・耕作溝といった農耕に関連する遺構のみが検出され、長く生産域となっていた状況である。第3面の大規模な鳥畑301～303については、南の郡川遺跡第3次調査でも同様の鳥畑が検出されており、一連の耕作地と捉えられよう。

なお下層確認では、調査区北東部第19層から縄文時代後期～晩期頃の土器が出土した。郡川遺跡第3次調査でも類似する層位からの土器の出土が確認されており、今後の周辺での調査における遺構の確認等を期待したい。

参考文献

- ・井上智博 1999「鳥畑の考古学的研究－池島・福万寺遺跡の事例の再検討－」『光陰如矢－萩田昭次先生古稀記念論集－』「光陰如矢」刊行会
- ・(財)大阪府文化財センター 2003「古墳出現期の土師器と実年代 シンポジウム資料集」
- ・松山聡・佐伯公子・清川陽子 1993「第IV章 第3節 石器」『河内平野遺跡群の動態Ⅵ』大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター
- ・広瀬和雄 1978「岬町遺跡群発掘調査概要－小島東遺跡・淡輪遺跡－」大阪府教育委員会
- ・加藤志月 1988「畿内出土の「製塩土器」の分布について」『網干善教先生華甲記念考古学論集 網干善教先生華甲記念会』

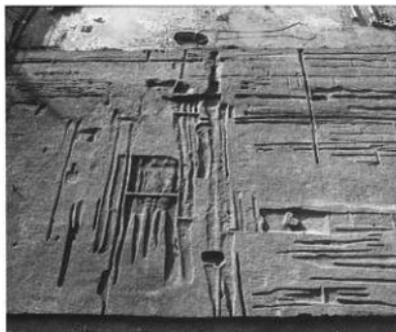
图 版



調査地より北方を望む



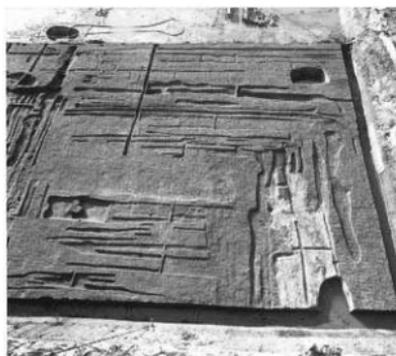
調査地より東方を望む



第1面南東部（東から）



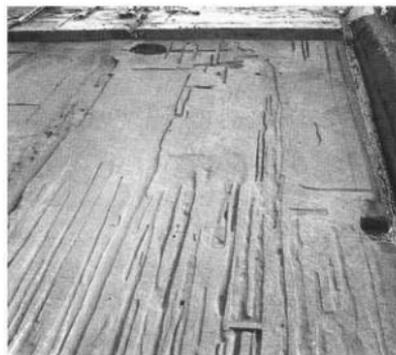
SD101木樋（北から）



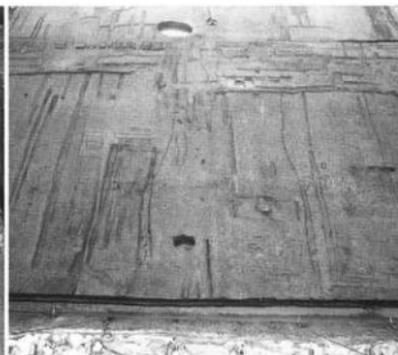
第1面北東部（東から）



SD101木樋（西から）



第1面南西部（西から）



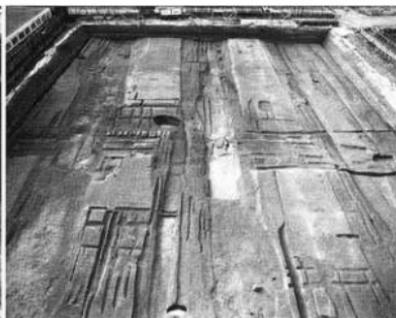
第2・3面東部（東から）



全景 (上が東)

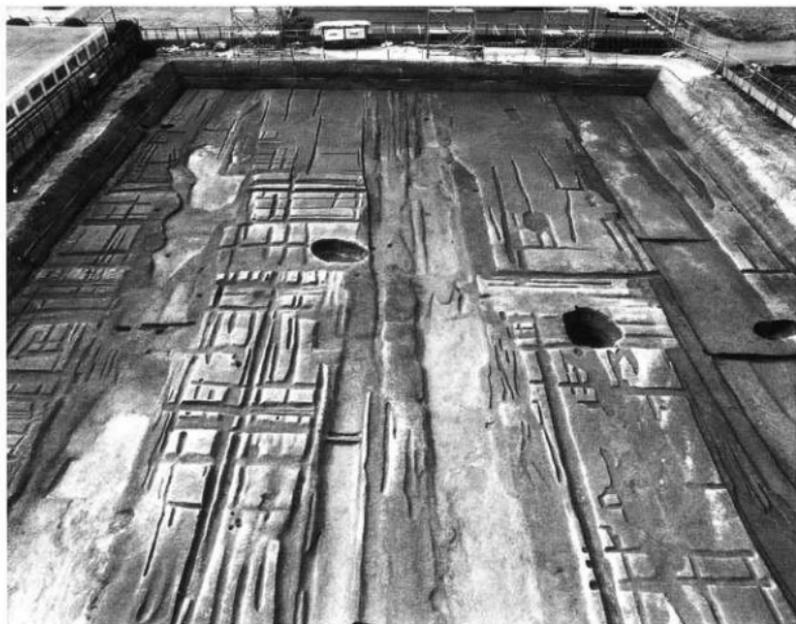


全景 (西から)



全景 (東から)

図版 4
第 4 面



全景 (東から)

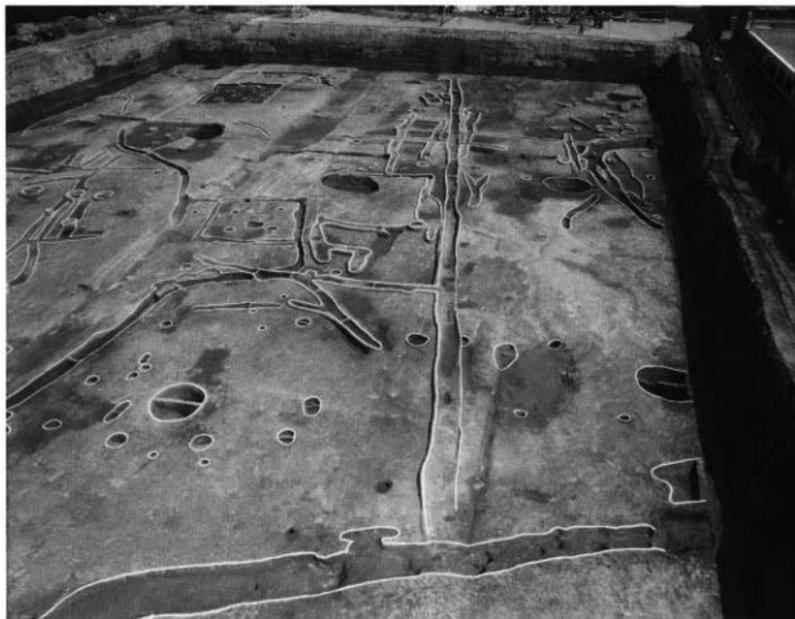


SE 401 (北から)

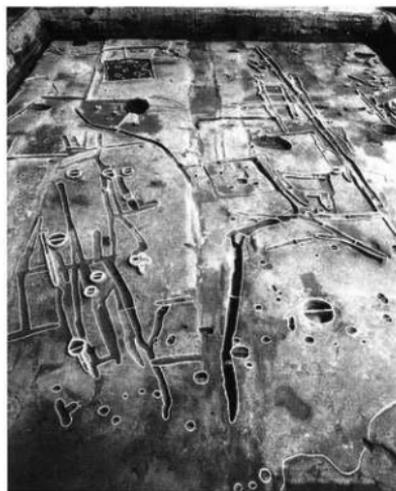


全景 (上が東)

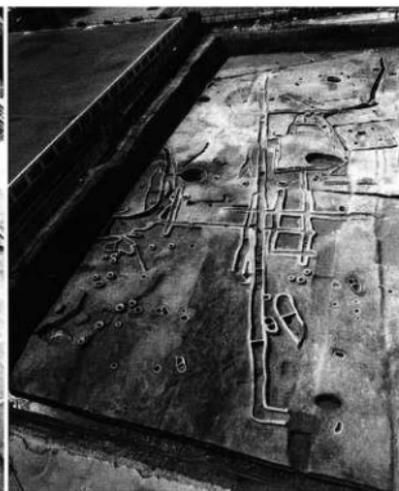
図版6
第5面



全景 (西から)



全景 (西から)



南部 (東から)



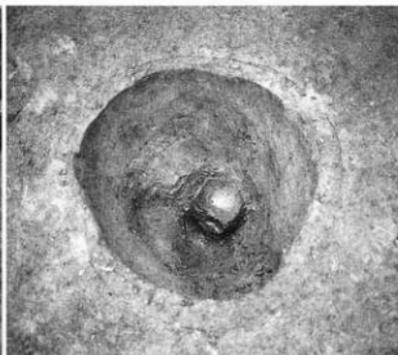
S I 501・S D 538 (北から)



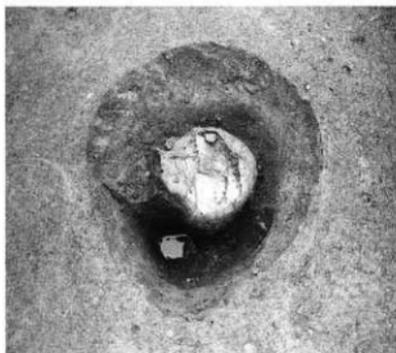
S I 501 (南から)



S I 501 遺物出土状況 (西から)



S I 501 P2 (南から)



S I 501 P3 (北から)



S I 501 P4 (南から)



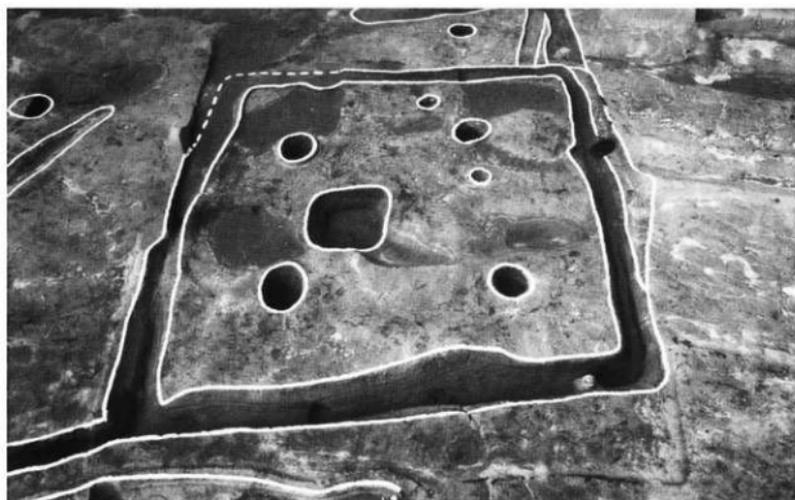
S E 501 (東から)



S E 502 (東から)



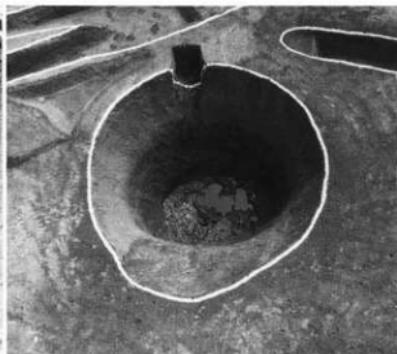
S I 502周辺 (西から)



S I 502 (南から)



S E 503西壁 (東から)



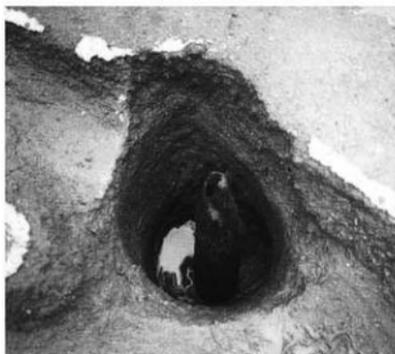
S E 503 (北から)



S P 5108 (東から)



S P 5109 (東から)



S P 5110 (南から)



S P 5111 (東から)



S D538 (南から)



S D543 (東から)



S D538南部遺物出土状況 (東から)



S D543西壁 (東から)



S D538遺物出土状況 (西から)



S D543遺物出土状況 (北から)



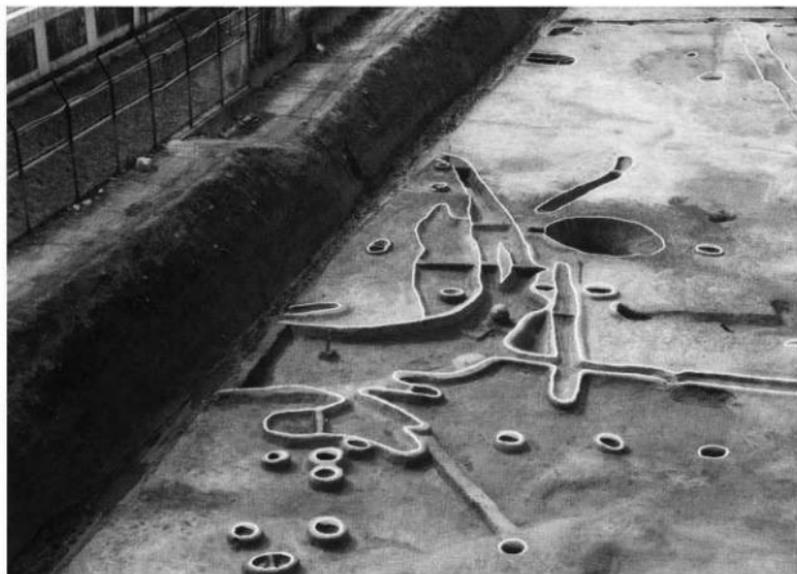
S D544 (東から)



S D544東部遺物出土状況 (東から)



S D544東端遺物出土状況 (北から)



SD564 (東から)

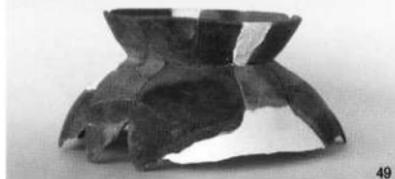
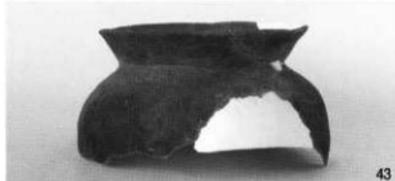
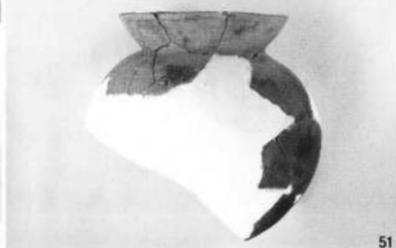
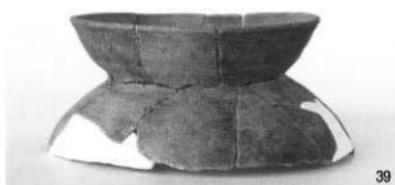


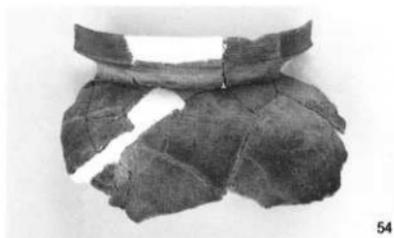
SD564遺物出土状況 (東から)

図版 14
出土遺物

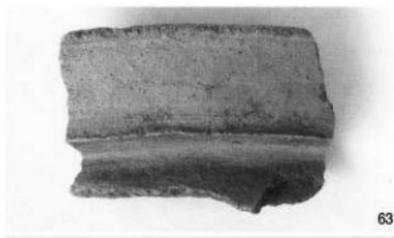




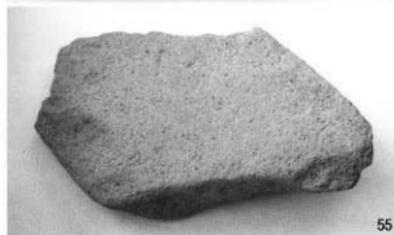




54



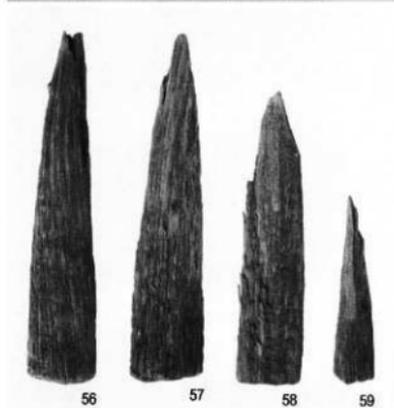
63



55



65



56

57

58

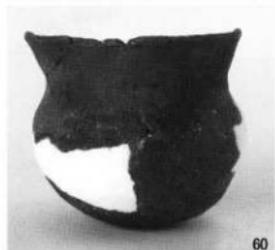
59



69



81



60



82



83

S I 501 (54・55)、SB 501 (56~59)、SE 501 (60)、SE 502 (63)、SD 538 (65)、SD 543 (69・81~83)



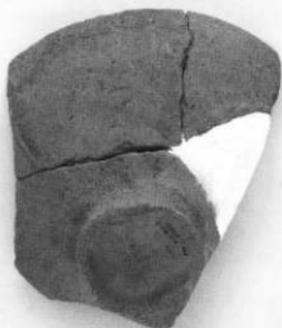
87



102



93



104



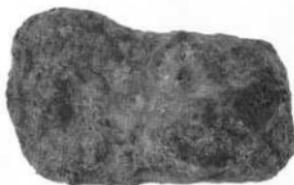
99



100



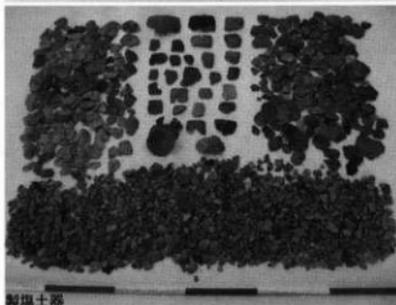
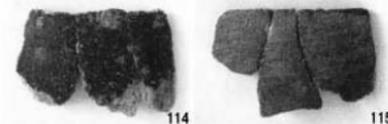
101



105



106



製埴土器



107



124

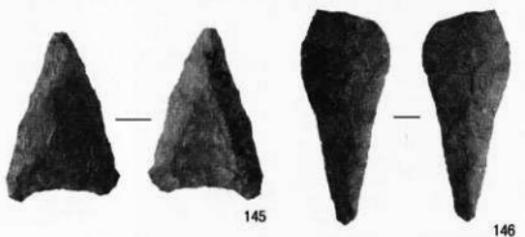
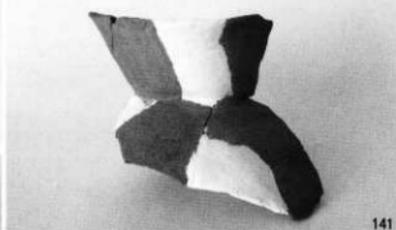
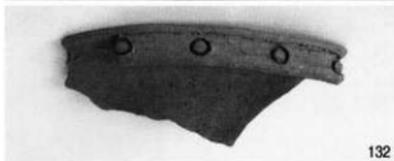


127



125

S D 564 (106・107・111~116・製埴土器)、S D 546 (127)、S P 558 (127)



146

第5面 (128・131・132)、第13層 (134~136・138・141・146)、第5層 (144)、第4層 (145)

報 告 書 抄 録

ふりがな	ざいだんほうじんやおしぶんかざいちょうさげんきゅうかいほうこく92						
書名	財団法人八尾市文化財調査研究会報告 92						
副書名	I 郡川遺跡(第3次調査)・II 水越遺跡(第5次調査)						
巻次							
シリーズ名	財団法人八尾市文化財調査研究会報告						
シリーズ番号	92						
編著者名	坪田真一						
編集機関	財団法人八尾市文化財調査研究会						
所在地	〒581-0821 大阪府八尾市幸町4丁目58番地の2					TEL 072-994-4700	
発行年月日	西暦2006年10月						

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
郡川遺跡 (第3次調査)	大阪府八尾市郡川 1丁目	27212	60	135度 38分 11秒	34度 37分 16秒	19940524 ～ 19940803	約1,188	受水池築造 工事
水越遺跡 (第5次調査)	大阪府八尾市服部川 1丁目	27212	42	135度 38分 11秒	34度 37分 19秒	19961024 ～ 19960325	約2,000	高安受水場 配水池築造 工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
郡川遺跡 (第3次調査)	集落	弥生時代～ 古墳時代前期	竪穴住居・墳墓・ 土器棺墓・石器製 作場・自然河川	弥生土器・土師器・ 石器	円形墳墓
	生産域	中世～近世	水田・鳥畑・竹筒 暗渠		
水越遺跡 (第5次調査)	集落	古墳時代初頭～前 期	竪穴住居・掘立柱 建物・井戸	土師器・製塩土器・ 鉄製品(鉄斧?)	
	生産域	中世～近世	水田・鳥畑・井戸		

財団法人 八尾市文化財調査研究会報告92

I 郡川遺跡 (第3次調査)

II 水越遺跡 (第5次調査)

発行 平成18年10月
編集 財団法人 八尾市文化財調査研究会
〒581-0821
大阪府八尾市幸町4丁目58番地の2
TEL・FAX (072) 994-4700

印刷 株式会社印刷センター
〒582-0001
大阪府柏原市本郷5丁目6番25号
TEL (072) 972-5918
表紙 レザック66 <260Kg>
本文 ニューエイジ <70Kg>
図版 マットアート <110Kg>

